女鑑

第十六年第十二號




季節向き新柄物漏れなく取揃へ
店内一面に陳列致し置候間御來
觀被成下候樣奉希上候
地方よりの御注文は御書面にて
御申付被下度く即日小包郵便を
以て御届け可申上候尚ほ注文御
案内書は御一報次第
呈上可仕候
三越呉服店
東京日本橋區駿河町

女鑑　第十六年第十二號　目次



君ケ代



（子爵 S H 君撮影）

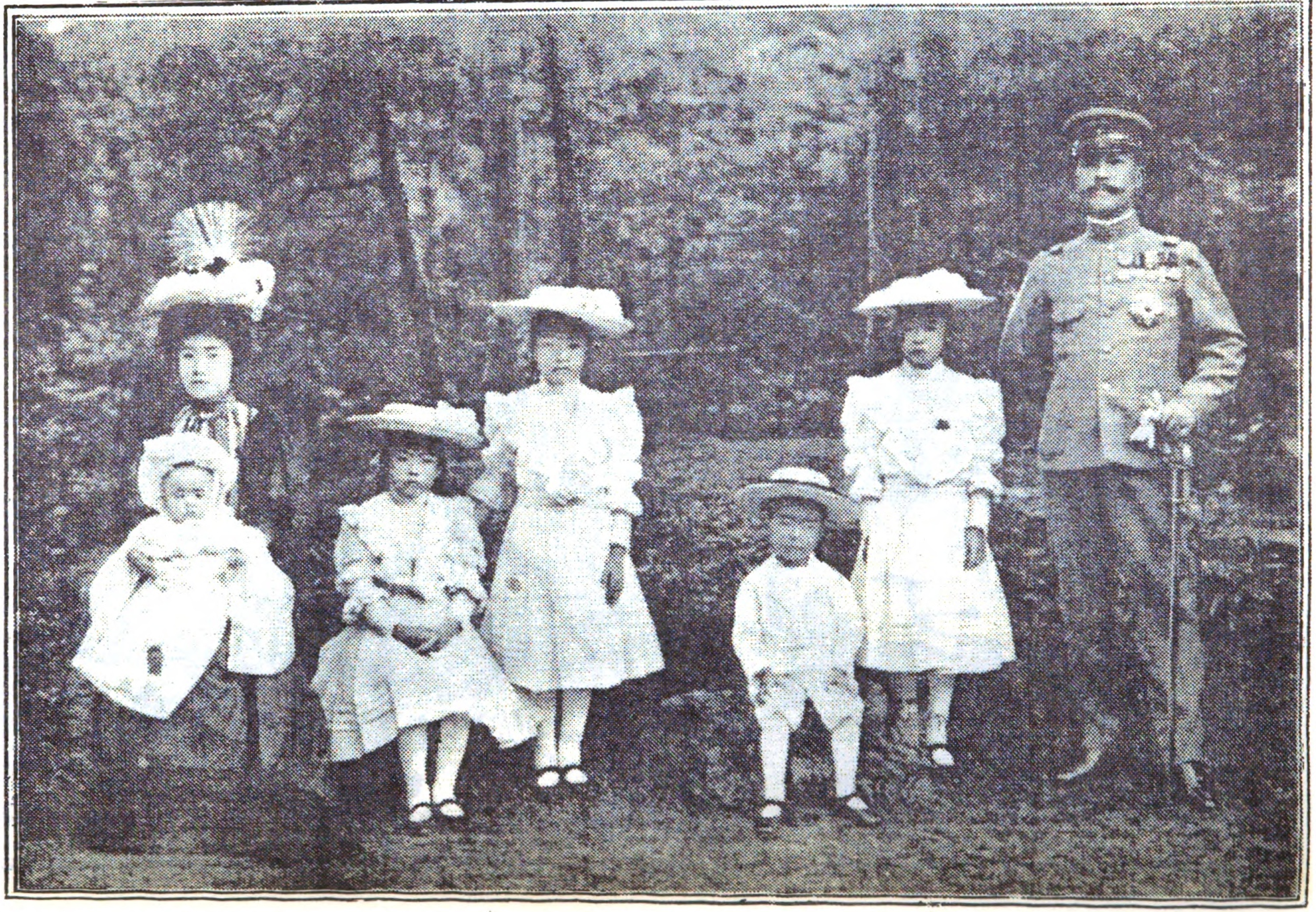
皇室の



御繁栄

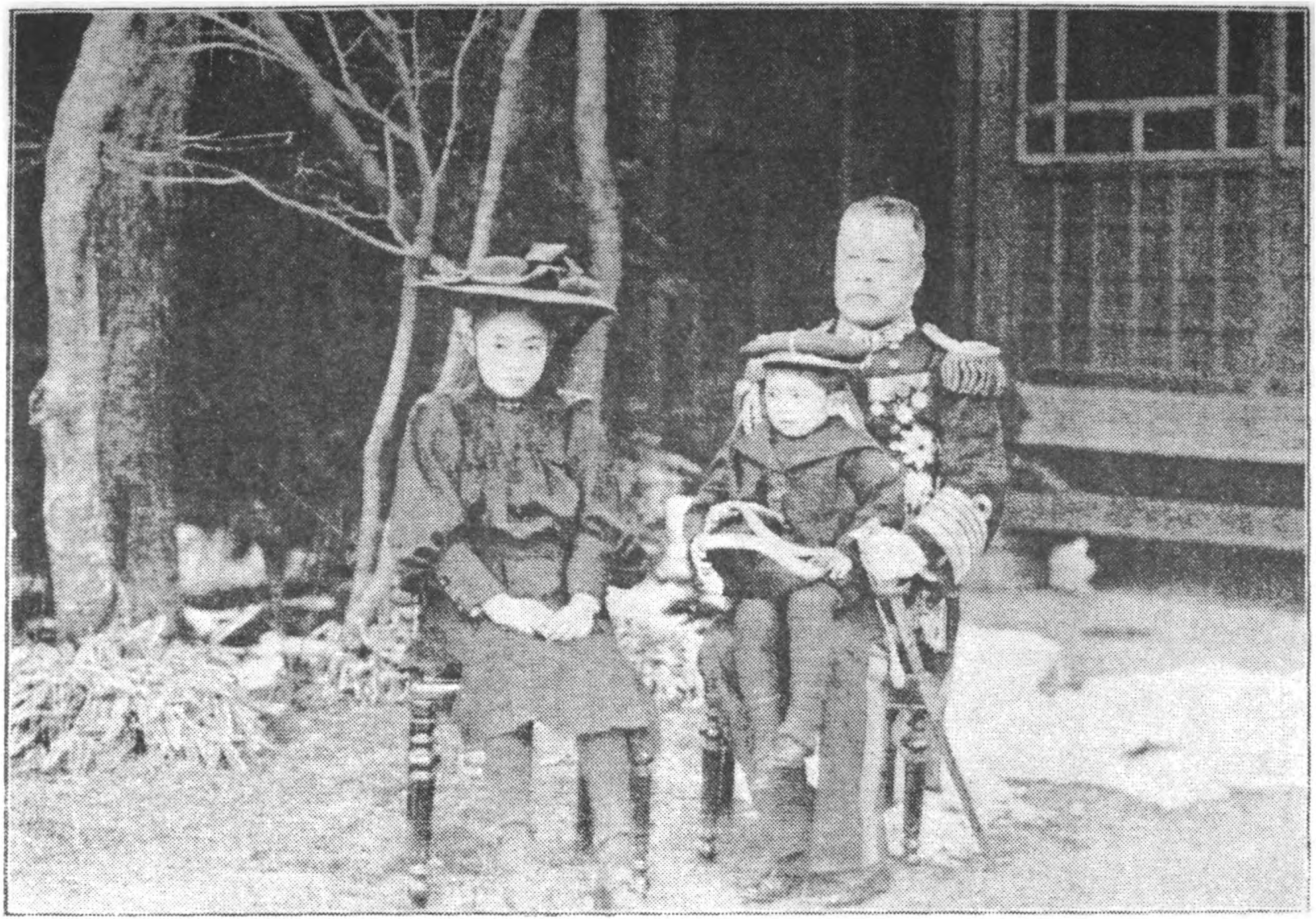


閑院宮の御家庭



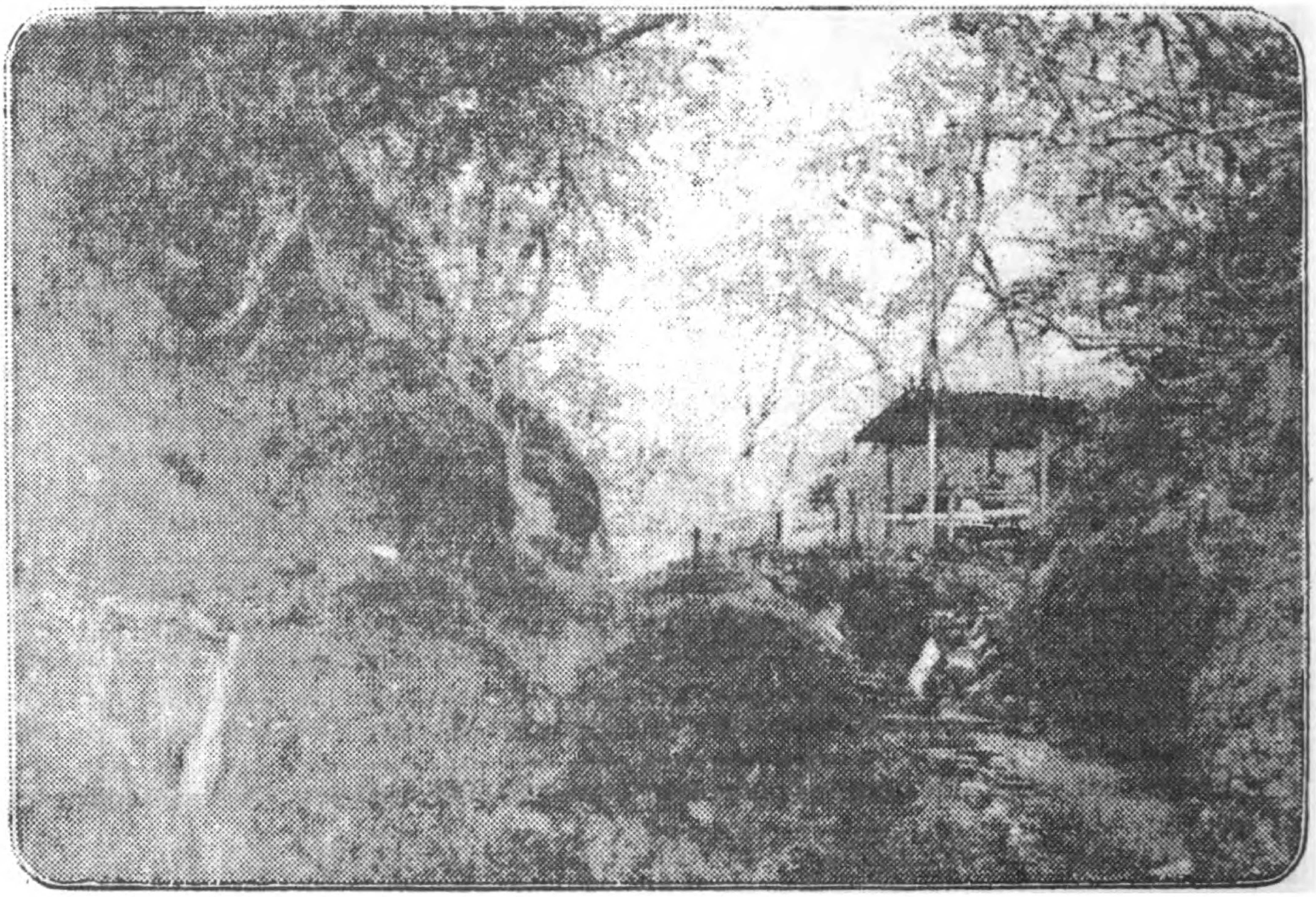
右より
閑院宮載仁親王殿下、第一王女恭子女王、第二王子春仁王、第二王女茂子女王、第三王女季子女王、閑院宮妃智惠子殿下、第四王女寛子女王

樺山伯の家庭



秋の名所

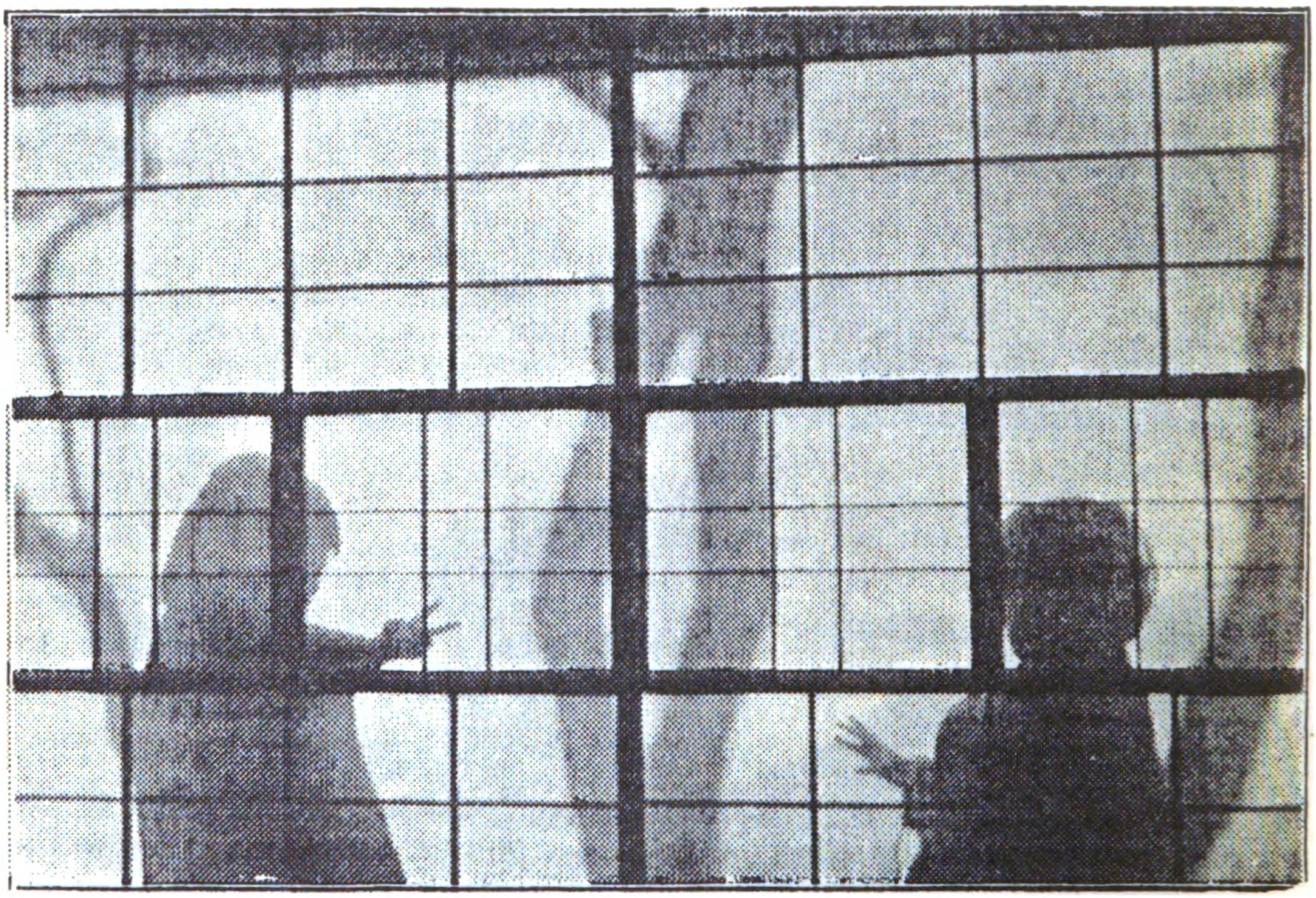

上野公園


伊香保

晝と夜

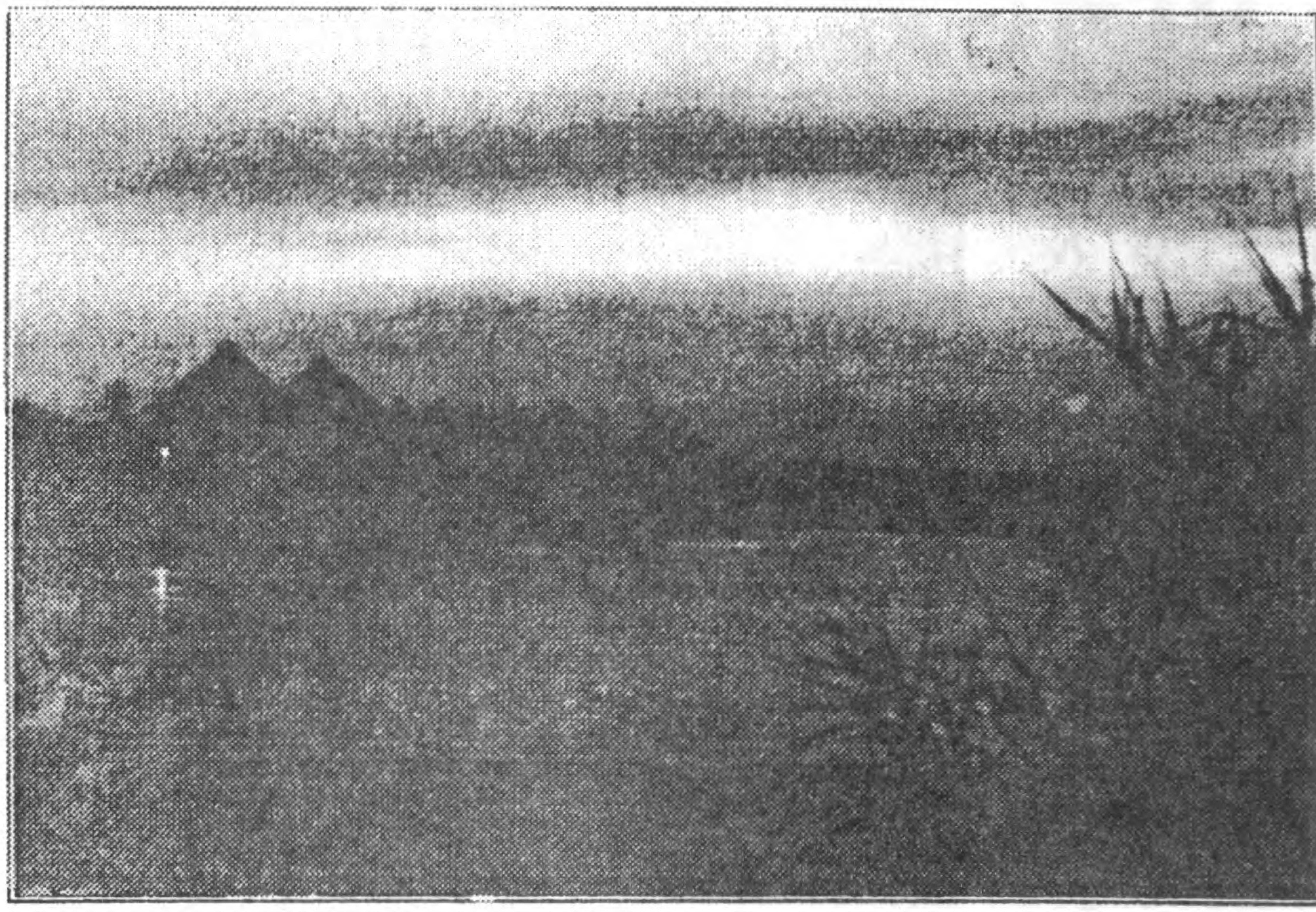
幼兒百態（六）

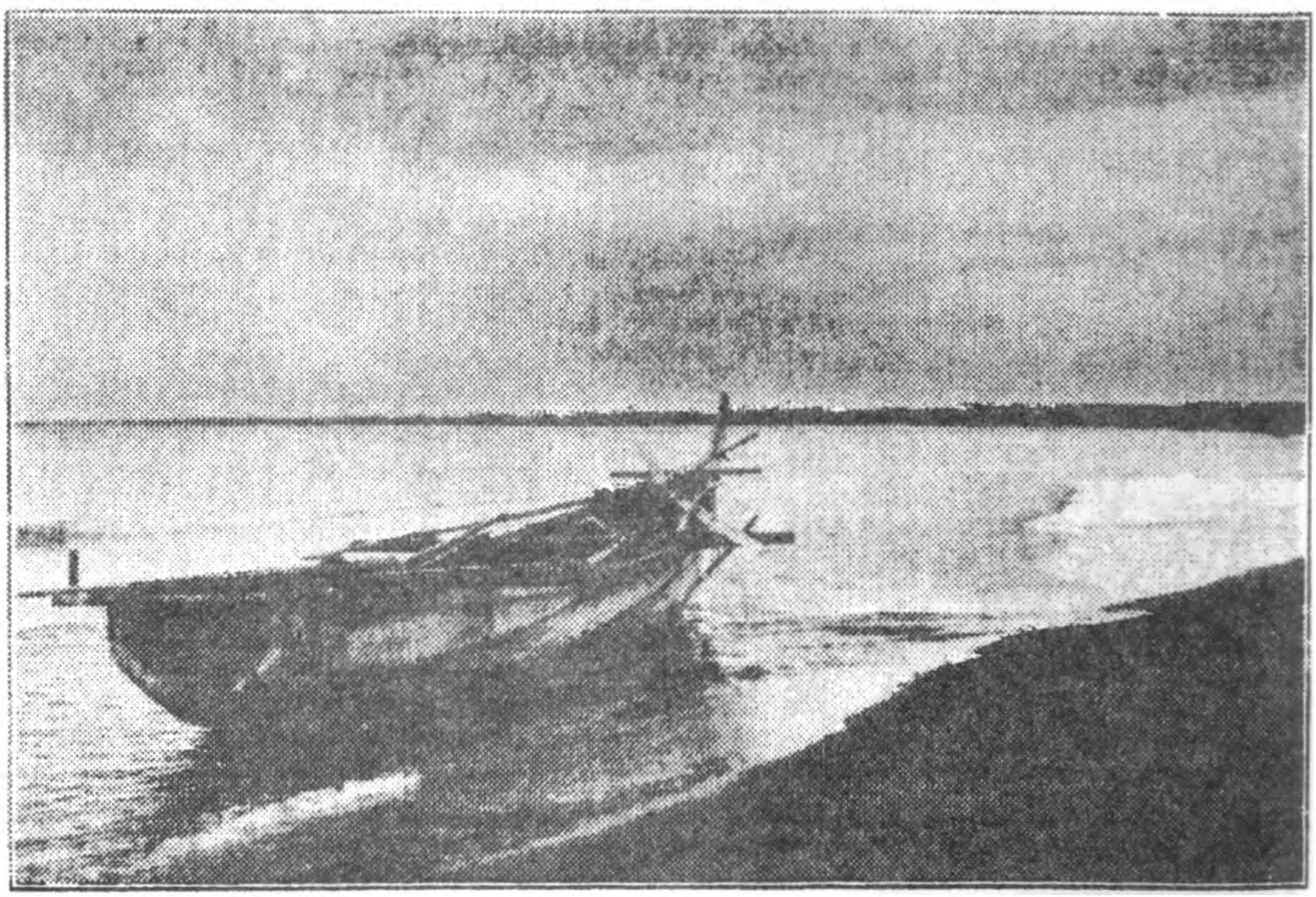




井伊直方君撮影

相州片瀬





井伊直方君撮影

世界最新の育兒書

愛國婦人會々長 岩倉公爵夫人題歌
育兒會幹事 中山夫人題歌
東京外國語學校教授 尺秀三郎君著

こども

最新版 父母教師の必讀書

密畫百拾七個入
大和綴美裝
正價金五十錢
郵送料金八錢

子供は如何に扱ふべきか。我が子は如何に育つべきかは世の父母教師の日夜に苦勞するところなり。本書は此の需めに應ぜんが爲め世界各國の子供の性質幷に育て方を擧げて一々之れを說明し且つ批評したるものなれば世の父母は勿論教育者及び心理學者倫理學者の必讀書なり

發兌元 東京本郷區本郷一丁目 育成會營業部 大賣捌 大阪 寶文館



天長節

本日は今上天皇陛下の御降誕あらせ給ひし佳節にして、五月廿八日皇后陛下御誕辰の佳節なる地久節とゝもに萬民鳳闕を五雲の外に望み、聖壽の無窮を祝し奉る日なり、恭しく惟るに、わが允文允武なる　今上天皇陛下には、天下の風雲極めて急なりし、嘉永五年に御降誕あらせられ、維新の大業を樹て、極めて平和に明治の新天地を開かせ給ふ、御厚德の君主として、實に世界の歴史にも其例なく萬國齊しく渇仰し奉る所なり、爾來世界の一等國として、日清の役、北清事件、征露の戰常に國威を輝かし給ふこと、單に聖德の然らしむる所にして、　兩陛下の民を愛し、下を恤み給ふの聖慮に至つては、萬民の常に感佩し奉る所にして、幸に記者等生を此聖世に享け、聖德に浴し奉るを得るの光榮、何物か之に加かん東宮殿下御父帝の御叡明をうけさせ給ひ、　東宮妃殿下また御母皇后陛下の御至慈をうけさせ給ひ、　皇孫殿下にも、未だ御幼沖に渡らせ給へど、御聰明なる自ら天つ日嗣の御資性を備へ給ふこと、かへすがへすも、めでたき限りならずや、謹みて皇室の御繁榮を祝し奉る。

御聖徳

醫學士　山根正次

いとも目出たき天長節に、女鑑の讀者諸君に向つて、兩陛下御聖徳の一端を述べやう、
農家の大厄日は、いふまでもなく二百十日で、この日の天候如何は、實に一國經濟の消長に關するのである、されど都下に逸居して、その日をさへ知らぬものがまた少くはない、然るに畏くも今上陛下には、當日は午前早く御學問所に出御あらせられ、侍從長を氣象臺に遣はして、各地の情況を御下問に相成る、侍從長は氣象臺にて各地よりの電報到着を待つて上奏するのであるが、陛下にはその間御學問所に御待遊ばさるゝとの事で、本年は日曜日なるにも拘らず、例年の如く御下問あらせられたのである、故品川子爵は、その大御心の有難さを洩承りたるより、內務大臣たりし時、侍從長に先つて二百十日の狀況を上奏したことがあつた、その時兩陛下には、御感斜ならず、皇后陛下には

民草の心にかゝる風もなし、科戸の神のまもりますらん

といふ御製さへあつた、實に民をあはれませ給ふことは、この一事にて推はかり奉ることが出來るのである、たゞに二百十日のみならず、天災地變に際し、其被害の民ありと聞し召さるゝや、必ず侍從長を被害地に遣はされ、被害の情況を御下問あり、金員を下賜して、不幸の民を賑はし給ふのである、

先年京都に行幸あらせられた時であつた、東京には麻疹が流行して、けふもきのふもといふやうに、鬼籍に入るものが續々ある、陛下には京都に在らせられて、大御心を東京の麻疹患者の上に注がせ給ひ、池田侍醫局長にその情況を御下問あらせられたのであるが、局長も充分の御答の出來ざりし爲、電報を以て小笠原宮中守衞長に照會された、其時自分は警察醫長であつた故、同守衞長より更に自分に取調方を依

囑せられたが、この痲疹に就ては警視廳に於ても大に注意したれど、傳染病豫防法中に、痲疹病に對しては醫師に屆出の義務がないので、更に材料が統計的に調べられぬ、そこで大御心のほどを警視總監に述べて、各醫會に通牒し、漸く纏つた材料を得たので、それを上奏することになつた、然るに右の如き有樣で、取調べに時日を要したものであるから、陛下よりは御催促があり、更に侍從を東京へ御遣はしになつた、實に恐入つた次第で、民の苦難を思召すに急なる事、斯の如き有樣で、たゞ〳〵感泣の外はない次第である、それから三十二年に、ペストが神戸に發生したことがある、その時の恐慌は一通りでない、陛下には新聞紙また官報にて、その情況を知ろしめし、殊の外宸襟を惱ませられ、岡侍醫局長をお召に相成り、詳く病況を御下問あらせられ、誰が最初に此病に罹り、如何なる鹽梅に死んだか、といふことにまで及ばされ給うた、そこで内務省衛生局へ人を遣はして取調べさせ、更に上奏に及んだといふ事である、然るに陛下には、その患者の姓名まで御記臆あらせられたといふに至つては、御强記のことは疾くに洩れ承る所なるが、たゞ〳〵恐入り奉るの外はない、

自分は癈兵院設立に就ては、多少心配した一人であつて、しば〳〵豫備病院を訪問し、癈兵に對しては大なる同情をもつて、國光社の橋本社長、その他の人々と共に日本癈兵慰問會といふを設立したが、この癈兵に對して、國民一般戰爭當時兵士に對したる同情の厚かりしに引かへ、大に冷膽になつて、戰爭當時病院には訪問の客引きも切らぬ有樣であつたが、次第に訪問の客が少くなり、否數ふるほどになつた、然るに　皇后陛下に於かせられては、毎に御見舞あらせられ、親しく忠勇の癈兵を慰め給ふのである、されば彼れ患者なる兵士等は、折れたる足も立ち、失ひたる目も見ゆるばかり、感喜の情に迫つて、頭を擡ぐるものさへなき有樣である、かへす〳〵の御聖德の有難さ、臣民たるものは朝夕感佩せねばならぬことゝ思ふ。



女子教育に就て

文學博士　村上專精

人類を二つに分つと、云ふまでもなく、一は男子で一は女子である、既に男女と分つた以上は、同じ陶器にしても、一は急須、一は茶碗といふ風に、どちらも陶器ではあるが、まさか急須で茶を呑む譯には行かない、呑めぬことはないがそれは無理である、又茶碗で茶を出すことも出來ないことはないが、餘程むつかしい、それでは品物は全く違ふかと云ふに同じ陶器で、同じ場所に於て、同じ職工の手に出來たものである、そこで同じ道具でも、分類をして見れば、それ〴〵利用の道が違ふ、これは無茶苦茶に使ふ譯には行かぬ、同じ陶器ですら、さうであるから、まして人間に至つては、分類をして見たら大體は二つであるが、細かく分けたら幾つに分かれるかもしれない、こゝが教育の根本となる所である、男子と女子と云ふ人間、これは千年前に出來たものも、今日出來たものも、大體は同じであるが、人これを細かくしたら、其違つた點は澤山あるに違ひない、違つた所があれば、違つた所を働かせねばならない、そこが物の利用である、妄用を去つて利用にする、言換へれば拙に使はないで上手に使ふ、急須でお茶を出す茶碗でお茶を呑む、これは利用である、處が世の中には妄用と云つて、拙に間違つて使ふものが澤山ある、間違ふと

折角結構なものが詰らぬものになる、

そこで人間と云ふものは、身體と心の寄合である、されば其人間はどういふ事をしたらばよいかと云ふことになる、男子は男子の受くべき教育があり、女子は女子が受くべき教育がある、男子は男子の注意、女子は女子の注意、下流は下流、上流は上流と、それ〴〵分限に應じて發達を望み、分限に應じて國家の爲に盡さなければならんと思ふ、

さて日本の女子の、今日迄の缺點は何であるかと云へば、有形の肉體と無形の精神とに對して、兎角精神の方が第二になつて、肉體の方が第一になる、言換ふれば、形の美を競爭することが流行して、精神の美を競爭する念が乏しい、斯の如き有樣であつては、女子たるもの、いかほど男女同權論を稱へても、女子が肉體の美を競爭して居る間は、どうしても男子の玩弄物たる耻しめを受けなければならぬ、これは男女の同權といふ論はさて置て、日本國家の改良の上からも、よほど考へなければならぬことゝ思ふ、人間には體格上の男女と精神上の男女とある、又位地も、體形上の上流下流、精神上の上等下等とあることを忘れてはならぬ、即ち有形と無形とに分れるので、此有形の方は教育が左程必要でない、何故有形の方は無必要かと云ふに、有形の肉體といふは、既に天性定まつて居つて、之を教育によつて更へることは出來ぬものである、いくら學校に通つても、丈の低く生れた人間を大きくすることは出來ない、今日はいくら體操が行はれても、からだの形體を全く變ずるといふことは出來ない、たとひそれが教育上で變更が出來たにしても、是は誠に短い間の事である、兎角人間といふものは、一番に形の方に迷ひ易いものであるが、熟く考へて見れば、形の美を競爭するは、餘程愚な事である、何故かと云ふに、これは天性如何ともし難いものである、假令天稟の美質であつても、永久に保つことい出來ない、誠に暫時の果敢ないものである、

然るに精神の方は勉强練磨次第で天性をも變へ、益々發達する、形の美は老ゆるに從つて消えゆくものであるが、精神の美は、人間の生命のあらん限り、老ゆれば益々光明を放ち、いよ／＼其價値を高からしむるに至るものである、形の美は得んと欲して得難きものであるから、形の美を競爭せんよりは、精神の美を競爭して、精神的美人を造り、品性を高くすることが肝要であらう、ことに女子に向つての感を深うするのである、

古來歷史上に名を殘した女子で、國家に害になつたのはどう云ふ女子か、又國家の益になつたのはどう云ふ女子であるか、此處を一つ考へなければならぬ、形の美なるものは、多く世を亂して居る、昔も今も何處の世界でも、形美にして精神に美のないものは、社會に害毒を流す、それに反して精神の美しき人は必ず其人の現在或は未來に大なる効益を殘して居る、到底形の美人には出來ない、そこで女子たるものは精神を美にし、苟も國家の爲、社會の爲に、正義と見たことを何處までも實行する勇氣がほしいもので、これは敢て國家の爲のみならず、女子其人の爲に切望するのである（文責在記者）

▽次號 にはつゞいて村上博士の女子精神敎育談を掲載すべし、

女子敎育の一注意

法學士　鱸　重　康

女子を敎育する上に於て、一の注意を拂はれたきことは、思慮分別の熟せぬ、學識經驗に乏しい女子に向つて、貞女烈婦の事蹟を、敎育材料に用うるに當つて、あまり露骨なる事である、

支那の道德主義により、日本に古來人に喧傳せられたる貞女烈婦の事蹟を不健全なる頭腦に、露骨に注

入したる結果、往々危險なる犯罪を惹起することがある、それは數多の實例によつて考へ付いたことである、

今一例を擧ぐれば、本年の初新潟縣に、十六歳未滿の女子にて片桐なにがしといふ者があつた、その女子は女學校に於て相當の敎育を受け、多少の理解力を有すべき筈である、然るに不幸にも此女子の父なるものは、放蕩無頼で、酒をほしいまゝにし、常に家族を困めて居る、或夜例の如く妾宅に酒をあさり、夜更けて歸宅し、家族に對して惡口罵詈、殊に子弟の面前に於て、聞くに堪へぬ言語を弄し、殆んど手の附けやうなき有様であつた、その女子はしば／＼父を諫めて神佛に祈願し、その品行の改まるに力めた、されど父の亂行は依然として、例の如く狂體を演じ居るに、女子の心中は曾て敎育された貞女烈婦の事蹟に走せ、片桐と云ふ家に代へられねば、寧ろ父を亡きものにして、家族一同の苦みを救はふ、さなくば將來子弟敎育の爲にも宜しからずと、白鞘の一刀、あはれ一大事を演じたのである、予は此事件に檢事として（現今東京控訴院檢事）關係し、結局その女子は有期徒刑十三年に處せられたのである、

そこでその女子は容貌秀美、擧止嫻雅、片桐家に於ける萬緑叢中の紅一點ともいふべきものであつた然るに學問の生嚙りなるが故に、思慮分別の熟せず、敎育によつて得たる貞女烈婦傳が、咀嚼されずにあつた爲、大義親を滅するに何かあらん、と恐ろしき大罪を犯すに至つたのである、

日本では婦人が忠の爲に、自殺し、或は子を亡ない夫を亡ない、進んでは親に刄を向けることもあり、それを美談として、近代に於いてもその貞女烈婦たらんことを期するのがある、片桐もその一人で、親を殺すは、社會の爲である、といふ古風なる考に出でたのである、即ち大義親を滅したのである、

文明の世にあつては、それは法律に觸れ、社會の秩序安寧を破る不道德者となるのであるから、片桐の

罪を犯せる場合に於ては、徹頭徹尾平和の手段を執つて、父の亂行を改むるに力めねばならぬ、而も其甲斐なければ、それは一家の不幸として耐忍せねばならぬ、

貞女烈婦の丸呑は、先年の戰爭の如き場合は、多少士氣を鼓舞した傾もあつたが、太平の世の中には、秩序の整頓した世の中には、却つてその行爲が、社會の秩序を紊す、法律の犯罪者となるのである、故に頭腦の不健全なる女子に向つて、過激な貞女烈婦の事蹟を露骨に注入せず、すべて人の行爲を說に當つては、大なる注意を要するのである、いさゝか職務の上に現はれて、感じた一節を述ぶる次第である、

女子に告ぐ

福田太一

日本に於ける物質的文明は、今や恐るべき勢ひを以て發展して居る、外國では近頃、『日本人は更に其偉大な戰勝に醉ひ、又は誇るやうな風が無い、たゞ是れ孜々として其業を勵み、たゞ是れ汲々として其商工業の盛大に勉め勵んで居る、故に彼等は世界に於ける色々の事物に就き、非常の注意を拂ひ、善良なものは躊躇なく之を採用した上、老成せる才智と、潑溂たる精力とを以て、己れの前に横はる事業に進むのである』といふやうな風に觀察して居る、成る程、遠方から見るのであるから、決して間違ひがないとは言へぬかも知れぬ、併し乍ら、日本人が世界萬般の事物に對して、異常の注目を拂ひつゝ、遠慮なくその長所を採り、その短所を捨てゝ、只管世界の進步に後れまい〳〵と努力してゐる事は、これは聊か間違ひのない、確かな事實だらうと思ふ、若しそうでなかつたならば、何うして僅々三十幾年間に、今日の如き偉大な進步發達を見る事が出來やう、

即ち、日本の進歩は、何うかして諸先輩國の進歩に後れまい、それには非常の覺悟を以て、大いに諸先輩國の文明を吸收せねばならぬといふ、萬人一致の精神に根源して居る、言ひ換へれば、これは日本人が終始、西洋の先輩國に向つて、尊敬の念慮を抱き、常に敬視を絶たなかつたが爲ではあるまいか、

見よ『十歳の神童、二十歳の才子、三十歳の凡人』といふ古い諺は、常に新らしい處の原理を與へる、神童が遂に凡人にまで墮落するのは、歳を重ぬるに從つて、漸く傲慢となり、漸く自惚を増し、他人に對して尊敬の念慮を失ひ、昂然自得、自分獨り傑いと考へ、全く他人の長所美點を吸收するところの尊き力を、失つて終ふのに因すると斷言する、一段に早熟の人が、屢々失敗するのは、皆強い自惚の爲に長上を敬ふといふ尊む可き大切な精神を失つて終ふからであると考へる、つまり日本の進歩は、實に諸先輩文明國を尊敬し、その温和恭謙な態度精神を以て、彼等の長所を吸收し盡さうと努力奮闘したからである、彼等の文明に對して恭謙であつたからである、支那の如く、傲然としてお國自慢に陷つてゐる國民とは、全く其性格を異にして居たからである、然るに近頃、清國の態度を察するに、大分開化して來た樣ではあるが、我が國に對して格別の尊敬をも拂つて居ない、日本は一葦帶水の同文國であるから、彼を踏臺として亡國の憂き目を見ないやうにしやう位の所で、殆んど對等の感念を以て我に對してゐるらしい、此の如くんば百年河清を待つも、何の功か之れ有らむと余は窃かに自信してゐる、

然るに、女子は、一般に早熟の男子に酷似して居るのである、教育を受けた今日の所謂女學生が、多く生意氣といふ批評を蒙るのは、これが爲である、女子たるもの、須らく三思せねばならぬ、

故に、女子は男子を尊敬せねばならぬ、女子に服從を強うる人もあるが、これは女子の尊き人格を認めないから起る、偏重的の説で、同じ人間の仲間でありながら、一方が他方に向つて、絶對的の服從を拂ふ

などゝいふ事は、斷じて不可能の話であると云はねばならぬ、絶對的の服從などゝいふ事は、これは理想として見る可きものであるのだから、その積りで聞いて居ればよい、そこで恰かも日本が、科學的文明を見るに、常に尊敬的の念慮を以てし、遂に此の大いなる進歩を敢てしたが如く、女子も男子に對するに敬視を以てし、而して男子の長所を吸收し、短所を捨て、遂には女子には自から進むの力がないとか、女子には常識が無いなどゝいふ、悲しむべき批評を、永久に葬り去るやうにして貰ひたいものである、けれども、日本は西洋文明を尊重すること、餘りに甚しきが爲め、やゝ彼に盲從するが如き傾向を呈したのである、

日本は、肌の露出部が多いので、皮膚の忍耐力を強くし、從つて身體精神共に健全ならしむる、非常な利益があるにも拘らず、一部の人には、反つて身體全部を掩ひ盡し、あまつさへシャツだとか、ズボン下だとか、ホワイトシャツなどを以て、幾重にも皮膚を掩ふ所の洋服に一定したいものだといつて居る、西洋人は帽子を脱いで街頭に立てば、忽ち風を引くといふではないか、又、日露戰爭に於ける日本兵が、如何ばかり烈しき寒暑に堪ふること、露兵に優つてゐたかを考へよ、日本服の影響するところ實に至大と云はねばならぬ、此の如きは、西洋の物は總て善い、惡るいものは一つとして無いと云ふ、内卑外尊とも云ふべき卑むべき憐むべき精神傾向の至す所で、その他、下駄は早速靴に換へるが可からうなどゝいふのも、道路を歩いて來た靴で、そのまゝ住居内に入り込むの大害あるを知らぬからである、

であるから、女子の男子を尊敬せねばならぬ事は、前述の通りであるが、同時に女子としての威嚴を保つて行かねばならぬ事を忘れてはならぬ、

試みに讀者に問ふ、讀者は嬈舌な人前のいゝ、所謂小才子的の男子と話をした事があらう、その際諸孃

は果して如何なる感想を起したか、彼等には全く威嚴といふ尊い力が無くなつて居る事には、心付かなかつたか、又彼等が只管己の才識を誇つて人によく見られやうといふ、さもしい小虚榮心に驅られてゐるのには心付かなかつたか、一口にいへば、小才子など、いふものは、人に乘せられてゐるのである、沈默に大いなる威嚴を蓄へ、何處となく人を心服せしめるといふやうな實に男子として最も尊む要素をば、彼等は全く忘却失念して終つて居るのである、されば威嚴、これは誠に男子の生命といはねばならぬ、併しながら、この威嚴といふものは、獨り男子の本有物ではない、男子の專賣特許ではない、威嚴には二種類あつて、男子の威嚴と、女子の威嚴とに分つ事が出來るといふ事を忘るな、故に女子は、女子としての重大な尊重すべき職分を持つて居るのであるとでも考へて、夢にも女子は男子の附屬物たるに過ぎないなど丶いふ感念を抱いてはならぬ、要するに、古來、女子に對する男子の感念が大に間違つてゐた事はいふまでもなく、女子自ら女子に對する誤つた感念を持つて居た、今日の女子が大いに心すべき點であらう、以上を一言のもとにいへば、女子たるものは、常に男子に對して尊敬を拂はねばならぬと同時に又女子としての威嚴を保たねばならぬと云ふ事である、

終りに余は、一つ上流社會の女子に對して、苦言を費さねばならぬこと丶なつた、それは我が國の上流社會が從來甚しく腐敗墮落して居た事は、今更說くまでもないが、近來は追々西洋の惡風が侵入して來て物質的思潮に驅られて居る婦人も少くないといふ話を聞いたからである、皇室の藩屛など丶誇稱自任してゐる華族などに、此實例が多いから驚かざるを得ぬ次第である、

余はこれは誠に小さくない事件であらうと思ふ、そこで聊か其が原因を探索するに、華族などは、その高き地位のみを以て、既に充分の尊敬を博することが出來るのであるから、自然自分自身の人格の修養が

忽諸に附せらるゝ、即ち高き地位、貴き階級を以て、己が威光を示す道具となし、敢て他を顧省せぬから、爲に自分の精神人格から發する尊き威嚴を、お留守にして終ふのに基くのであると思ふ、

婦女子は、今も云ふ通り、未だ自から發展の階段を踏んで進む能力が薄弱なのであるから、若し今日、上流の婦人などが、泰西文明の浮薄な風習、輕佻な思潮に沈溺して終ふと、一般の婦女子も亦、相率ゐてその悪風習に染むの恐れがあらうと思ふ、誠に心配せねばならぬ事と思ふ、

家庭と歴史研究

吾人嘗て西洋婦人と語るに、露國ピータルの事を陳ぶれば、彼れ答ふるところあり、米國リンコルンの事を語れば、彼れ昻然として讃稱するところあり、而してビスマルク、グランドストン、否、カヴール、ガリバルヂー等の事を語るも、彼れ多少知る處ありて、我應對に支障なかりき、而して古代に有名なる人物談に到る時は、則ち殆んど暗誦するもの丶如くなりき、是れ何故ぞ、古代に於けるものは、彼れが嘗て家庭に於て語り聽されたるもの而して近代のものは彼れが自ら讀みたるものと、平時人の物語にて、聽き覺えたるものあるが故なり。

於此乎吾人は謂はんと欲す、苟も教育ある婦人は、啻に學校に於て學びたる片談隻話の歴史傳記等を以る満足せず、其一家の母となりたる上は、其子の爲めに須からく歴史傳記等を研究すべし、而して啻に其子の爲めのみにあらず、其の人に接し、客に對する時、相當の挨拶の出來得る様、須らく歴史傳記を研究すべし、而して啻に人に接し客に對する爲めのみにならず、其の平生の談話をして、演劇、小説、衣裳、遊山、飲食等に限らざらしめんが爲め、須らく歴史傳記を研究すべし、若夫れ今日の新聞に關しても、三面記事と、小説と、講談との外は、他に快味を感ずるものなし、キューバ騒動、猶太人の慘殺、英、佛獨、露の交渉等に關する記事の如きは、あらずもがなと想ふものあらば、是れ適々日本婦人の無教育と、無趣味と、無智とを吹聽するに過ぎず、かれ西洋人は食卓に於ては、如何なる談話が、相互の間に行はれつゝあるを尋れ來れよ、又た其兒童に對する物語が如何なるものなるかを尋れ來れよ、今日の日本家庭の西洋に及ばざること數十歩にして、昔日の士族家庭にも劣りつゝあるを發見せん、乃ち吾人は今日の日本婦人に、歴史と傳記の研究を勸めんと欲するものなり（松村介石氏談片）



家庭の教育

文學博士　加藤弘之

一口に家庭敎育と云ふが、今日の家庭は實にむづかしい、何故かと云へば、今の所では祖母なり母親なりが、今の世の事を少しも知らず、若い人は未だ經驗に乏しいと云ふやうな譯で、實際どうしたらよいのであるか、我々も實に困つて居る、

先づ今日の有樣では、幼稚園が一番大切であらうと思ふ、西洋のやうに家庭が充分整頓し完備して居るなら、それほど幼稚園を頼みにしないでもよいが何にしろ我國では、母なり祖母なりが、家庭敎育の何物たるを辨へぬ人が多いやうであるから、どうしても幼稚園をよくやつて貰はねばならない、

幼稚園も今では大變よくなつて來たやうであるが以前はチト學校風に傾いて居たので、私共も大に心配した事であつた、一體幼稚園といふ所は、物を敎へるのが目的ではないので、只遊戲について善い遊びをさせるといふ事だけに止めて置きたいのである、それで猶望むところは、其保姆たる人も、成るべく自分で小供を持つた、經驗のある人にして貰ひたい、普通一遍、保姆の學問ばかりした人では、どうも總ての事が理屈にのみ渡つてよくないやうである、然し概して云へば數年前よりよくなつたやうである、

此の敎へると云ふ事に就ては、單り幼稚園ばかりでは無い、家庭に於ても同じことで、私は小供に餘り敎へると云ふ事が分かつてはよくないと思つて居る、極く小さい小供の内は、まだ何も分らないから宜しいやうなもの、少し大きくなつて、五六才から十才位になると、親の擧動を一切眞似るやうになり、敎へなくとも自然と親のする事を覺える、それ

故親は決して理屈張つた事を八釜しく云つて聞かせなくても、自分が平素正しい行爲さへして居れば、小供は自然正しいものになつて來る、決して心配しておゝせよ斯樣せよと敎へるには及ばない、それから又小供の稚いうちは大概母親の方を慕はしく思ふもので、殊に父親は終日外に出て居て何樣しても母親の感化を受ける方が多いもの故、母親は特に其の素行を愼まなければならぬ事と思ふ、

次に小供が少し大きくなつた時代、即ち男なら中學、女なら高等女學校程度位になると、男兒女兒に拘らず、最早相應な理屈も分つて來る、左樣なると今度は母親ばかりでなく、父親の行爲も大いに關係する樣になつて來る、つまり親が家で常に不正な行ひをして居ると、自然小供もそれを見て眞似をする樣になる、流石に親は自分の行爲の善くない事を知つて居るからして、決して小供が自分の如くなる事を欲しない、欲しはしないけれども、左樣かと云つて日常の行爲は隱さうと思つても隱すことは出來ない、矢張自分が平素正しい事をして居らんと、小供に大變な害を與へる事になる、

何れの學校でも學校では修身と云ふものを敎へる尤も之も總て役に立つと云ふ譯ではないが、然し言葉で云ふだけでも道理に適つた事を云ふ、然るに家へ歸ると、其父や母が、全然右の談に違つた事をして居る、之では折角學校で温めたものを、家へ歸つて冷やして仕舞ふ譯で、加之、學校に居る時間は短かくて家に居る時間は長い、差引したなら冷やす方が温める方より多い、之ではいくら温めても何の甲斐もない、然るに世間では其罪を多く學校に歸して何でも咎めるやうな事ばかり云つて居るが、いくら學校がよくても（先づ善いものと假定しても）其家庭がよくなければ、迚も十分の効を奏する事は出來ない、

夫に又大きくなると、段々學校の朋友、其他社會の交際をしなければ成らぬ、然るに今日の社會と云ふものは、實に腐敗も又甚しいもので、餘程家庭が

善良なるものであつても、社會へ出れば兎角惡い方へ〳〵と導かれて行きたがるものである、況して家庭も惡い、社會も惡いと云ふ樣に、内外から惡い事を見せたり聞かせたりする樣な事では、迚も善良な人間の出來る筈はない、であるから先づ今日子弟を育つるに當つての急務は、家庭を善良にすることであつて、家庭を善良にするには、先づ一家の父たり母となれる人の行爲を愼ませねばならぬ、つまり小供を敎育するには、別に道理や言葉を以て敎ゆると云ふ必要はなく、凡て兩親其他の人々が自分等日々の行ひは悉く小供の模範になるものであると云ふ考へを持つて居たなら



大して間違う事は無からうと思ふ、

一體此の家庭と云ふものは、凡て婦人によつて主宰されて居るものであるから、家庭を立派にしやうと思ふには、是非とも婦人を敎育せねばならぬ、往時は女子敎育など丶云ふものは殆んど無かつた、只女子は少し手紙でも書け、人から來た書付でも讀さへすれば十分であると心得、手を以てする事即 手藝工藝と云ふやうなものも亦、只ほんの裁縫でもする位に止まり、其外は主に遊戯、琴を彈くとか、三絃を彈くとか、或は抹茶、挿花と云ふやうな事にのみ力を注ぎ、今日實用の方の敎は、丸つきり手をつけ

て居らなかつた、然るに近頃は又諸方の學校で、此の實用の方を奬勵する事になつて、私は誠に喜ばしい事と思つて居る、

昔は又女子は只温順しいのが宜いと云ふ事であつた、それは温順しいと云ふ事は至極宜いには違ひない、女が御轉婆になつて宜いと云ふ事はないけれども、然し只温順しい一方では、モウ今日の世に立て行く事は出來ぬ、昔は何か七去三從の法とか云つて小供の時は親に從ふ、嫁いでは夫に從ひ、老ては子に從ふと敎へ、女子は死ぬまで人に從つて居なければならぬ譯であつた、素より女子が男子に從ふと云ふのは當然の事で、今、歐羅巴で女子の權が強いと云つても、實際は矢張り男子に從つて居る、決して男子も女子も眞個に權力を同うし、双方差別なく威張つて居る譯ではない、矢張女子は男子に從ふべきものとなつてるのであるが、然し今日では只從ふと云ふ事ばかりでは行かない、一歩を進めて男を扶けると云ふ點まで行かなければだめである、

そこで昔は只從ひさへすれば宜いのであつたから女子には何も敎へる必要はなかつた、敎へて智慧が出ると反つて服從の邪魔になるから、成る可く敎へない樣にして居つた、けれども今日ではモウ夫ではゆかない、女子も亦日本人四千萬の半分であるとして見ると、女子に智慧がなく又道理の分別のないとなると、つまり日本の人間の半分は智慧がない事になつて仕舞ふ、之は誠に容易ならぬ義である、然るに夫の歐米諸國の女子を見るに、皆十分の敎育を受けて、善く事理が解つて居る、唯男子に從ふばかりでなく、能く之を扶けて行く事が出來る、又能く獨立して行く事が出來る、それで今日では日本でも其處へ氣が付いて、女子も敎へらるゝ樣になつて來たが、女子も敎へらるれば矢張り智慧が出て來る、智惠が出て來ると夫を扶けて行く事が出來る、妻が夫を扶けると云ふのは妻として、第一の義務である、それ故之からの女子は十分學問をして力を養つた上で緣付やうにしたい、左樣したら十分夫を扶ける事

も出來、從つて立派な麗はしい家庭を形造くる事が出來るだらうと思ふ、

それから智慧よりも、モット大事な品行を正しくすると云ふ事、之は昔から十分にやり來つた處で、敢て其のやり方に申分があると云ふのではないが、然し本當に智慧が出て來ると、何故品行を正しくせねばならぬかと云ふ道理が分つて來る、斯樣して正しくした品行は、只道理が分らずに正しくして居た品行よりも一段優つたものである、從つて此の品行を正しくすると云ふ事も、又矢張り智識を磨くと云ふ事と一つに成らなければならないのである、

次には健康を保つと云ふ事である、いくら智慧が出ても、品行が善くても、身體が弱くては思つただけの事を十分にする事が出來ない、これは婦人のみに限らず、男子は素よりの事である、然し婦人には小供を生んで之を育てる處の大責任がある、婦人が弱ければ其の子女も弱い、のみならず自然夫への奉仕も忽になると云ふ譯で、從つて家庭の和樂を損する事も少くはない、それ故婦人も十分に運動をし、攝養をして、身體を丈夫にする事を心がけねばならぬ、是が即ち善い家庭をつくる一つの基礎である、

久邇宮家の御婚儀

久邇宮邦子女王殿下（芳紀二十九）には岩倉公爵同夫人の御媒妁に依り、還同伯爵壬生基義氏（三十二）方へ御降嫁相成りたるが、殿下には去廿三日　兩陛下に御暇乞の爲め御參内あり、次で東宮御所にも同樣參上あらせられ、今廿八日御入輿相成りたり、當日の御服裝は、鴇色地に鶴龜の綾紋ある、袿に緋の袴を召させられ、御重ね檜扇等を携へ御髮はおすべりに裝はせ給ひ、御料の御馬車にて御入輿あらせられ、御馬車は蠟色塗に菊花御紋章の金蒔繪を置き、內部は四方に白緞子の桐鳳凰等の綾紋ある美麗の織物にて張り詰め馭者等其他は眞紅、金色等にて最も高尙優美に粧飾せられ青栗毛の名馬二頭是を引き馬車の先頭には警官二騎誘導し奉り其前後には、近衛騎兵一分隊儀仗兵として隨ひたり、結婚式は當日午前中壬生邸に於て擧げさせられ、參列者は邦彥王殿下を始め奉り池田侯、竹內、仙石、東園、織田の各子爵等凡て御近親方々のみなりき、

皇孫殿下の御近狀

天高く氣澄みたるけふ此頃、竹の園生の緣いと深く、青山御所の內なる御假殿に坐す迪宮、淳宮、光宮三殿下の御近狀を漏れ承りて、記し奉るこそ嬉しけれ、さるほどに三殿下には、本誌卷頭に拜載し奉るごとく、いよ〳〵健かに渡らせ給ひ、中にも光宮殿下には、御體量二貫八百目の上に達せられ、偶ま御姿を拜し奉る者どもは、兄宮殿下に坐さずやと覺ゆるばかり、然れば御步行の砌に召し給ふ御履物の如きも、御兄宮殿下と略同じきものを用ひ給ふとかや、さて迪宮、淳宮兩殿下には朝な朝な、兩陛下並に御父君御母君兩殿下の尊影を御拜あらせられ、午前九時と申すに、山階宮芳麿王殿下を始め、松平侯爵の令息四郞氏以下、渡邊、河田、三宅、久松、千田、稻葉、加藤氏等の御學友(芳麿王殿下を除く其他の御學友は、四名づゝ隔日に伺候す)を隨へさせられ、御所內なる幼稚園にて御敎育を受けさせられ、午後は新宿御苑を始め、濱離宮、高輪御用邸に成らせらるゝか、又は御所內の御庭にて御運動あらせられ、風雨などの日には、御學友侍女などを御相手に、鬼事、隱れん坊に興ぜさせ給ひ、玩具は先頃まで幻燈、活動寫眞、並に獅子、虎、象なんどの形を好ませられしも、動物園などに屢々行啓あらせらるゝより、自然右の如き玩具は顧み給はず、御遊戲の如きも、昨今は體操、角力など、よろづ活潑なるを好ませ給ふものから、このほどより御庭の御運動場に鞦韆、丸木其他種々の器械體操をしつらへ奉りしに、殊の外御意に叶ひしとなむ、次に御召物の事ども承るに、光宮殿下には、筒袖又は袖付の和服を召させ給ふも、兄宮兩殿下には、午後は入浴の際までは、多く水兵服を召させられ、御食事は晝餐に少量の西洋料理を奉るの外、重に日本料理を供し奉り、光宮殿下には、牛乳の外に魚類の御料理にて粥を侑め奉る由、三殿下のすぐれて御聰明に渡らせ給ふことは、御附の人々の只管感じ合へる事にて、いとも〳〵目出たき限りにこそ。

家庭教育に就て

東京孤兒院主　北川波津

教育としては家庭教育程大切なものはありません其でありますからして其家庭教育によりまして前途有望否日本の花ともなるべき小兒を惡に導くか或は善に導くか、孰れにか導くのであります、實に其感化の勢力といふものは驚くべきものであります、殊に幼年ない小兒と云ふものは其指導者によりて如何樣にも變化變成して行くもので御座います、

扨今日本の家庭教育を觀察致して見ますするのに近來は漸々其進歩を見る樣になつて參りましたが併し實に微々なるもので到底歐洲諸國の其に比較する事は出來ないので御座います、併し其であるからとて悉く歐洲諸國の家庭教育は完全なるものと御考へになりますと一寸弊害が起るので御座います、乃ち彼の家庭教育にも一利一害はあるので御座いますけれ共只々日本の家庭教育に比較して申し上げるので御座います、其で今日日本の家庭教育の缺點に就きまして觀察致しまするのに一般に高尚なる思想の進歩と音樂的の感化と社會的の感化の乏しいのが大なる點で御座いましようと思はれます、其で御座いますからしていくら兒童が學校で機械的に學問を注入せられましても家庭で之を種々に應用致しませぬが故に論理的の智識は一向に發達しないので御座います、是に反しまして歐米諸國の兒童は常に論理的の智識と音樂の優美なる感化と社會的の感化に誘導せられて居りますからして凡ての點に於て大に發達して居りますから少年時代より老衰時代に至る迄も常に高尚で活潑で御座います、從つて彼の國の少年は社會に對する耐久の心を有して居るので御座いますから社會に存在して大事業を形成する事が出來るので御座います、

殊に日本などにては五十歳六十歳にもなりますれば大底隱居を企て、其で此尊い時間を夢耶現耶の内に空費するのみで社會に對して何の益する所もない

ので御座います、然るに彼の國の人は老年の時期に生存して居りましても常に『社會の爲』と云ふ感念を有して居りますから實に老年の時期でも大事業を起し大發明をなす事はよく人々の知るところで御座います、例へば英國の實驗物理學者マイケルファラーデイ氏の如きは老年にして、非常に社會の爲に盡瘁した人で御座いますが其お蔭にて今日の電氣學應用の世の中が形成せらるゝ樣になつたので御座います、斯樣で御座いますからして如何に家庭敎育なるものが社會に影響を及ぼすかは此等を見ましても明かに理解することが出來るので御座います、然るに我國ではあまり此點に心を注がない樣に思はれますが、實に此は日本の前途に取りまして悲むべき事御座います、殊に又我國は露國と戰ひまして戰略上では大勝利を得ましたが、此から尙國民の精神上にも又道德上にも文明上にも一大發展を致さなければならない境遇に立ちいたつて居るでの御座います實に世界人類の爲に大なる責任を有して居ると云ふても差支へないので御座います、丁度斯の普佛戰爭の結果獨逸が歐洲の文明の中心地は今後の日本におるので御座います、それでございますからして如何にしても我國の社會を改良して行かなければなりません、其には先づ其社會の根本たる家庭、家庭の根本たる婦人からして之を改良養成して行かなければなりません、實に婦人は男子の母でありまして且又女子の母で御座います、其で御座いますからして如何に日本の男子が進歩致しましても歐洲諸國に向て誇る事は出來ません、何故ならば、其根本たる母なる婦人が歐洲の婦人の上に價する價値を有して居らないので御座います、否其價値は有して居ますけれ共其を發展しないからで御座います、私共は此點に就きまして少し考ふる所が御座いまして目下院内に於て小兒の家庭敎育を根本から改良致さうと思ひまして、新に音樂敎師と宗敎上の敎師とを雇ひまして一週間に數時間を費しまして彼等の神心上の優美を養成致して居ますが、其結果は漸々あらはるゝ樣に

なつて參りましたが其結果は決して些細なものではございません、殊に又我邦は今後世界との交際場裡が廣くなつて參りますからして益々我國を發展せしめんければなりません、其には是非とも家庭教育の進歩が其基礎として必要で御座います、其で國民の强弱は母の强弱に基因し、子女の賢愚は母の教育の如何に因るので御座います、其で御座いますれば人生の種々なる事業と云ふものは、男子のみ其に當ると云ふ事は出來ません、必ず女子が其一半を荷うて居るので御座います、否其根本に遡りまするならば、寧ろ女子の責任は男子よりも大なるものと信じます、其で御座いますからして近頃は大變女子教育に重きを置く樣になつて參りましたのは、大に喜ぶべき事で追々野に咲ける女郎花の、今一しほの色を添ふるのも近き將來にあらんかと存じます、されば家庭教育も自然と進歩する事で御座いましようと存じまして、深く感謝致して居るので御座います、いさゝか思付いた事を申述ぶる次第でございます

瓦斯私用の炊事

神田錦町三丁目東京瓦斯株式會社にては、去る廿日今回新築したる模範炊事場を關係者をして、觀覽せしめたり、炊事場に於ける瓦斯の効用は、三升の釜の飯は僅か十八分（瓦斯代二錢弱）にて炊け、新式七厘は、六疊の間の片隅に置けばストーブの代用ともなり、其他火熨、西洋料理器、燒物器、魚肉、牛肉、玉子、餅、西洋菓子）等一條の護謨管を以て瓦斯口と器具に連絡して點火すれば、立ろに用を爲す、就中洗面器は二ツの螺旋を捻れば水道と瓦斯一度に出でゝ、水は二分間にて湯となるなぞ頗る便利なり、

炊事場には、神田佐柄木町のいろは鮨、淡路町の風月堂よりも出張し、瓦斯を利用して料理及び菓子の製造を示したるが、鳩山夫人春子は、一見して重寶の器とし、早速其場に陳列せる西洋料理器を購ひ歸られたり、

▲前金メートル　市内の瓦斯管を延長すれば、實に四百哩となり、東京より神戸に至る里程と等しく、而して需用者は、日に五十宛加し行くと云へば、從つて料金徴收法の如きも大に手輕を旨とし、目下歐米にて採用せるプリペーメント、即ち前金メートルとてメーに錢箱を備へ、自働電話の如く五錢の白銅を投入れば、二十立方尺即ち七本の瓦斯燈を一時間使用することを得、五錢以上は五拾錢までを限りとす、

閑院宮春仁王殿下の御近狀

記し奉らんも、洵に恐れ多き事ながら、閑院宮載仁親王、妃智恵子殿下の御兩所には、平素家庭教育に重きを置かせらるゝが、妃殿下には跡見女學校の御卒業に在はしますものから、御息女恭子女王殿下（御年十一）を始め奉り、茂子女王（御年九ツ）の御三方には、早くより御母君の仰せに依り、同じく跡見女學校に御通學中なる事は、曾ても記したるが、御邸には尚ほ王子春仁王殿下（御年五ツ）及び、去る二月二十一日御誕生遊ばされし寛子女王殿下の御二方の在はしますものから、おやま、お峰、初野などの侍女は、交る／＼御二方の御傅を勤め居りぬ、

◎少年の名譽　然るに此程侍女の郷里なる、徳島縣麻植郡西麻植村尋常高等小學校第一學年。在學中の、麻植恭太郎(七つ)と云へる少年より、自分の最近寫眞に、

オバサン、私ノガクコーノシケンガ、デキマシテ、二年生ニナリマシタ、マタ、三年生ニナルハヅデス、オメデトウ、

と手紙を添えて送りたるに、春仁王殿下には熟々右の寫眞と、手紙とを御覽ぜられ、『これは眞個に此人が書いたのかネー』と只管御感心遊ばされたるが、姉君なる御三方とも其所に來給ひて『どれ私にも／＼』とて御覽遊ばし、御三方ともノートブツクに、件の少年の手紙を其儘寫させ給ひしとは、少年の名譽なるかな、

◎御好みの玩具　春仁王には太く動物を好ませらるゝより、玩具なども悉く動物を象りしもの御意に叶ひ、殊に洋犬を愛でさせ給ひけるが、先頃の事なりけん、御浴槽の近くに大なる鼠の現はれ出しにぞ、侍女は殿下の好ませらるゝ動物の事ゆゑ、鼠の方へと御伴ひ申し『御覽遊ばせ』と御案内申し上げしに、王殿下には一目睹はすより『僕あ鼠は大嫌いだよ』と宣ひつゝシツ／＼と足拍子打ちて追拂はせられ、軈て御母君なる妃殿下の御許に寄らせ給ひ『僕は鼠が大嫌ひです』と仰せらるゝにぞ、妃殿下には御不審の御面もちにて、何故と問ひ返へし給へば、『だつて鼠はペストでせう』と宣ふより、御母君には益々訝かしく思召され、御附の侍女を召して仔細を尋ねさせられしに、何れも若宮殿下の御發明なるに驚き入りしと云ふ、

◎御近狀　承はるに、妃殿下にには毎朝必ず五時に御床を離れさせ給ひ、各女王殿下には、同六時に御起床遊ばさるゝ御慣にて、御息女恭子女王殿下を始め、御姉妹御三方とも、お辨當御持參にて供をも召させられず、御馬車にて小石川柳町の跡見女學校に御通學遊ばさるゝが、太く繪畫を好ませ給ひて、花蹊女史が頭を左に向けし小鳥を描きて、差上げ申せば、其を御覽ぜられ斯て御手本の如く頭を右に向けし小鳥を描きて『是れでよいですか』などゝ仰せらるゝこともあり、其筆勢の正しき到底普通の女生徒の及ばぬほどなりとかや、



法廷より得たる婦人觀

東京地方裁判所
豫審判事　石井豊七郎

法廷に於ける難物

私どもが常に裁判所の事務を取扱つて居る間に、第一に厄介に思ふのは、強盜でもなければ、詐欺でも、また謀殺故殺犯人でもない、女である、と云ふことが毎度同職の間に於て唱へられ、殆んど通説となつて居る、故に證人又被告人として、その他何れの場合に於ても、相手にして事實の眞相を得るに難澁なのは婦人である、

何が故に然るかといへば、婦人は事實爭れぬ事をも爭ひ、現はさなければならぬものをも隱す、故に審問する時に限らず、家宅捜索、差押へ、臨檢の時も婦人が介在すれば、いつも意の如く進行せぬ、時としては極めて簡單なる證據物件に極めて面倒な手數をかけて居る事がある、何うしてさういふ結果を見るかに就て研究を試みた、

自分本位

何故に女性は法廷に於て難物視せらるゝかと云へば、彼は絕對的自分本位である、自個を知つて他を知らず、自分は盛んに說明するも、他人をして理解せしむる口を有たぬ、他人のいふ事を聞く耳はあつても、其心を聞く耳はない、それであるから、現に雨が降つて居つても、あれは風ですといふ如き手前勝手が續出して、相手にして非常に苦まされるのである、其の自分本位は何に由來するか、

不冷靜の態度

それは冷靜の態度を執らぬからであつて、我々の前にそれが立證されて居る、女性が感情に熱するといふこと、これは或は特長かもしれぬ、この熱情に

よつて、婦人が家庭に於ける慰安者でなければならぬといふには、誰も異議を唱ふるものはあるまい、家庭に於てのみならず社會に於ても、平和の神として、平和の媒介者でなければならぬ、然るに冷靜の態度の缺げて居る爲にいつも事實は反對になつて、家庭に於ける慰安者は、常に男性がなつて居る、女鑑の前々號の懸賞小說に、人住む空家といふ題目があつたが、實に其通りで、冷靜の態度がない爲に婦人は家庭の慰安者として失敗して居る、これを監獄に於て、在監人と其緣故者たる婦人(其多くは妻)との通信に見るも、多くは在檻人を慰安すべき筈のものが、却つて在監人から慰められて居る如きは、好個の適例であると思ふ、罪の有無に拘らず、刑事被告人となつて縲絏の身となる如きは、一家の大事變ではないか、其大事變に際し、苦痛の當事者が、周圍の人を慰安せねばならぬといふは、全く逆な話で逆であるが仕方がないから痩我慢にさうして居るのであらうと思ふ、蓋し慰安の天職ある人が、却つて慰安されて居ることは、右の場合に限らぬ、病床に在る夫や、我兒の枕頭にも、事業に失敗したる夫や我兒の身邊にも、常に同樣の狀況を見るではないか、

婦人犯罪の動機

故に婦人自身の犯罪、又婦人あるが爲に男子をして罪を犯さしむる、この直接間接の動機に見るも、婦人に冷靜の態度が缺げて居る事がわかる、最近の統計によつても、男子の犯罪は竊盜、强盜、詐欺、放火、賭博、毆打、謀殺、官私文書僞造、故殺といふ順になつて居るが、婦人のは、竊盜、放火、故殺謀殺、詐欺取財、といふ順になつて、婦人犯罪の五分の一は放火、六分の一は故殺である、これらは大に注意すべきことで、故殺といひ、放火といひ、一時の感情によつて犯せる罪である、故に謀殺などの如きは、故殺の多きとは殆んど比較にならぬのである、斯の如きは冷靜の態度を保つことの出來なかつた爲であるから、冷靜の態度に缺くるといふことは

婦人の缺點として多大の注意を拂ふべきものと思ふ

趣味の缺乏

次に感じたのは趣味の缺乏である、在檻囚人が外部の人と通信することが其數に於て女子は男子より少なきのみならず一向其通信に趣味がない、偶には歌の一つも詠めるものもあらうが、それが更に通信の上に現はれぬ、其他日常の生活の有樣を親しく見る場合に於ても、上流下流を通じて、家庭に於ける趣味は、多くは男子が忙がしき中に經營せられて居るやうである、衣服などに至つては婦人の趣味を認めることもあるが、これが婦人の趣味として現はれて居るものは少い、又囚人の生活に於ても、男子は其中に云ふべからざる面白き趣味を有ち、檻獄の注意によつて、優美なる花を植え、培養して實の見られる植物をつくる等の藝を演じ、或は獄吏の目を盗んで種々の慰安法を講じ、花の一枝をいつの間にか折來つて、其美を賞して居るなど、獄則には違犯するが、趣味眼から見れば愛する所がある、女子は學校の運動場に於て快活なるに引替へ家庭に於て陰氣



なるが如く、娑婆にある間は元氣であつた女性も、獄中では極めて陰欝になり、宛ら牢屋人になつて居る、これは趣味に缺ける所があるからであらうと思ふ、故に婦人は罪を犯すにも工夫がない、詐欺とか官私文書僞造などの、工夫を要する罪は男子にしか見られぬのである、犯罪に於ける工夫は餘り感心せぬが、何れの場合に於ても、婦人に趣味の缺乏せるを立證したのである、その趣味の缺乏が家庭の慰藉者として、或は育兒の大任を有てるものとして、常に失敗して居るのである、

不實用的敎育

今日文明の敎育を受けて居る女子に、此缺點のあるは不思議なことで、而も家庭に於ける趣味は、却つて下層も下層、無敎育も無敎育の、藝者屋待合に於て見ることである、而して審問する場合にも、その社會の者が一番よく物が解るやうである、それは今日の女子は社會に密接せぬと、敎育が實用的應用的に遠かる氣味があるからであらうと思ふ、

趣味の養成

併し趣味は待合や藝者屋の裝飾の如きものではない、趣味は精神の修養より得たるものでなければならぬ、精神の修養なき趣味の養成は附燒刄であつて、眞成の趣味ではない、花は活けても野草の美を知らず、ピヤノを彈ずれども、蚯蚓の鳴く音を解せず、理科は學んでも臺所の趣味は解らぬ、と云ふやうでは、一向趣味も價のない話である、而して精神の修養は腰掛校長や敎員の居る官立よりは、寧ろ私立の獨立せる學風を有せる女學校、又主義あり方針ある所の新聞雜誌の感化に待つべきものがあらうと思ふ

支那女學生の寄宿舍

實踐女學校敎師　坂寄光子

過般私どもの奉職せる實踐女學校を卒業した、十二名の支那女學生は、舍監の一人として朝夕世話をしましたから、いさゝか其氣風を知ることを得ま

した、

この十二名は支那から來たばかりのでありましたから、赤坂の分敎場に引受けて、言葉はもとより一向日本の事情に通ぜぬのでありますから、一ケ年位で、どうして此人たちを物にする事が出來るであらうと、一方ならず心配しました、

そこでこの方が先生と云ふても、禮をすることも知らず、たゞぼんやりとして居るばかりでありました、それが昨年の七月十七日でありましたが、その夜一同を部屋の前に整列させて、一二三と其順番を定めました、これがこの女學生の日本に入つて、規律といふ事を覺えた初めでありませう、すると翌朝銘々の順番を覺え、敎師に禮をするやうになりました、この調子でよく敎へる事を守りましたから、以外の効果が擧り、豫想したほど苦勞もありませんでした、

支那の女性は兎角尊大な風があり、この生徒もいさゝかそれがないではありませんでしたが、比較的それがないと云ふてよい程でありました、

金錢の事には中々目をつけたものでありまして、何か品物を見せると、すぐにこれは何程で買へますかといふ風に聞き、甚しきはお茶受に出した燒芋の價まで聞きたがります、偶々外出しようと思ふて衣服を着かへて出やうとしますと、寄つて集つて、此羽織は何程で、この帶はといふやうに、無遠慮に聞かれて、甚だ赤面したことがありました、そこでそのやうな事は失禮であります、といへば羞ぢるに違ひない、羞ぢさしては面白くない、そこで自然の間に日本の風俗としては、かゝる行爲は失禮であるといふことを覺えさせる、その事が一度解ると、決して再び左樣な質問を出すことはありません、

起床時間は五時で、七時に朝の食事をします、それで國に居た時の事を聞きますと、早いのは四時頃に起き、食事は六時頃との事でありましたが、これはこの人々等のことで、多くは不規律との事であります、

不規律と申せば、食事の時はそれが甚しいので、茶臺に肱をかけると云ふ始末でありますが、それは注意をしてすぐに止めさしました、茶は食前に飲んで食後には絶對に飲まぬやうであります、大さう汁を好みまして、それを飯へ掛けたがります、併したゞさへ弱い身體が多いやうでありますから、成るべくさうさせぬ事にしました、箸は日本の様に横に置かず、縦に並べます、それから食卓の上は置放してありますが、それも自身で片付けるやうになりました、

運動は漸く纒足をとつたばかりといふ位でありますから、充分に出來ませぬが、百廿坪ばかり、何處からも見えぬ地所がありますから、そこで食後適宜の運動をさせます、すると後には舞踏の眞似事さへ出來るやうになりました、

初め赤坂の分教場に居ます時は、西洋館でありますから、寢臺がいくつも出來て居りますので、寢臺に寢させましたが、本校の側にこの留學生のみの寄宿舍が出來まして、それに引移るやうになりますとそれ迄のやうに寢臺に寢させる譯には參りません

清國では土間には寢ない、必ず寢臺の上に寢、しかも引移つた當夜は、一室に多人數同寢せねばならぬことになりましたから、事情をよく話しますと、少しも心細さうな考も起さず、先生の成さる事で、私どもの出來ぬ事はありません、といふやうな話で、疊の上に蒲團を敷いて寢ましたが、先生と同じ所で寢られると喜ぶものさへありました、これが導火線となつて、種々に日本化して來ました、

それから色々話をして見ますと、どうも國家思想に乏しいものでありますから、どうか雜談の時に、國家思想を皷吹したいと思うて居りますと、或時先生の兄弟は何人ありますかと云ひますから、五千萬ばかりあると申しました、するともし間違ひではあるまいかと、最も親しい同胞は幾人ありますかと聞直しました、そこで近頃になりまして二十名ばかり殖えまして、その同胞が私の最も近い所に居ります

と答へました、相手はます〳〵解らなくなつたと見えまして、最も近いと云ひますと、何處でございますと聞きます、それは二階にも私の前にも横にも居りますと、其質問者を指す、相手は先生は妙な事を言ふと笑ひます、隨つて私の云ふことも解りません幸ひ同僚の松元晴子さんが隣室に書見をして居りましたから、もしあなた方が、私の云ふことを間違うて居ると思へば、誰にでも尋ねて見なさるがよい、日本の人は誰でもさう答へます、試に松元先生に聞いて御覽なさいと云ひますと、一同松元さんの所へ同じ事を問ひに參りました、壁一重隔てゝ松元さんは、この問答を聞いて居られたものですから、よいやうに話の相槌をうち、日本は國が小さいから兄弟が少いが、あなた方の國は、中々大きい國でありますから、それが兄弟の如く、一致して事に勵んだならば、必ず世界の目を驚かすことでありませう、といふ風に私どもの話に敷衍してくれましたから合點が行つたと見えまして、歸りには眞面目になつて、他の同學生にその說の受賣を初めるといふ有樣でありました、

　これはよい癖ではありませんが、人の物をだまつて取つて見る風があります、何時か私の本箱から禮記を搜出して、頻りに大勢で暗誦して居ります、そこへ私が參りますと、その禮記を出して、先生此意味は解りますか、私どもはかういふ風に暗記しますと云ひますから、あなたの國では暗記をなさるばかりでありますか、日本では一行讀めば一行行ふといふのでありますから、容易な事ではありません、私どもは一冊の事さへ行ふことがむつかしいのでありますからと、我學校の實踐躬行說を述べますと先生はあんな事を、と初めは笑ふて問題になりませぬが、段々に會得しますと、一同に電話がかゝる、

　かやうな懺悔で、よく合點さへ行きますと、誠に身に染みるやうであります、それで一年以上の間に同じ小言を二度云ふことがございませんでした、これ等は到底日本の女學生に見ることの出來ぬことで

ございます、でありますから、まことに尊大な、禮法もどうでもと云ふ風に、しかも物に不整頓であつた女學生が、食物調理の如き、取片付の如きも手早く奇麗に出來、私どもの給仕などもしてくれまして無教育な女中よりは何ぼう間に合つたかしれませんそれで女中などが病氣で寢て居りますと、自分どもの御馳走を分けて、其枕邊に給仕をしてやる、其女中が手が利きませんので、私が御飯を結んでやりますと、それを見覺えて、今度は女中に結んでやつて其中に副菜を入れるなど、なか／＼親切なものでありました、

入浴は彼地では一人づゝで、二人一しよにといふことは滅多にないさうであります、しかし湯は隨分長い方でありますから、一人づゝ入れました日には一日湯に附切つて居らねばなりませぬから、五人六人一しよに入れるやうにしました、これは此方がよいとも申されませんから、都合でさうして貰ひたいと、頼んだやうな次第であります、

髪は學校へはじめて參りました時は支那風で、娘風と、妻君風との二樣でありました、尤も彼地では二樣ばかりでなく、商人と官人とも違ひ、いろ／＼あります、それから我校に參りました女學生は、すぐに日本の髪に結ひかへましたが、段々日本風を見覺えて、自分で色々の髷に結ふやうになりました、

或時滿洲服を着けた、皇族の寫眞を見せまして、これはどこの人でありますか、と聞きますと、これは支那服でありませぬ、と湖南から參つた學生が多いものでありますから、今の朝廷を妙に感じて居るらしい樣子であります、そこでこれもよき機會と思ひまして、世界の地圖を見せ此地圖の上に大淸國として存する以上は、昔の感情などを捨てゝ、淸國としての國民は一致せねばならぬと申ますと、學生も恥ぢたと見えまして、いや今の淸廷を不平に思ふのでありませんが、淸朝になり此寫眞のやうな服を着けるやうになつて、我國も衰へたかと思ふと、思はず愚痴が出たのでありますと答へました、

健氣なる寡婦

目下本郷區眞砂町二七に住みて、儚き女の手一つに一家五人の子女を物の見事に養育し居る、田代廣子(四十)といふ婦人あり良人田代百太郎は遞信省管轄の航路標識管理所に奉職中、腦病に脚氣が手傳ひて、卅四年十月死去したるより、廣子の悲嘆大方ならず、殊に二人の間に成せる長女郁子(十九)次女悦子(十七)長男滋(十四)次男穣(十一)三女小三重子(九つ)の五人が、日々亡父の跡を慕ふに困じ果て、夫と別れたる身に、何一つの希望なき身なればとて健氣にも幼兒の養育を思ひ立ち、良人の兄田代彌太郎と、實兄なる小田原電鐵會社取締役神原富文氏が、固く止たるをも聞かず、奮然五人の子供を携へ上京せしは、卅四年十一月の事なり、されど、良人の遺産とては、彌太郎が滋の學資として保管すとて、一文も與へざれば唯僅に良人の保險金と、遞信省下賜の遺族扶助料と、貯金と、總計六百圓許を資本にて、取敢ず本郷區春木町の假寓を引拂ひ、卅五年五月神田區神保町に筆墨紙店を開きしかど、打續く不景氣に忽ち二三百圓の損害を釀し、同十月已なく閉店して、何をがな女の手内職をと苦心慘憺の折柄、茲に又廣子の實兄竹川詮之助(四十三)が臺灣より上京し、一家の體面にも係り、旁た子供の教育にも面白からずとて、一向不賛成なりしにも拘らず、一家の柱石たる我身だに心固からば、何程の事かあらんと、同年十二月本郷區森川町一に湘南館といふ下宿屋を開業し、學生十數名の世話をなす傍に、子供の薫陶些程も油斷せず、詮之助が昨年四月再び上京の折は、涙を流して廣子の貞操と賢德を稱揚したりといへば、此間の家庭教育略察するに難からざるべし廣子は流石女の心弱く、詮之助上京と聞き、難詰を恐れて、一時前記下宿を終ひ、東片町へ引込しなれば、再び森川町五二に同屋號の下宿屋を開業し、其後間もなく詮之助よりも瀧子(十四)安宅(十一)の養育を依頼され、小田原の富文氏よりも文彦(二十二)を托さるゝに至りしにぞ、廣子の心勞倍一倍となり、今春より兎角心地勝れざる上に、郁子悦子兩人が下宿屋丈はと懇々の願も默し難く去六月遂に下宿屋を仕舞ひて、今は前記眞砂町に家内總勢八人の温き家庭を樂み居れるが、是迄の廣子の苦心は更にもいはず、今も紙一枚だに無益に使ひ棄てたる事なければ、五人の子女も賢德怜悧おさ〳〵母に劣らず、郁子は目下女子高等師範英語科にあり、次女悦子は同附屬高等女學校第五年級に、滋は同附屬中學一年級に、穣と小三重子は同附屬小學校に通學し居れりといふが、廣子は自分の骨が舍利になる共、亡き良夫の遺言を守りて、滋は是非共帝國大學法科に入學せしむべしとて、一向可愛子の生先をのみ氣遣ひ居らるゝ由、時節柄良人に先立たれて、再婚を急ぎ、或は舅姑と年金の所有權を爭へる軍人の未亡人と、其心事の月鼈如何にぞや

精神病院

中川愛氷

ことし九月七日、青山病院新築落成披露の園遊會あり、予も院長の招待を受けて參會したり、而して其日、予の最も感じたるは、青山原頭に雲を突いて立てる城廓の如き立派なる建物にあらず、折からの好天氣に花火を盛に打揚げたる景氣にもあらず、種々の餘興が催され各種の模擬店に多くの看護婦を集めたる賑やかさにもあらず、多くの來賓の庭園狹しとつめ掛たる光景にもあらず、其日入院患者によつて行はれたる假裝行列にてありき、

群集の中をねりあるく假裝行列、或は武者あり、蝦茶式部あり、神官あり、ハイカラ紳士あり、ヨカヨカ飴屋あり、なか／＼趣向をこらしたるものにて、その中に月琴をひけるもの、三絃をならすもの、太皷をたゝくものありて、一人が音頭をとれば、鳴物の調子と、行列の步調は揃ひて、その中に精神病者ならぬ、同病院附近の理髮床の主人、其他御叮嚀にも精神病者に假裝して其行列に加はりたるもの數名ありしよしなるが、打見たる所、精神病者といふ方に眞面目らしき所がありて、假裝精神病者が却つて眞正の精神病者に見え、看視人巡査に假裝してこの行列に指圖せしが、其の巡査を煩はすこともなく、途中繩を張れる下を過ぐる時は、其下をくゞり行き、障害物あれば、そを避くる如き、なか／＼に精神病者にしては自らの注意行屆きて、二三時間庭内を右に左に練步きて、來客を笑はする外には、それ以上狂はしき狀態なかりし、その狀態を見たる、彼等の親族の感果して如何に、精神病者ならぬ人も、假裝行列流行の折から、一種異樣の感にうたれ、そを笑はん勇氣も出でざりき、

斯の如く精神病者と折紙を附けられし人も、面白しといふことは知れり、隨つて悲しきことも知れるなるべし、たゞ或塲合に、或者に對して、其行動が狂的となるにて　この患者に接するものは極めて慈

悲の念、同情の心に富まざる可らず、嘗て田畑精神病院長は、入院患者の文學美術思想に富めるものに就て、語られたることあり、而して其患者の文學作品といふを見れば、

婦人室看護婦人も目にあまる
　無理なことして患者いぢめる

ストライキ意氣な聲して氣ちがひが
　踊りもすれば泣き明す夜も

三度喰ふ飯さへまづし軟らかし
　おかずがまづし飯が足りない

病人は氣まかせと云ふことをしれ
　たゞおつせいは實にめいわく

また

重體に變化を來す氣候かな
其色を我にもうつせ菊の花

など云へるもありて、必ずしも前後無差別にあらず一たび口を開けば皆不平の聲にて、其不平の聲は、また必ずしも彼等の無意識にのみ發するものにあらず、

　數月以前、有名なる巣鴨病院を訪ひ、森田醫學士に案内せられて、一日を其處に暮したる事あり、名物にうまき物なしといふ諺にもれず、例の蘆原將軍もさして變りたることもなく、男性の精神病者には全體に左程の事もなかりしが、女性の室に入れば、如何にしても此世ならぬ觀あり、病に瘦せし姿おそろしく、樂天的に笑ひ狂ずるなど、いよ〳〵物すごく、二百に餘れる女性患者の、その動作も種々にて、予を全く知れる人と誤認して、怨言を並べるもあり誠にお久し振でなど、袖に縋つて懷かしがるもあり醫員と誤解して恐ろしがるもあるが、無言の外は、病院はいやな所、恐しき所、壓制な所たるを訴ふるが如し、

　設備といへば、病室の如きは、檻獄と大差なしと云ふは、同醫員なる森田醫學士も語らる、されどこは多人數に對して經費の止むを得ぬより出づることにて、院長呉博士の如きは、病院の參考品の如き、

すべて自費にてつくられ、患者の爲には多大の苦心を拂はるゝよしなれば、此點に於ては、一般世間の同情を俟つの外なし

同病院は患者より生產力を得るに力め、豚を飼はせ、穀物野菜をつくらせて、多少收入の道を講じ、退院後の用意をもなさしめ、無藝の人に草取の如きも、非常に經費を省くとの事にて、患者の製作品に甚五郎を走らしむるものあり、あたら物の役に立つものにして、此病院を出さしむること能はぬもの決して少からず、實に精神病院は精神に異狀なき人の租税によつて成立せしむべく、決して營利的の事業にあらず、制限はあるも經費は政府より支出せられ精神病學の泰斗にして慈悲の心深き吳博士を戴ける巣鴨病院にして猶患者に不平の聲を絶つ能はざるなり、斯の如き難物なる精神病者に對して、營利の着眼を急がば、一生其患者を救ふ能はざるべし、

予はまた罪障消滅の名の下に、精神患者の治療を下總の中山法華經寺に見たり、木立物ふりて晝猶靜かなる寺院に、精神患者を集めて、盛に太鼓を鳴らして題目を唱へしめ、或は狂ひ、或は躍るもありしが、やがて其事終れば、線香を紙にて結ばせるなどそれ／＼手仕事をなさしむるが、いつの間にか氣靜まりて、いづれも數刻前の如き擧動なく、此間に於て誰も不平を訴ふるものはなかりき、そを幾回か繰返されて、全治するもの少なからずとの事なり、これを一に佛の功德と稱すれども、佛の心を以て患者に對する方法、宜しきを得たによるなるべし、

衣服の些の綻びをさへ氣に掛くるは、婦人の特性なるに、恥の何たるを忘れて狂ひ歩く如きは、誠にあはれ深き狀態ならずや、これ等の患者に對して少くも營利の念を離れて、慈悲の涙を頒たざる可らず營利を主義とせる病院には、看護婦の如きも亦、自然に人情に遠きが多かるべく、此點に於て多くの精神病院に對して、いさゝか寒心すべきものなきに非ず、あゝいづれの時を待つて、精神病者の遺憾なく救はるゝを見んか、さるにても精神病者の多き事哉

養育院の名物

目下養育院に收容せられ居る千五百八十餘名の多數の中にて、五名物と數へらるゝ者あり、一は同院古参の收容者として、明治十二年即ち十二歳より今日迄、專心只炭團を丸め居る石井金次郎と云ふ白痴者、二は明治廿三年收容されし啞女のお玉と云ふが洗濯工につきて得たる賃銀を積みて、既に三百圓餘の多きに達し、折々嫁貰もあれど、對手の車夫などにて金を目的とせるを同院内の係員が看破し、當年卅八歳の獨身者を通した、寧ろ氣樂と澄し居る者、又た昔浦賀にペルリの來たりし際、應接の任に當りし一人にて、井上信濃守と呼べる名高き人の孫に當る井上鶴吉(四十五)と云ふ、零落れて院内に入り水汲みを勤めつゝ、折には昔を思ひ出でゝや「世が世であらば殿樣じや」と氣焔を吐き居ると、今一つは當年八十五歳の太田吉藏と云へる江戸ッ子生ッ粋の大工が、腰も屈らず零落時代の邸出入をせし事を鼻にかけ、工賃の内より、五勺餘りの酒を買得て、夫れを樂り仕事もするが、氣に喰はぬ事あれば、他人に喧嘩を吹つかけ居れりとは、頗る妙なるが、こゝに同院内の一名物とも云ふべき本年百五歳の高齢目出度き老媼あり、

△元きつね殿の女房　小林たつと呼びて享和三年日本橋槇町花屋金平と云へるものゝ兒と生れたるが、父に三歳の折、母には十九歳の折、死別れ、同胞二人ありたれど、之れも前後して夭死し、又生別にとなりてか、たつは廿八歳の時縁ありて、麻布に住ひ、一時は狐殿と暖簾をあげて名高かりし、伊勢屋金兵衛の女房となり、遉がに江戸前の氣象と、生れついての美貌は狐殿の帳場を扶け、非常の繁昌を極めしと云へるが、如何なる因縁にやあらん、五十七歳の秋、同家を離縁さるゝの不幸を見るに至れり

△八十八の養育院送り　其の後のたつは金兵衛との間に出來し娘の他家へ縁づき居る所に至り、家政の手助けをなし居たるが、十年を出でずして杖柱と頼む娘に死に別れしが、江戸前の勝氣に滿ちしたつの他人の許に世話厄介を受くるが心苦しと、同家を立去り、僅か許りの資本を土臺に商業を營みしも、寄年波に昔の氣象も鈍り、終に八十八の折、芝西久保八幡町六番地より芝區役所の手を經て養育院に送り込まれたり、

△九十一歳の看護婦　當時養育院は本所に在りしが今の大塚へ引移れる前年、即ち明治廿八年の夏、八十餘名と云へる幼童の起臥せる室内に、コレラ病發生し、昨日は幾名今日も何名と云ふ患者の續出するに、看護婦も又倒れ、院内上を下への混雜中たつは九十一歳の高齢なるに收容の恩に報ゆるは此時と、己れ代つて看護の勞を採らんと申出で、三日目には同病に侵され、避病院に送られしが、氣丈の爲か十日足らずにて全癒し、足駄を踏鳴して再度退院せるに驚かぬ者なかりしと、

樺太の料理（下）

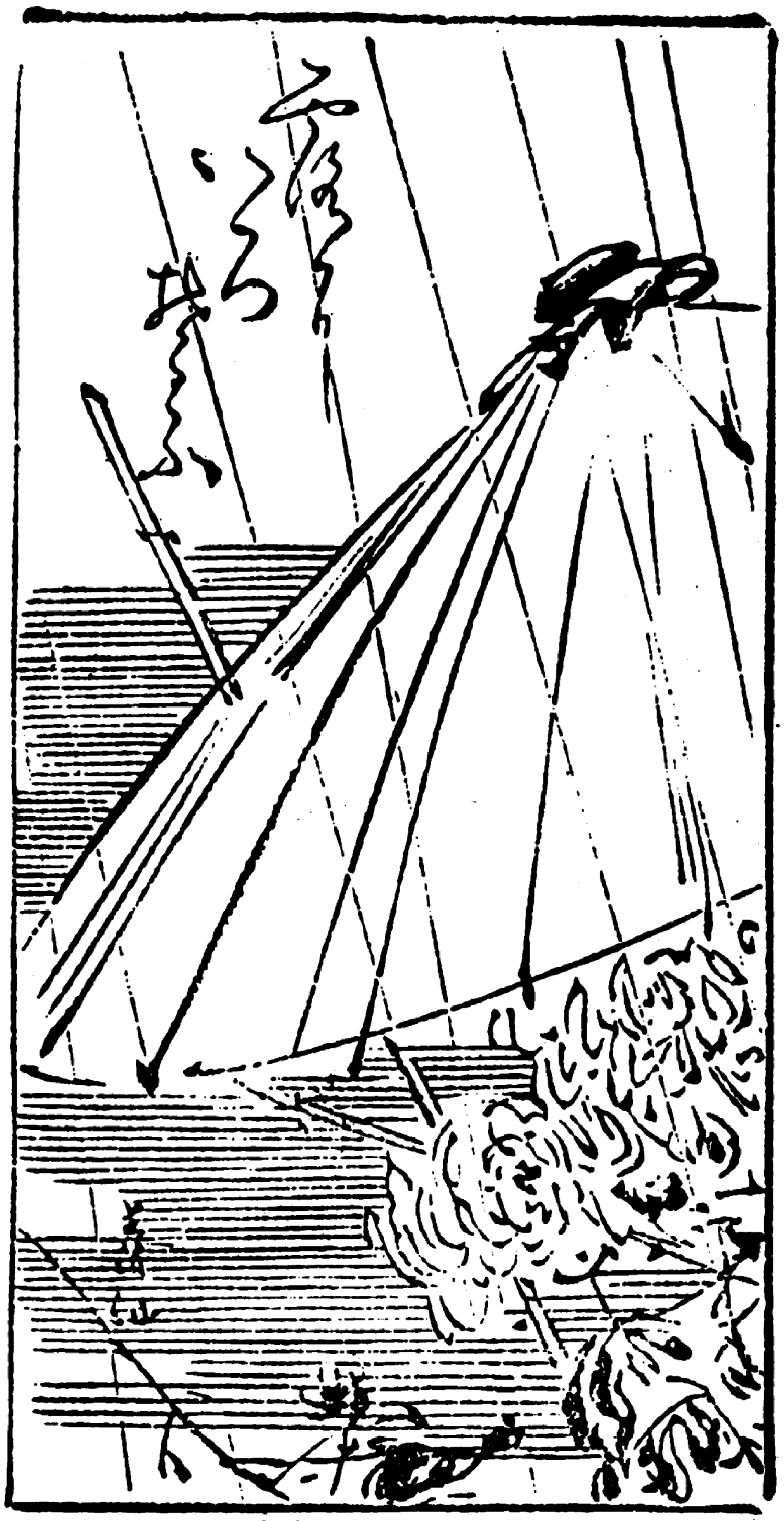
萩原雨六

△樺太料理のいろ〳〵　内地の人に樺太漁のお話をしても、實際に見た事がなければ、誰わつて眞實にする者はないが、先づ六七月頃、船で冲を走る時に五六頭、或は七八頭の大鯨が、頭を揃へて、例の潮を吹き〳〵通るのを見ると、丁度對馬冲の大海戰を見ると同様の感がある、その壯大なると共に鱒漁が始まる『時知らす』と云つて鮭も來る、サテ此際の漁獲はと云ふに、朝の六七時から夕べの六七時迄で、ない塲合には十石が十二石にすぎぬが、サア有ると云ふと僅十二時間に百石、二百石、三百石以上あつて、之れが鱒であれば百石の一萬二千本、三百石の三萬六千本、殆ど四萬本と云ふものを陸上の人夫十名足らずで、腹を割き、鹽にまぶりて小屋に納めるのである、忙がしいも忙がしいか、之が却て愉快なもので、漁の模様がいゝと、其晩大漁祝ひの酒を酌む、年々雇はれて來るアイヌ等は大喜び、手を打囃してうたふ、踊る、堀立小屋に一夜樽の底を叩いて宴會は開かれたるが、料理は内地から持つて行つた素麵もあり、その他多少の趣向もあるとは云へ、主に樺太の魚で、鱒の内に早く鮭でも這入つて來ればソレを燒魚とし、鱒をすつて蒲鉾にし、中には刺身鮭のひづ（頭部）は鱠に、一同寄合つて料理の魂膽大分異つたものが出來上る。

我々は平生鱒を主なものとして、アイヌ語で云ふと『チャ〳〵鱒』之は年の老いた意味で、即ち一度も二度も川口に臨んだ、夫れ丈け味のいゝものを數萬尾の内から選みとつて、可成骨に肉をつけて、三枚に卸したものを丁寧に洗つた以上、十俵二十俵と大樽に口をとつて入れてある鹽にまぶし、殆ど鹽を雪の如くした鱒を早くて三十分、長くも一時間位釣つて置いた後、晝飯、又は夕飯にソノ鹽を丁寧に洗いとり、適宜の切身にしたもので焚火のドン〳〵燃立て居るところ、火種をいつぱいに搔き寄せて、ジリ

〳〵焼いたのを喰はするが、コレ程うまいと思ふものはない　折には刺身　生は海獸の油であげる、若くはヘットで焼いてよし　唯だ火にあぶつたのをあつい飯の上にのせ、ソースを懸けて喰ふのもオツでございます、

樺太の鮭に『時知らず』と云ふ丈けい、味は持つて居らぬ、ひづを鱠にするが　味醂の用意でもあれば、ひづばかりをズッポン煮にして見るが此の贅澤は内地ではやれますまい、數年前越後の新潟へ行つて、イキナリ屋と云ふ土地有名の料理屋で注文をしたら、さた一尾三圓以上だと云つて、丼に少量のものを五圓とられた事があるが、　昔は知らず、今の料理屋には



此の眞似をする者はなからう、何ぼ魚の多い樺太でも之は毎日出來ぬ、ソコデ　重なるものは鱒の料理で、他に何があつた所で、鱒の味に及ぶものはない偶々鱒に飽きたと云つて、網にかゝつた大きな『オヘヲ』と云ふ鰈の王鰈とでも云はうか、疊一枚程のものがとれると、マア粕に煮てもよく沖から陸へ運んで來たものへ頬肉丈をそいで刺身にする、恰度蒟蒻を噛むやうなものだ、もし小さいのであれば、肉をそいで樽へ投り込み、人夫の腕にとぎ蒲鉾と云ふ、すり鉢でする代りのものをやつて、焼いたり、或は乾菜でもあしらうて、大鍋でグッ煮を試むるが、大江山的である、海賊的

である、

折に大きな蟹が網へ這入つて來る、ソノ蟹と云ふものは、漁場で云ふ粕たき釜、よく海岸の田舍へ行くと、五右エ門風呂と云つて仕かける、丁度それに酷似たものへ、三つも入れると手足がハミ出す樣な頗る小さからぬものが、獲れると沖の船で焚火にかけて喰ふ連中もあるが、夫れが陸へ來ると、早速釜へ入れてうでる、うでた肉に一同頰をうつが、或時であつた、自分は夕飯に飯を喰はず、足三本の肉をたいらげたら、臥床に入つて後、何やら全身に妙な感じをおぼえ、筋骨のゆるんだ樣な氣がした、その後大食は止めて、駄パンを叩いて粉にし・蟹の肉でフライを拵へたら、一同の大喜び、一里も二里も先の人がきいて、今度蟹をとつたら、是非フライを拵へて招んでくれ、數年來樺太に來たが、蟹のフライに心づかなんだと云ふ人が大分あつた。

內地のやうにウマイと云ふものは求められぬが、魚に不自由は少しもない、不自由がないと云へば、八月の中旬になつて、徐々引揚支度になりながら、僅の魚に目がくれて、モウ五日、今一週間と云ふ漁場主が出ると、其雇人夫が早く引揚度さ・沖で一と網に二十も三十も漁獲があるのに、夫を投り出す、夫が一度網に這入つた爲め、多少弱つて皆海岸へ寄つて居る、殆ど海岸はこの魚で、空飛ぶ信天翁・アイヌの飼犬などは天の賜物と、大喜びで之れに群がりソウだが、惡戯に嗅ふともせぬ、信天翁は折に目玉、犬は頭の肉を出して嚙ぢる位で・誰が來て拾つて行く者もない、ツマリ活きた魚に不自由のない證據であるが、一つ哀しい事には靑い物がない、野菜に缺乏な所で、近く露西亞人の部落でもあれば、チヤガ芋、大根、かぶらの類を得られるけれど、夫れに遠ざかつて居ると、全く野菜に乏しいので、年々干菜を用意して行く仕末だが、自分は二年目に、餘程考へたつもりで、二三種の種物を買つて行つて小屋の傍らの明地に蒔いたが、二ケ月程經つて、軈て引揚げると云ふ頃、漸くつまみ菜位に生えたのだ

から致方がない、その翌年は夫れを斷念めて、暇さへあれば山深く入り、野をあさり歩いて、口にすべき野菜採集と出かけた、又アイヌに聞いて、芹の種類のやうなもの、內地の蕗によく似て居るアカシと云ふものを見つけて、夫れを魚の副食にしたが、未だに樺太料理の事をおもふと、おかしかつたのか、苦しかつたのか分らない。

料理流行の昨今に於て、疊の上に魚や野菜を樂々ともとめて、夫れで、うまい考へのつかぬ事を思へば、寧ろ不自由な時と照合して、何か發明をせねばならぬと、常に心がけながら果しません。

◉親孝行の牛乳配達

孝は百行の基と言へど、之を全うして他の龜鑑となる程の人は、雨夜の星砂礫中の金剛石より尠なかるべく、笈を負て都下に遊學し、酒色に墮落する者は、此少年に對して愧死すべきなり、愛知縣碧海郡大濱町に織貝庫太郎(十二)と言ふ少年あり、父は在す、母は病氣に因て盲目となり、稼人無ければ貧困甚しけれど、母は如何にもして庫太郎に小學全科を卒業せしめんとし、其の子も又天才著しく學業に勵む程に、尋常二學年以來、何時も學級の首席を占め居り、目下は高等二學年生なる由、然るに母子二人の生活の資とては、庫太郎の細腕に依る計りなれば、同人は每朝未明より起出で牛乳配達を爲す事、三時間、歸つて炊事を爲し、盲母に薦め、自分も喰べ、登校し、歸れば、又夕刻の配達を爲す事、玆に三年、本年七月に至りて母が病氣に罹り、看護の爲め終に學校を退かざるべからざる事となりしかば、庫太郎は母が「庫や俺を構はずに學校へお出で」と言ふに拘らず、便所の往復にも手を貸す人なければとて、途に學校を休み、枕邊に本を擴げ、寢衣をかけて看護を續けつゝありたり、然れど如何にもして學校に行たしとの懸念は、途に十二歲の少年をして非常なる奮發をなさしめ、每朝二時に起出で、叔父と共に二里餘の道を往き、高濱町餘戸の渡船場に至り、牛乳を受取り、直ちに大濱町に戻り、之が配達を爲す事に定め、以前よりも賃錢と時間を餘し得、九月一日より又學校に上りて、受持敎員に逢ひ、喜んで復校する由を語りしが、學校にては學業品行共優等なる斯孝子を出す、我學校の名譽なりとて、酷く庫太郎の行爲を感じ、去一日同校講堂に町長役場員列席善行表彰式を執行せし由、千言萬言に優る善き敎訓と謂べし、



天長節

麹町女學校學監　小川直子

けふはかけまくもかしこき我天皇陛下のあれまし丶日にして、九重の雲の上を始め奉り、あやしき賤が柴の戸まで、門毎に日の御旗うち靡かせて、

うまひとももしほくむ子も大君の
今日のいく日をことほぎまつる

折しも空のけ色清う晴渡り、豊さかのぼる朝日かげ輝きつ丶、四方の山の端霧はれて、濃きうすき紅葉の木末色をきそひ、大和にしきを引はへたらんやうなるは、立田姫もよりてつかうまつるにや、といとめでたし、されば都のうちはさらにも云はず、しほ汲む浦にかつぎする身も友かきつらねて、思ひ思ひのほきごと述べつ丶うたげしあへるなり、其氣色高き臺の風流たる玉垂のうちには、樂を奏し舞などもかなづめり、その聲のどかなる風にたくひて、四方にひゞくは、いみじう面白し、隨ひては下かしも迄唯にえあらねば、數ならぬ身も

かくしつ丶千代も八千代も過さなむ
みもすそ川の絶えぬかぎりは

などかしこけれど口すさみぬ、か丶る樂しさは千早振神代にもためしすくなかりけむと思ほえて、いと尊くなん、

折にふれて

佐々木信綱

星きよく花の香たかし天つちと
ともにゆたけき我ご丶ろかな

前の世は仇かたきにやありつらん

　　二人が中のすぐせかなしき
いとし子は人にわづけて人の子に
　　乳ふくますろ身のすくせかな
見わくれはみそらの星の影とほし
　　おもひの國にいつか至らん
病みやせん唯一つなるたのしみの
　　酒さへのめずなりにけるかな
身をせむる我身の罪のくるしさに
　　うつら〱と夜も明けにけり
片隅にひかりうすくてまたゝける
　　小さき星をあはれとぞ思ふ

酒勾みやげ

中山幸子

靜かなる雨をめでつゝ眺むれば
　　稻葉なびかすかせだにもなし
小山田の靜が伏家の軒ごとに
　　いとうるはしく萩の花さく
うれしさのほにあらはれて賤の男が
　　つくる田畑のこぞにまされり
漁火を見るにつけてもすなどりの
　　あまのこゝろをおもひこそやれ
くまもなく月すみわたるさよ中に
　　はたをり虫のこゑのみぞする
海ばらに高くのぼりし月かげは
　　酒勾の川にてりわたりけり
おりたちて虫の音きかん秋の野の
　　月をさやけみ小夜ふくるまで
こよひこそ秋のもなかとなりにけれ
　　さやけき月にまつ虫のこゑ
秋の夜の月はのぼりて眞鶴の
　　みなとさやかに見えにけるかな
秋の夜の月見る人のこゝろこそ
　　みやこもひなもひとつなるらん

楠のわか葉

多田令子

天長節

あれましゝ大君の日のよき日にぞ
　千代をいはひて菊の花さく

萩

秋の野に虫えらびする乙女子が
　そですり匂ふ萩のはなかも

雁

雲間よりもり來る聲もきこえつゝ
　田の面におつるかりの一むら

鹿

小夜ぎぬた遠くきこえて月影の
　かたぶく山に鹿なくなり

栗

靜か家のかきのさゝ栗夕風に
　三つ四つ落ちぬよもぎ生の上に

秋夕

くれなゐの葉のみのこれる柿の木に
　ゆふひまばゆくからすなくなり

こほろぎ

あれはてゝ賤が伏家のせどの戸に
　つゞれさせとやこほろぎのなく

四十四箇國の語に通ずる婦人

伊國のコルトン女史といふは四十箇國の國語に通ずるを以て有名なる婦人なるに、更にサンスクット、シリア語、アッシリア語、ヘブリユ語、パリ語、アヴエストン語の研究を思ひ立ちて、昨年十月伯林に赴き、ヒセル博士に從ひて研鑽磨勵の功を積み、大に造詣する所ありと云ふ、女史は宣教師の娘にして、幼時父に伴きて早く既に希臘拉丁を學び、初め唱歌の教師となりしが、病の爲に咽喉を痛め教職を執る能はず、遂に國語學者たらんと決心するに至り、女史は諸國の語に通曉せる結果、比較言語研究の大志を起し、今月印度に渡航すべしといふ、

ひたち日記（二）

橘　絲子

次の日、芳子の君、使もてたにざくたまひたる添書に、昨夜の笙のしらべをきゝ参らせては、いかなる鄙媼も、默しがたくてとあり、うれしみて、とりあげみれば、

わが四ッ葉のたかとのにて中井絲子の君の笛のしらべをきゝて

さよ風に吹あはせたる笛竹の
しらべや空にすみのぼるらん

月前笛

すみのぼる笛の音きけばいにしへを
一ふし毎に忍ばれにけり

中井絲子の君のとはれければ

涼しさのかぎりならましゝげりあふ
青葉をもれていづる月かげ

といとあざやかにぞ、しるされける

さいつ頃、たのみまゐらせたるたにざく、いかにと、芳子の君の責めたまへば、手さへ歌さへ拙き身の、いと面はゆけれど、やみがたくてかくなん、

西丸翁媼の君に始めてあひ奉りて

幾年かしたひまつりしかひありて
みこと葉きけるけふぞ嬉しき

西丸翁媼の君がすまゐにまうのぼりて

繪に似たる山のすがたも海原も
みなわがものゝ君がたかとの

翁媼の君の御齢尚久しからん事をいのりて

荒いそのよせては返す年浪の
つきずこそあれ千代の後まで

よし子の君楓葉のあまたよせ給ひしを謝し奉るとて

とこしへにかたしけなきをそへてみん
みそのゝかへで返す〳〵も

芳子の君、またよべの月下のつどひに洩れたまへる俵守德、砂賀知能の二人の君にも、歌こひてたま

はりぬ、知能の君は聞笛てふ題にて

　ふえの音はいづこともなく聞ゆなり

　　天津乙女のしらべなるらん

守徳の君は月前笛てふ題にて

　月影のくまなきのみか笛竹の

　　こゑも雲井にすみのぼるらん

とわれば、返しとはなく、守徳の君に

　いかにせんしらべつたなき笛の音も

　　けふのみはえをのこしけるかな

また守徳の君に

　みこと葉はまたきかねとも人傳に

　　うけてうれしき水くきのあと

と心ばかりのいやのべて、二人の君を音なひまゐら

せつ、清子の君もまた

　西丸大人の樓上にて緫子の君笙を奏し給ひ

　しときによめる

　高とのにしらへ妙なる笛のねは

　　うきよをよそのすさびなるらん

さえ渡る君がしらべの一ふしに

　月の光もてりまさるらん

此日都なるせうとの君より、御消息ありて、和歌

三首そへたまひぬ、其歌

　十六夜に平潟灣に舟浮べて奏樂する催あり

　と姉妹の書にみえければ

　ゆくりなくいさよふ月に舟うけて

　　笛ふかんとは思はざりけむ

　平潟の舟遊をおもひやりて

　白浪につゝみ打たせて海面も

　　あはす琴笛いかに樂しき

　雨ふる日姉妹をおもひて

雨につけはた風につけはなれては

　いかにすらんとおもふもの哉

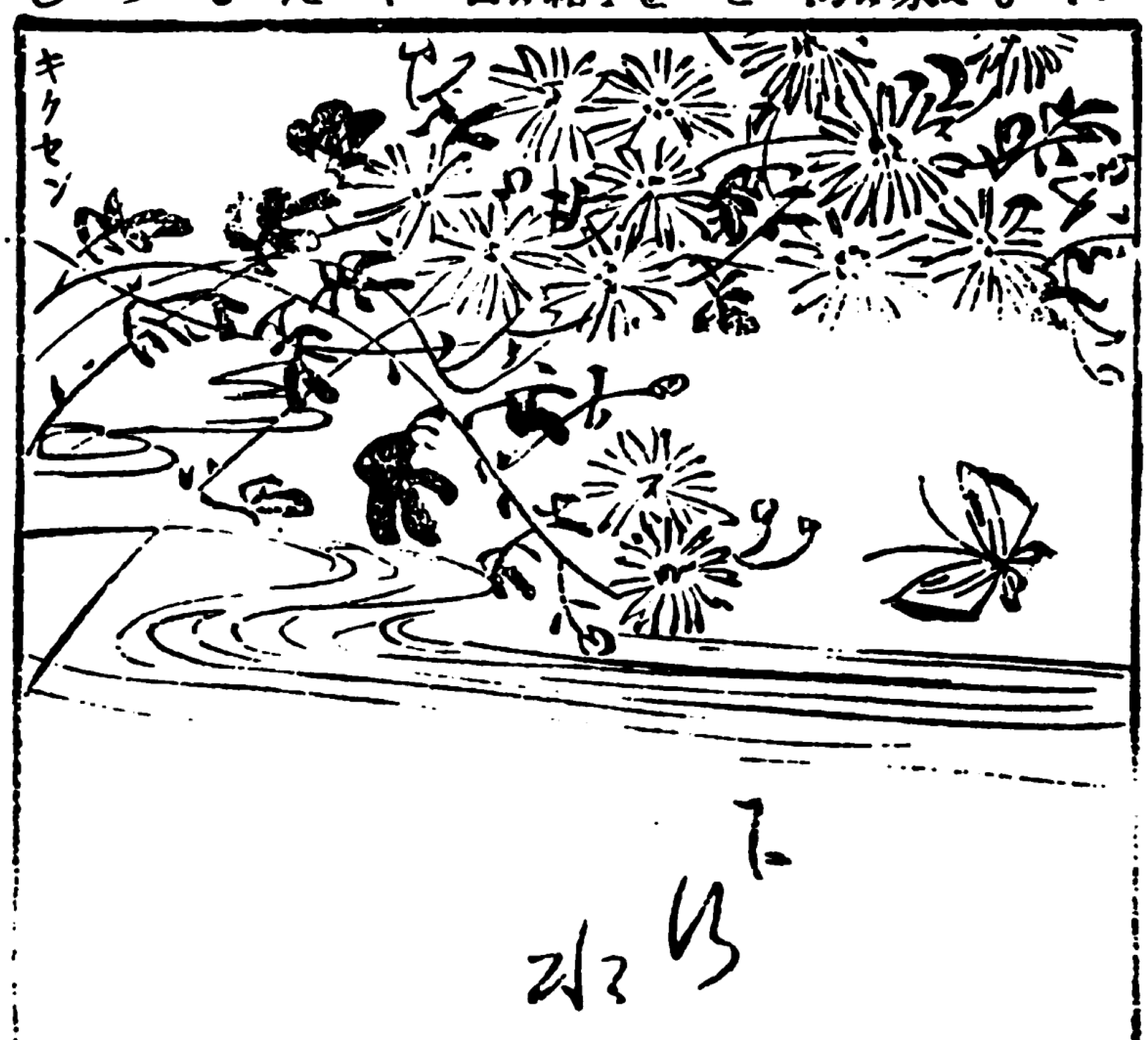
勿來の關のいしぶみの墨本は、清子の君より、そ

のわたりの風景のさまは、白雲の君、書にうつして

いづれも過ぎにし年送らせ給ひければ、見るたびに

慕はしさもいやまさりて、こたびは何れを措きても

此のみは訪はまほしと思ひ、西丸翁媼の君も、切にすゝめ給ひて、君かしこに遊ばん日は、おのれらも行きて、わがうまごなる人の家に伴ひてん、老いはてゝ、身も心もすゝまねば、まだ一度も、その家は訪はぬなりけり、平潟のいり海はほど近ければ、よしや晝なりとも、舟浮べて、十六夜のうらみをはらしてん、とまたなくいさみ給ふこそ嬉しけれ、その孫哲三の君と、近藤樂山の君とは、年わかくましませば、好みて道しるべしたまふに力づき、心地すぐれずとて近き日までこもりゐ給ひし清子の君をもそゝのかし立ちいでぬ、しばし〳〵人遣して、かたゝがひなからんやうなせるに翁媼の君の來まさねば、心いと安からず、いく度か顧みて、はるかにみすがたの見ゆるやうなり、と一人の君の云へば、また一人、歩みのおぼつかなければ、車にやあるらんといひ、あるは空模様あしくなりしにたゆたひ給ふにやなど、とり〳〵におしはかりて、待てどもかひなければ、遂には足早くすゝみぬ、



平潟の入海は、浪いとしつかなれば、舟遊せんには安かりなん、深くも目をとめてはみざりしが、渚に幾もとゝなき老松のわだかまれるほとりは、風清く涼しげにて、常磐木の小高き杜の中に、八幡のやしろあり眺望佳ければ、人々つどひいたるとなん、にぎはしき町近ければ、人のゆきゝ絶えざりけり、濱つゞきを一すぢにかけば、足もと近く浪の打ち

よする心地よく、はや山かげのかなたに見ゆるに、ゆくさきのこひしさ深うなりぬ、めぐりて其ふもとに出づれば、いとたけ高き松の、二本三本ばかり別れて立てるがそれなりときゝ、安からぬ山みちも、いつしかよぢ登りて、其頂にいたりつ、勿來の關ときくからに、あと問ふ人をも限れるにや、などまづ思はれて、道もせに散る花を、あはれと見てし人も、櫻の枯れはてゝ、いしぶみのみ淋しう建てる此の深山邊に、ふるきあと尋ねんてふ人は老いたるも若きも、古の世を忍び、英雄を慕ひ、無常に嘆く心なくてやはなど、千々の物思ひにうたれて、つらつら碑の歌をみれば『吹く風をなこその關と思へどもみちもせに散る山櫻かな』てふ義家朝臣の述懐はさらなり、其末にしるさるゝ、加茂季鷹が『千萬の仇にむかへるもの丶ふも、花さそふ風はすへなかりけり』てふ三十二もじの言葉の中に、いと深きあはれをぞ知らるゝ、

日も西にかたぶきて、はてしなき海原に、歸帆のかげのみゆるは、一しほ淋しきけはひをやますらんいく度かたちもとほりては、猶さりかたくて、そのこゝろを、

見ればかつかなしかりけり名こそ世に
　のこれとたえし關のふるあと

翁媼の君たち、いかにしたまひけんなど、つぶやきつゝ歸れば、來あはせ給ひて、御身たち、いかで待たせ給はざりしか、門邊にいづれば、はや遙にへたつるに、老の身の、足よわくて及びがたければ、思ひとゞまりつ、つれ立ちて行くに、己れらのみ車にのらんはきようなければ、けふは君たちと、そゝろありきせんと定めてしをなど、かへす〲もうらみかこち給ひぬ、

天長節をことほきて　　　　鈴木八重子

大君の千代のかざしとなりぬべし
　さかり久しきしら菊のはな



衛生と食物

醫學士　久保杏林

健康の人も、病人も、近頃ます〱牛乳を用うる様になりましたのは、衛生上喜ぶべき事であります、この牛乳は、熱くして飲むのと、程よく暖めて飲むのと、又は冷のまゝ、或はそれを猶氷などに冷して飲むのとの四通りあります、全體牛乳は温めて飲む方が宜いのでありますが、温めると臭がしますからそれの嫌ひな人は冷めたいのを飲みます、併し冷いのを飲みますと、それが為に下痢を催す人がありますから、さういふ人は、蕎麦湯の如き割を入れて飲んでもよく、牛乳を飲むが為に停滞して往かぬ人は、白湯を割つて飲んでもよろしい、又小兒などには砂糖を入れて飲ますに引かへ、砂糖では甘過るといふ人があれば、鹽をませてもよろしい、それからソップ、或は酒なども、其人々の好みによつて混じても差支はありません、其他コーヒー、紅茶等の香ばしい匂ひのするものは、臭氣を消して、尤もよろしいのでございます、

それから乳には全乳と、脱脂乳との二通りありますが、全乳と云ふのは普通の牛乳で、脂肪のあまり餘計なものを食べてはよくないといふ病人などは、脂肪を取去つた、即ち脱脂乳を飲みますが、また脂肪の多いものを食べたいと思ふ場合には、普通の全乳へ猶一方で脱去つた脂肪を混じて飲むのでありますが、これは醫師でなければ出來ません、それから牛乳から製した牛酪、乾酪など〻云ふものがありますが、それ等は皆滋養分に富んで居りますから、病人に食べさせるには至極よろしうございます、

夫から乳酒といふものがあります、之は乳で拵へ

た稀薄い酒でありまして、少し酸味を帯びて居ります、もとより酩酊するやうな強いものではありませんから、平常酒を飲むやうな病人は喜んで飲みます

それから乳を暫らく置きますと、黄色の甘いものが乳の上に浮んで參ります、それはクリームといふもので、普通日本で路傍などに賣つて居りますアイスクリームと云ふのは、あれはアイス（氷）を以て尋常の乳に混ぜて拵へるのでありますが、本統のアイスクリームは、前述の如く、牛乳の上に浮んで居る黄色のクリームで拵へるのであります、即ち乳の中から別に取分けたクリームを氷で冷して、アイスクリームにするのでございます、これは至つて重患の病人などに飲ませるには大變宜しうございます、

鳥獸の肉と魚肉とを比較すると、魚肉の方が水氣が多く、從つて軟かであります、尤も鳥獸の肉にても若いもの丶肉は水氣も多く、又軟らであります、それ故に病人には成べく、若い鳥獸の肉を撰ぶがよろしい、

又魚肉は軟かいことは鳥獸の肉よりも軟かいが、併し其内に脂肪があつて、之が大に消化の害になりますから、病人には成るべく脂肪の少い肉を撰んで與へねばならぬ、

又肉の中に極邪魔になるものは筋であります、之は中々健康な人でさへ噛こなすことが出來ないのであるから、身體に申分のある人の口にはよろしくありません、併し其筋も煎じ出すと、滋養分が澤山出て參りますから、決して無駄なものではありません

それから肉の新鮮なものは勿論よろしうございますが、あまり新らしき過ぎるのは硬くありますから病人などには少し日を經た方がよろしい、併し又餘り腐敗に近いやうなものはいけませぬから、其邊は適度でなければなりません、

それから肉から拵へるソップでありますが、このソップといふものは餘程養ひになるもの丶やうに思つて居る人が多いが、之は決して直接さう効能のあるものではありません、只之を食べると食氣が付く

ので、食氣が付けば滋養になる物が食べられますから、食氣の少い病人などに食べさせると、食氣がついてくるといふ位に止まつて居るのであります、

このソップにも濃淡はいろ〳〵ありますけれど、之は其病症によつて、醫師の指揮を受けて用ひたら宜しからうと思ひます、

先づ肉を以て製するところの滋養物の種類を上ぐれば、肉ペプトン、カルノ、シエトーゼ、トリール、ワレンチンキ肉汁の類であります、又肉の代りに用ふる滋養品の最新のものを上ぐれば、アルカルノーゼ、チ、モーゲン、オイラクトルなど〳〵いふ種類であります、

白味噌の話

農學士　牧　忍

白味噌は大豆と米麹と食鹽から作るものでありまして、大豆は黄白色のを用ひて、粒がよく實つて、形や大さの一樣に揃つたものがよろしい、黒大豆は凡そ味噌の原料には用ひませぬ、米麹は表面に白色の花がありて、下面は少しく黄色なのがよろしい、黒黴に赤黴の混つて居るのは勿論よくありません、食鹽は可成純粋で苦汁の少き程よろしいのです、水は清鮮透明で臭氣のないのがよろしい、今其製造法を簡單に述べますれば、先大豆一升に適宜に水を入れてよく煮て、其夜の間殘りの火の上に掛けて置き翌日になりて桶に入れて手早く摩潰し體温位の時に麹一升五合を温湯に浸してそれに加へて、よく攪混せて後、それに食鹽三合を温湯二合位に溶したるものを、それに加へてよくかきまはして、それに蓋をして置く時は、夏は三四日目で冬は一週間位で醱酵して味噌が出來ます、此味噌は甘味は多いけれども食鹽の分量が少いから、ながく貯へることは出來ませぬ、元來食鹽は凡ての細菌の作用を妨げるものですから、食鹽の分量が多ければ、味噌の成熟が遲くなります、これは其味噌の醱酵を起す細菌や、腐

敗を起す細菌の作用を妨げるからです、それですから味噌の醱酵中に若し腐敗するか、又は味が變つた時に食鹽を加ふれば、幾分か直ります、

一家の經濟

鈴木其星

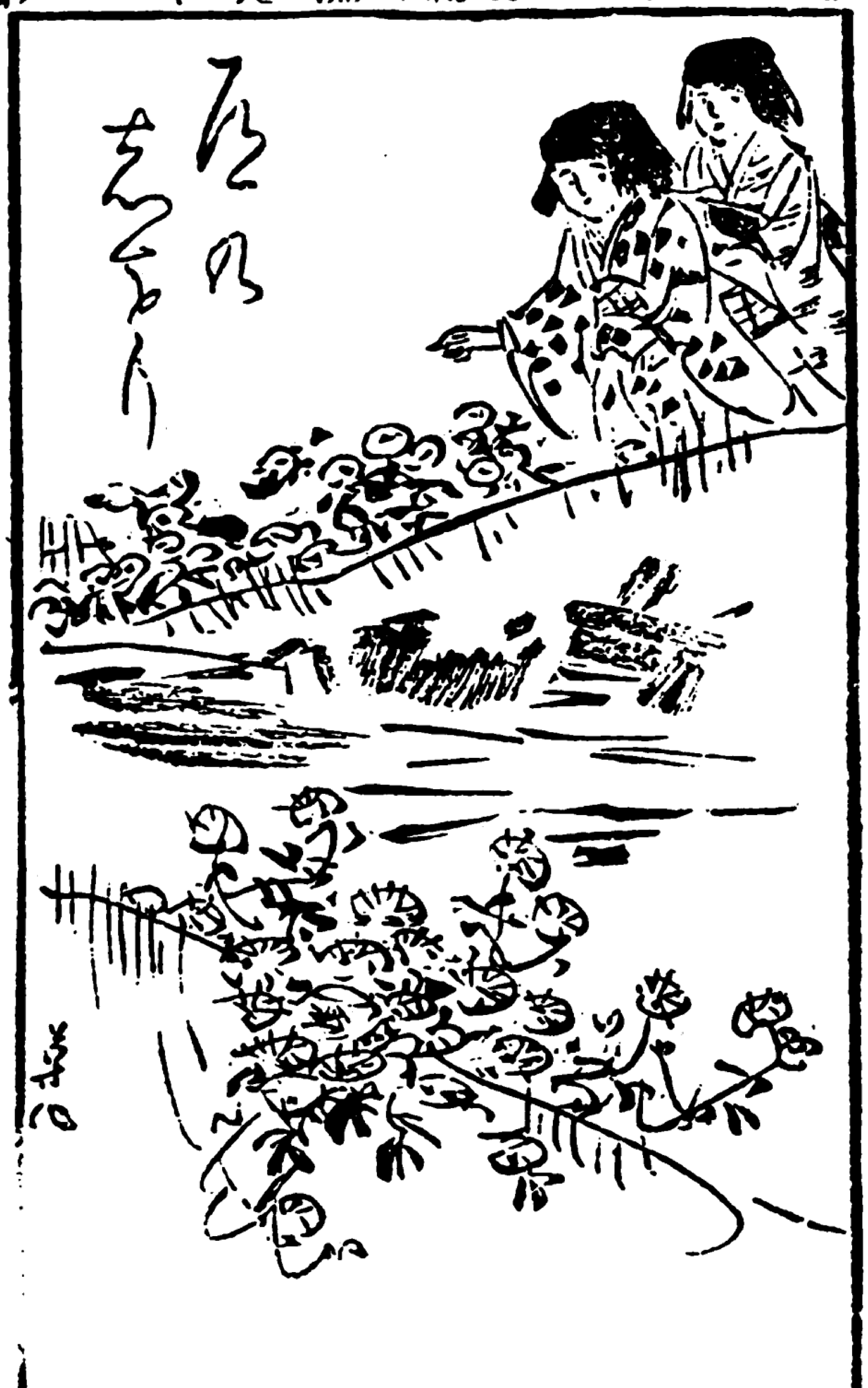
一國を料理するものを政治と云ひ、一家を調理するものを家政と云ふ、前者に宰たるものを、大臣と云ひ、後者を司るものを主婦と云ふ、主婦の任たる亦大なりと謂ふべし、而して國政の最も主要なるものは財政にして、家政の最も大切なる者は、經濟なり、一國の財政にして其軌を逸せんか國民全體の恐慌となり、國政振はず國務擧らず、其の弊たる輕きは數年數十年、重きは子孫百年の累とならん、一家の經濟にして其宜しきを得ざれば家族全體の迷惑となり、家政の紊亂、家事の不整頓は云ふまでもなく家内の不和合も之に基し、世間の不信用も之が因となる一家の經濟豈輕んずべきものならんや、

抑も家庭に於ける經濟の紊亂は主人公たるもの、濫費放蕩に原づくもの尠からずと雖も、十中八九は其の主婦たるもの丶不用意無頓着若しくは虛榮心のため奢侈怠慢の爲め支收の計算を誤り、一時の遣繰の爲に經濟の宜しきを失ひ、遂に一家全體を言ふ可からざるの悲境に陷しいる丶もの世間其の例に乏しからず、縱し斯くまでの甚しきに至らずと雖も、主婦たるもの丶不注意よりして、要なき冗費の日に重みゆき家庭をして何時も秋風落莫の嘆あらしむるは決して主婦たるもの丶推諉すべからざるの責任ならん、此れ何に因つて然るか、他なし、主婦が經濟的知識の缺乏に原づくものと謂はざるべからず、

近來女學の勃興と共に女子敎育の機關の到る處に設立せらる丶は如何にも結構なることなり、

然れども其の學科たるものを見るに大抵倫理とか國語とか漢文とか理科とか數學とか家政とかのこち

たきものより、繪畫體操音樂料理手工の如きものに至るまで、苟も女子たるものゝ知らで叶はぬことは大抵網羅し盡され、之れを一通り、修業し卒業したらんには天晴立派なる女學士となりかいなでの有髯男子をして後に瞠若たらしむる丈の資格は確かにあり、且其の上和歌に挿花に茶湯に琴三味線の如き風流なる意氣なる道にもたづさはり中には舞蹈や謡曲の如きものにさへ闇からぬ姫御前さへありしと聞けば却々に古の紫女清女のそれにも優れる才媛閨秀の續々輩出するは明治昭代の誇りとして稱贊するに堪へたれども、吾人をして遠慮なく言はしむれば此等の閨秀才媛をして悉く其一生をMissとかMabemoiselleとかの稱號付萬年處女として暮させるならいざ知らず、苟も人の妻となり母となりて一家を調理せしむるには十分家政上の知識を修養させ、貴族的贅澤的なる百技に長せしむるより一の經濟的知識と才能とに練達せしめん事こそ望ましけれ、斯く云はゞ人或は難じて言はん、彼等には家政學若くは家事經濟てふ必修的科目あればこれにて澤山なり、一小家庭を調理するに爭で國家を料理する經濟學杯の知識を要せんや汝の如きは牛刀を以て鷄を割かしめんとすると一般、愚に非ずんば物好なりと、さなり、吾人も亦然か思ふ吾人愚なりと雖も一家



の主婦たる夫人の双肩に直接國の經營を負擔せしめんとするものにあらず、然れども個人の病を治するの醫師が或る意味に於て一國の病氣を治する國手たるが如く、一家を經營する夫人が全然國家の隆替に交渉するとなしとは餘りに謙遜に過ぎたる言ならずや、治國平天下が一身一家の修齊に始まるものならば一家に於ける主婦の手腕豈國家盛衰の關鍵を握ることなしと云ふを得べけんや、勤儉貯蓄の美風が一身一家より一村一市に及ぼし、延て全國に行渡りてこそ其効果を奏するなれ、國家の貧富は個人の貧富に淵源するものならば一家の主婦たるものは或る意味にて一國の宰相なり、一家の主婦たるものは和歌の讀めざるも舞踏の出來ざるも謠曲の唸られざるも決して恥とせず、否切言すれば他の學問藝術に缺ぐる所あるも家事經濟の道に至りては是非とも深からざるべからず、それには單に家政學中にある斷片的經濟上の知識にて滿足すべからず、少なくとも一二の經濟原論位のものは講究せざるべからず、經濟學を以て全然利己心の上に建設されたる惡魔の樓閣と思ふは過去の事なり、今日の新經濟學は或る意味に於ける倫理學の一部なりとさへ言はるゝものなれば、少しく社會的趣味を有するものは假令婦女子なればとて爭で學はずして止むべけんや

今日無慮二百に垂とする女學校中其一二を除くのほか經濟學を一個の科目として講究するものなきは吾人の私に遺憾とする所なり、家事經濟の如き家計簿記の如き經濟學上の知識ありて之れを運用してこそ十分の効果を収むることを得べけれ、根底なき知識はたゞ樣に據つて葫蘆を描くと等し、今日我國女子の通弊として何事も翩々たる胡蝶の花間に狂ふが如く一向外形上の華美なるを尙び、貴族的無用の技藝に熱衷し、地味なる眞面目なることは全然之を嫌ふが如き傾向あるは詢に嘆かはしきことなり、

以上は少しく矯激に渉るの言なれども、吾人は近時婦人社會に琴や謠曲の流行するを聞き如何にも沙汰の限りと思ふがまゝに此言を爲すなり、斯かる無

赤子の啼聲

産婆西尾京子氏（五十八）か多年の經驗によりて得たる赤兒の啼聲の聽分方はうら若き母親の心得となるものあらん

一、悲しくもなく苦しくもなく去りとて大聲でなく小聲でもなく頻りに泣き續くるあり斯かる泣き方は決して悪るきものにあらずされば大に泣かせる可し嬰兒の泣は運動の一なり大に泣かせよと醫師が云ふ程なり

二、早産兒は決して泣かぬものなり痛くない樣に刺激を與へて泣かせる可しとは又醫師の言ふ所故よく〳〵注意す可し

三、饑渇の時は口を開きて頻りに乳を求むる如く泣く可し大に泣せる可し決して時刻外に乳を與ふる勿れ

四、口に母親の指を咬み嬰兒自から手の掌を握たり開いたり更らに又兩足を縮めたり伸したり烈しく泣き叫ぶ時は必ず腹痛の意を示すなり俗に之を「泣き入る」と云ふ

五、衣の紐が固過ぎたり體に塵でも入りて痛みを覺ゆる時は頻りに首を動かし眉間に八字を寄せオギヤ〳〵と力のなき泣き方をするものなり

六、氣分の悪しき時は能く寐入らず泣いては目をれむり眠りては泣く即ち間斷的の力なき泣方をするものなり

七、過度の寒暖に依りて泣く時は嬰兒の體に手を觸れて見れば能く分る可し

八、腦膜炎の時は泣かずに頻りに四肢を動かすと見れば又突如として泣くとあり同時に腹痛を起す

九、泣き聲の時に咳すれば氣管に異狀あるなり

以上は生れた計りなる嬰兒の泣聲を研究したものなるが更に六箇月以後の泣聲は左の如しと云

一、意に逆ひたる時は烈しく泣き叫ぶ

二、睡眠を催せし時は如何にも物憂げに所謂眠さうに泣く欠伸しては泣き泣きては欠伸するが如き其一現象なり

二、眠より醒めたる時は其聲甚だ鋭し

四、悲しき或は淋しき時は欷歔す

五、飢渇の時は尤も分り易く涙も流れず何となく哀れに泣く

六、身體に故障ある時は其の故障ある場所によりて泣き方も異なれり歯の痛む時は大にぢれて泣き耳の痛む時は他人の耳を貫く如き聲にて如何にも苦し相に泣く其時痛部に手を運ぶことあるも腹痛の時は泣き聲に間斷あり兩脚を縮め大に力む

以上は親々の普通知らざるべからざる事にて重き病の場合は左の如し

一、氣管支カタル等の時は咽喉に痰の掛り居る如き聲にて泣く

二、肺臓に故障ある時は泣くと云ふよりも寧ろ吟呻と云ふを適當とす

三、腦膜炎即ち驚風の時は泣き聲なか〳〵強く聞くに忍びず

尚ほ重病の子の泣く時は涙を流すならば先づよき方にて萬一涙なき時は親々の大なる注意を拂ふ可き時と知るべし云々

用の遊技に耽る暇に十分眞面目の學問を研究すべしそれには經濟學の如きは最も好個有益なるものなれば努々時流を追ふて跳返りと成ること勿れ、

幼兒の保育

太田恒子

近時育兒法も漸く世の開けゆくに從がひ生理的にかなへる取扱ぶりを見るも喜ばしけれどなほ思ひ出るまゝの一つ二つをかくなん。

我國の風俗として社會の上流に位する人ほど保育上第一の要義とも謂ふべき授乳法を誤れり何をかしかいふ自ら其乳を以て其兒を養ふに何等の障碍（疾病若くは公務等）なくも乳母を傭ふの習慣あり考へなき極みなり小兒を養ふがために決して母親の健康を害するものにあらず又夫がために堪能を減ずるものにあらずかし、小兒と乳養との關係に就ては讀者を驚かすべき統計もくさ〲あれどそは次に譲りて今は唯小兒の死亡數の母乳によりて養育するより乳母によりて養育する方に多きことを告ぐ。

產後四乃至六時間を過ぎたる時より哺乳せしめよとは書物上の定義なれども通常此時間内に乳汁の分泌は六ケ敷ものなり小兒は飢を訴へて呱々として大なる聲を放つ此際五香湯なるものを用ゆるは我邦古來の習慣なれども近頃小兒科學上大に有害のものと決定したるが如しと雖もなか〱に世に未だ行はるゝは利害を顧るの遑なく愛情に絆さるゝに出るものに似たり、單に食物を嚥下することを敎ゆるまでに白湯を小さき匙にて口に入るゝを可とす五香湯は大黄を主とせる下劑にて爲に疝痛を起すことあり元來之を用ゆるの目的はメコニーム（かにばゝ）を排泄せしめんとするにありて母親の初乳は能く此目的に適ふて稀薄にして比較的脂肪を多く含めるものとす。

授乳時間を一定すべきことは消化作用より論じ來れば眞に必要の事に似たれども實驗に於ては餘り仰々しく言ふまでもなきものゝ如し小兒が消化不良症

に罹ることの多きを授乳時間の不正なる罪に歸するは首肯しかぬるなりこれに就て取調べたる一家言は他日發表すべし但し小兒が早產なるか又は病氣に罹れる時は醫師の指圖を堅く守りて反くこと勿れ但し醫師は洋法の小兒專門科に問はねば無益のこと多かるべし。

今日の如く世の中の進みたるにも拘はらず醫師たちの階級は非常の懸隔あるが故に平生信賴すべき醫師を豫め定め置き一旦生命を托したる時はさまぐの迷信を起すべからず保育上の關係も少からぬぞかし又產婆を選擇することも保育上に大なる關係あるなり學問に乏しき助產婦の手によりて悔てかへらぬことも世に多し。

小兒が母親より幾許の乳汁を攝取せるかは折ふしは試驗するを可とす發育上大なる關係を有せるなり則ち生後第一週の終りには一晝夜に百三十五匁第二週の終には同二百匁第一ヶ月の終には二百七十匁の乳汁を攝取せざるべからず之を秤量するには正確なる臺秤を用ゆべし。

斷乳期の事に就ては書物には大抵十ヶ月乃至一ヶ年と定めあれど母體に異常なき限りは固形物を食し得る樣なりたればとて寧ろ二年位まで哺乳せしめたる小兒の營養佳良なるは實際目擊する所にして亦母體の健康を害ふ憂なしとす。

初生兒の乳を吐き青き便通あるは消化不良の徵候にして時に或は危險なる疾病の始めとなることあり故に此塲合は速かに醫師の診察を乞ふは勿論なれどされど唯過量の哺乳より吐くことは日々の如くあるものゆゑ之を一々醫師に詢るべくもあらねば先づ乳の與へ方を減じ適宜の量を定むべし。

初生兒の臀部又は股間、腋下、膝膕等に爛れを起すことあり、浴して後ち脫脂綿、ガーゼ等にて能く拭ひ去りて、硼酸末石松子等分のものを散布するを良とす沐浴は日々せしむべく其溫度は列氏の二十七八度とし必しも寒暖計を以て定むべし。

初生兒の眼病に罹りたるときは速に眼科醫を招く

べきなれども當初さしたる事にもあらずなど油斷して失明したる例も少からず殊に分娩を介補せる産婆の不注意より起ること多し。

總べて嬰兒を撫育せらるゝ有様を通覽するに生活程度の高き家庭ほどいよ〳〵不完全なるを悲むなり餘り大切に〳〵と叮嚀過ぎて却つて發育を妨ぐること多し。

臺どころ

霞袖女史

煮燒の仕方

◎煮物　鳥獸の肉類を煮物にするには、先づ煮物鍋一面に脂肪をひき、次に野菜を入れ、大抵やはらかく成りたる時、肉を入れ、さて後に鹽加減すべし、すべて肉を煮るには、成る丈鍋の蓋をしつかりとして、空氣の流通を塞ぎてよく煮るが宜し。

魚肉を煮るには、まづ鹽梅したる汁を仕立おき、能く沸騰したるを見て、魚を入るべし、鍋の蓋は、これも矢張りしつかりして置くが宜ろしい、魚肉はあまり永く煎てはいけません、能く火の通りたるを見て揚げないと、返て消化が惡くなります

◎燒物　肉類を燒くには、西洋の肉燒法にして、肉は密閉器の内に入れ、急に燒く方が宜しいけれどもこれは日本竈で普通の鍋では出來ませぬから、日本製法を茲に示しませう、さて鳥、獸、魚の肉、何にても能き程に切り、鐵串にさし、火にて炙るには、金串を時々くる〳〵と廻さねば、くつゝいて串を拔く時難義です、又金網で燒くには、まづ充分網を火の上に掛けて赤めて置いて、其上へ肉をのせぬと肉は網に付いて取り惡うございます、而して小さき魚などを網にて燒くならば、其片側が燒けた時、網ともに下して少しさめた時、魚を取り下し、更に網ばかりを火に掛けて、扨其片側燒きたる魚の猶半面を掛けて燒くべし、さうすれば如何に小さき魚でも崩れる事がありません。

◎揚物　油揚はまづ油を沸騰せ其能く沸騰ちたる所へ、揚ぐ可き品に衣をかけて入るべし、しかし一度にたくさん入れてはいけません、何故なれば、たくさん入れて置けば、其品物に油を吸込む事が多くて味が惡うございます、又揚げた品は皿に網などを渡し、其上へならべて能く油を切らねば不可ません、揚物に掛ける衣は、うどん粉をとき、其中に、玉子の白味を少々入れる方よし、

◎蒸物　むし物は何にてもまづ釜に湯を騰らせ、其上へ蒸籠を掛け、むすべき物を其中へ入れて、蓋をよく〳〵爲し、扨其中程にて火勢を弱め、そろ〳〵とむし揚ぐべし、中の品は、蒸し通りたる時は、直ぐに下さねばいけません、蒸過せば、消化も味もよくありません、蒸肉は大抵掛汁にて食し、且あられ生姜、又は、生姜の絞り汁などを添ふべし



けんちん蒸

◎小鯛　小鯛を脊より開きて、中骨を切り取り、腹の小骨も拔取り醬油二杯酒一杯へ十分間位漬け置き、外に豆腐を手にてつぶして水に入れ、一寸ゆでゝ煮たちたらば直に笊に上げよく絞り上げて鍋に入れ、鰹の煮出しすこしと、醬油砂糖を入れて詰まる迄煮る、其割合は豆腐一丁に鰹の煮出を五勺醬油入勺に砂糖二十目位にてよし、又別に人參牛蒡木くらげなど細かに切り、味を付け

て煮たのを、前の豆腐と交せ、之に玉子を入れてよく交せ合せ、前に漬けて置いた魚の腹を布巾にて拭きとり、其中に此色々を交せ合はせた豆腐を詰め込み、蒸籠に入れてむすべし、之は鉢肴物によろし

◎鳥のケンチンマキ　鳥は何鳥にてもよし、細かに切り庖丁の背にてよくたゝく可し、之をハウチと云ひます、肉も同じやうにすべし、かくしたるものを擂鉢に入れてよくすり、之に味を付けて、更によく擂るなり、其味は鳥肉五百目あるときは、鰹の煮出し五勺、鹽三勺、醤油五勺、味淋五勺、胡椒少々にてよろし、外に煎豆腐をつくりて前の鳥肉に交せ合すべし、煎豆腐の造り方は生豆腐を鍋に入れ、水を入て手にて潰し、火にかけて煮たちたる處を其まゝ笊に上げ、水を搾りて鍋に入れて煮る、其時は豆腐一丁に煮出し三勺、醤油五勺、砂糖十五匁入るべし、かくて出來上りたる煎豆腐をさまし、其を前の鳥と交せ合せたるものを、中上げといへるゆばをひろげそれに玉子を潰し付けたるものに包み、また其を美濃紙につゝみ、蒸籠に入れて二十分許むすべし、蒸し上りたる時は、紙の上より水をかけて紙をはぎ取り、しばし冷し置きたるのち、玉子燒鍋又はフライ鍋に油をしき、一寸揚げて燒目を付け、鍋に味醂一杯醤油一杯砂糖少々入れて煮立たせ、其中へ入れて一寸煮付けてよろし、

◎西洋人の趣向　一體日本の植木師は、人工を加へずに、成るべく其の自然の儘に發達するのを良いとしますが、西洋人は之が反對に人工を加へて、却つて自然の美を失して、夫れを喜んでゐます、かふ云ふ風なので菊の趣向にても、矢張正反對です、西洋のは學理應用か何かは知りませんが、私共に言はすれば、誠に詰らんものです、今の內苑局長の福羽逸人さんなどは、西洋へ園藝研究に行かれたんですから、西洋式なのを好んで、ゐます、西洋人は『さゞめ』を折らずに其處へ花を咲かせて、新工夫を發明したなど〻云いますが、豈夫に日本でも之しきの事を知らない者はありません、此處へ咲く花は『お化と』と申しまして、植木師仲間では之が咲けば失望する程で、最も忌み嫌ふものです、マア之れ丈けでも大低のことは推し計れるのであります、『某園藝家談』

下女の教養談

下婢と云へば、一概に輕侮する人が多いが、現今我國の中等以上の家庭では、必要缺ぐべからざる職掌となつて居る、此點より言へば彼等は今日の文明社會に於ける必須の一階級と言はればならぬ、此階級の改善せらるゝと否とは、直接には家庭の改良に關係し、間接には社會の進歩發達に影響する所が少くない、下婢の善惡が家庭に於る子女の教化に多大の關係あるは事新ら數唱ふるの必要もないが、彼等が地方開發の媒介者として一大潜勢力を有する事は世人の看破する所である、即ち地方幾萬の婦女子が都府に出で下婢として良家庭に住み込み、内にありては家庭の良習を見聞し、外に出でゝは文明の風氣に觸れ、故郷に歸りて後に、其見聞習得したる智識を、一家の裡、郷黨の間に押し擴むる事は都府在學の女學生が、其故郷に齎し歸る效果に比して優るとも劣ることはない、殊に現今尤も家庭の改良を要すべきものは、其子女を都府に在學せしめ得る家庭に對するよりも、寧ろ下婢として其子女を都府に出すべき家庭に於て急切を感ずるのである、

元來下婢とならんとて都府に集り來る婦女子は只僅かばかりの給金を得るのが目的でない、彼等の多くは結婚前に世故に慣れ禮儀作法を習はん事が主要の目的である、所が都府に知己なきが爲めに、口入業者の猾手段に罹るか、又は幸ひに良主家を得ても都人士の家庭の風習に嫻はぬから、其職務が勤まらずして、所々に轉々する中に、知らず識らず都市の惡習に感染して腐敗墮落する者が多いであるから、遂には地方の婦女子及其父兄をして都府奉公の危險に懲らしめ、延いて都人士をして良下婢を得るに益々困難を感ぜしむる結果となるのである、

故に彼等の都府奉公をば社會の改良に善用し、又彼等の供給を裕かにする途を講ずるは今日の急務であると思ふ、其方法としては第一には特志者が相寄りて下婢紹介所を組織し、地方の町村役場より身元證明を持つて來た婦女子に合宿所様のものに收容して、或期間下婢としての仕事を練習せしめ、其間に其者の性質氣風を見計らい、雇入申込者中適當の向々へ周旋するのである、左すれば地方の婦女子も安心して都へ出で、又雇入者も安心して使ふ事が出來る、尤も寄宿中は食料の實費は徴收しても差支がなからうと思ふ、何となれば之れまでとて彼等が口の定まる迄は宿泊中にも多額の費用が掛り、又其間には危險なる誘惑が多かつたのを免れる事が出來るからである、第二には都府の所々に下婢倶樂部を設け一ヶ月に一回成るべくは數回、日と時間とを定めて彼等を集めて、一方に於ては音樂、囃其他の娛樂に依りて慰籍を與ふると同時に、他方に於ては有益なる講話を聞かして教育を授くるのである、現に新潟市婦人教育會は、去卅七年より戰時紀念事業として、下婢子守女の爲めに、毎週金曜日夜間二時間宛、修身讀書算術家事育兒の各科を授け、教員の報酬其他は一切寄附によりて經營しつゝあるが、其成績頗る好良であるから、入學希望者が次第に増加して、目下百八十人の多きに達して居るとの事である、



雨宿り

澱水散士

洗髪さらりとして烏羽を欺き、素顔の花よりも美しければ、紅白粉は無用なり、蠶の口より出でたるもの身につけねど、他人のそべりとしたるよりもやさしく、茜の前垂ひらつかせて、甲斐々々しき木綿の着こなし、琴突きつけても三絃握らせても、島原祇園町の音色に譲らず、和歌俳偕香花茶の湯、凡そ風雅の道一通り知らぬはなく、もの縫ふ業さへ疎々しからぬこそ殊勝なれ、まだ二十歳には足らぬ身の如何に發明に生れつけばにや、これほどの事は習ひ得たる、

客の入り來るけはひに、遽しく出で來りて、これはお越しと云ふ唇に、何時も墨の少しつきたるは、例の短冊ひねくりたる名殘ならんと、心あるものは一入ゆかしう覺えて、お百合と云ふ名は呼ばで、うた娘とぞ、綽名しける、朝な夕な祇園の茶店に洒されながら、人の目に古びたることなく、見る度に新しくめづらしく、何時も初音の心地すと、詠まれし鳥にや比べつべき、岩のはざまに世を忍びて咲かんも、よき花は雅客の目に尋ね出されて、心靜かには散りがたき習ひなるに、都の名所に見て呉れよかしの名花、如何で人の徒に看過すべき、黄金の重りかけて、折よ靡けよと縋

る者多けれど、撓みだにせぬ枝のつれなき、及ばぬ戀に息も切らさず、猶ほ來ては男の價値落す、公卿の公達大店の若旦那・又かとうるさけれど顔には見せで、等分に愛嬌ふりかけ、やつと今歸しやりて一息つけば、例の花ぐもりぞと侮りし空より、春雨淋しく降り來りぬ、哀れなる京の雨とて、和歌好きの心は忽ち動きて、店をそのまゝに内に入り、短冊ひきよせて筆持つ時、表に人の走せ入りたる音して、

『暫く雨宿を』

と、云ふは男の聲なり、

『あア何うぞおあがりなさりませ』

と、云ひながら立ち出て見れば、なま暖き時候柄、襟先覺束なき羊羹色の紋付に長きものを横へ、雨に濡れては一入身すぼらしけれど、のびたる月代に顔の色すごきまで白く、やつれても淸しき眼元に氏のいやしからぬを見せたる、年は二十五六の浪人、軒下に立ちて空を見ながら、古びたる手拭もて濡れたる肩のあたりふき居たり、

『よもやと思うて居りましたに、遂々降り出してやみさうにもない空合、さぞお困りでござりませう、何うぞ此方へおかけなされて、ゆつくりおやすみなさりませ』

と、塗盆に茶をのせて、程よき床几の邊りへ持ゆき、

『さア是へお掛けなさりませ』

と、勸むれど、浪人はなほ立つたるまゝ、

『いや其には及ばぬ、何うぞかまうて呉りやるな』

『でもあなた立つておいでなされては、おみ足がくたびれます、さア、お茶一ツおあがりなさりませ』

と、再び三たび勸むれど、
『いやかまうて呉りやるな、是で結構』
と、何處までも掛けうと云はぬに、お百合はいぶかしみながらも、其意にまかせつ、床几にかけよ、茶をのめよと勸められて、何故にやいたく困じたる有様なりし浪人、今はやうやく安心せるものゝ如く、立ちながら柱にもたれて、
『もの云ふは今日が初めじやが、噂に聞くはもとより、よそながら顏を見たことも度々、和歌娘と評判の高い和女なれば、定めて此雨をだまつては置くまいな、』
お百合は白き顏赤く染めて、
『アレ何をおッしやりますやら、口のわるいお客様方に、あのやうな綽名をつけられ、お恥かしい事ばかりでござります』
『いやさうでない、たしかに歌の名人ぢやと聞いた、手跡も見事な事とやら、是非拜見したいものぢやの』
『滅相な、何として私共のすさびお目にかけられませう、それよりあなたのをこそ、お聞かせなされて下さりませ、猫に小判かは知りませんが、お短冊を是非一つ、』
と、二人ながら好な道に話は面白くもつれて、男よりも女よりも、詠みたる歌ども聞かせ合ひて、雙方言葉の絶間なく、吾を忘れたるものゝ如し、やがて足の疲れや覺えけん、勸めてもかけざりしものが、何時の間にか床几に腰うち掛け、お百合と差向うて和歌物語に餘念なく、短冊硯なども何時の間にか床几の上にあり、
鐘の音に驚かされて四邊を見れば、早や日は暮れかゝりて雨はやみたり、二人は呆れながらも可笑しく

男がきまりわるげに笑へば、女も顔赤うして打笑ひぬ、男は何事か急に思ひ出でたるものゝ如く、顔色かへて懐中さぐりてありしが、溜息つきながら小刀抜取り、

『はからず長話を致してさぞ迷惑、雨もやんだればそろ〳〵歸らう』

と、云ひかけて少しためらひ、

『耻かしい次第ながら、今日は鳥目の持合せが無い故、是を茶代に置いてまゐる』

と、件の小刀を差し出すに、お百合偖こそと勸めても掛けざりし意を悟り、天晴由緒あるおん身と見まゐらすに、如何なる事より世にはふれて、茶代に事を缺くほどには零落れ玉ひし、お痛はしやと思ふにつけても、耻を打明けて、小刀置かんと云はるゝ心根の正しさを身にしみて感じ入り、氣の毒さに耻かしさは打忘れて、

『何のまア其に及びませう、そのやうな御心配なされずとも、もう夕刻でございますれば、何はなくとも酒一つめしあがつて、

『いや茶さへも只馳走になる謂はれはないに、酒のなんのと左様な氣樂な身の上ではない、此羊羹色を大事さうに拭うた仕合ぢや、察して呉りやれ……』

斯う平氣に打あけられては、流石の才女も相槌をうちかね、氣の毒さに笑ひだにせず、さも笑止げにもじ〳〵せしが、めぐむ涙をそッと拭うて、

『お察し申してお氣の毒でなりませぬ、江戸のお武家さまとお見受け申しまするに、何うして玆へはお越しなされた、お聞かせなさつて下さりませぬか、私も江戸の産、幼い時に父母を亡ひ、よる邊なき身を今の母に養はれて、をかしう月日は送りますれど秋の夜長春雨のつれ〳〵にも、親もなく同胞もなき身の心

細く、身をしる雨に袂をしぼる事もござります、吾妻のお方と聞けばおなつかしうござりますに、是非酒、一つめしあがつてお身の上をお聞かせ下さりませ、私風情が斯う申しては失禮でございますが、袖に涙のかゝる時は、何事もお氣慰め、茶汲女のうか〳〵しても、誠の奥はござりまする、及ばずながらお力にもなりませう』

と、誠は響にあらはれたる言葉に、浪人の若者は感じ入りて、じつとお百合の顔見つめてありしが、忽ち大息とゝもに首打振り、

『其親切は辱けないが落ぶれても徳山進之丈女の力が借られうか、和歌の友としては、此後とも折々話しに來うが、身の上を話せなどゝ……ハヽヽ、粋が身を食ふて此仕合せと



云ふではなし、話して何の興があらう、ドレ日も暮れたもう歸らうと、立ち上るを引きとめて、
『失禮な事を申し上げて、お氣にさはらばおゆるしなされて、何うあつてもお歸りなされますなら、此お品はお持ちなされて、イエ何とおッしやッてもお預り申しませぬ、茶汲女なればとて、それほどにまでお卑しみなされますか』



『これはしたりさう云ふ譯ではないが、今度來るまで預つて置いて呉りやれ、和女は茶汲女なればとてと申すが、此方は浪人なればとて茶の香み逃げは致されぬ』

と、云ひ捨て出で行くに、お百合も今は爭ひかね、

『ではお預り申して置きます、けれど日は暮れる、空は晴れず、提燈お持ちなされませぬか、傘お持ちなされませぬか、アレま一散にお越しなされた』

と、其儘立ちつゝのび上り、姿の夕闇に見えぬまで、後見送つて茫然たり、

あはれ千古の貞女傳中に其名高き百合が、心の花はこの時よりぞ世にはかをり初めたる、

義俠なる看護婦

光武學校生徒韓國人尼根明(十六)は、本年七月明治大學在學中なる友人安鐘儿(十六)金商賢(十九)と共に、研學の爲に來朝したる者なるが、脆弱なる彼は、九月上旬より骨關節を病みて麴町區下二番町中濱博士の回生病院に入院治療する事となりぬ、然れど己れに貯へなきのみか、前記二名も貧書生にして、到底補助を與ふる事も叶はず、如何せんと案じ居る中、看護婦湯淺某には逃歸られ、次に附添となれる田崎お光(二十四)も在院僅に數時間にて、病氣の爲辭し去りしにぞ、病苦も食慾も訴ふるに所なく、獨り病床に憐しき血涙を絞れる折柄、玆に日本橋看護婦會看護婦茨城縣多賀郡高鈴村助川宮田お春(二十一)と云ふがあり、去月九日田崎の後任に雇はれ、倩々院内の模樣を見るに、同院は醫學博士中濱東一郎氏の病院にて、殊に外科は斯界に其名を知れたる醫學士桂秀馬の擔當の下に、日常三四十名の入院患者を貯ふるに拘らず、監督衞生の紊亂驚くべく、食時食堂に行く事一歩を遲れば副食物は愚か殘飯も見當らず、晝は病床に呻吟する患者等が、夜は看護婦醫員等と共に小宴を張りて立騷ぐ亡狀に、貧と病苦とに窶れし少年の哀れさに、宮田看護婦は不愍遣方なく思ひ、健氣にも看護料を辭退して、少年の爲に入院料を支辨し居れる、淸國公使館監督聡李漢糾李昌煥を助けて看護婦皆と共にパン罐詰等を買與へ、夜の目も合せず助りしも、少年の骨關節は寧ろ結核性と云ふべき大患にて、九月一日の夜八時五十五分急性肺炎を併發し死去したるにぞ、涙乍らに九月十三日より今日迄の看護料三圓八十錢を受取り、退院したりといふ、尙少年の死體は李漢糾外一名が引取て、翌日火葬に附したりといへり、因に宮田看護婦は早く父に死別れ、家には餘産なきに、自ら奮つて三十六年秋赤十字社に投じ、戰時中は數箇月廣島に勤務せし事も在り、今回の義擧中も、一方に弟墨麿(十九)の學資衣服料迄を絕えず貢ぎ居りしといふ、リボンの色に醉ふ式部連は、此看護婦の爪の垢でも煎じて飮むべし

哀れにも美しき家庭

横濱市本町二丁目家根職吉川庄吉の忰金造（本年二十六）と云ふは、幼時耳を病みて全くの聾となり、剩へ唖同様とさへなりたれば、學齢に達して横濱小學校に入りても、只習字のみを學び、次で出京して大學病院の施術を乞いしかども、到底望なしとの事にて、東京盲唖學校の前身なる、築地訓盲院に入りたるは、十三歳の春なりし由、爾來七年間根氣よく勉學の結果、去る廿二年の二月同院の普通、繪畫、和洋裁縫の三科を好成績にて卒業したるが、元來同人は生來の唖にあらず、聾の爲め遂に唖と爲りし次第なれば十分の用は辨ぜざる迄も、幾分は發音し得る筈なりとて、吃音矯正の術に熱心なる伊澤修二氏が、去る廿六年六月以來、種々の術を施したる爲、譬へば木と木と摩合ふが如き音調にて極々短き言詞は發し得るに至りたるが、茲に又相州中郡北秦野村字横野相原米藏氏長女八重子（本年卅二）とて、容姿は十人に優れながら、氣の毒にも生來の唖にて、夙に東京盲唖學校に入り、去る廿八年裁縫科卒業後、尚ほ留まりて他の學科を勉強し、去る三十二年首尾よく同校を卒業したるものなり、性質頗る溫良なるより、同校長小西信八郎氏は、大に同女の境遇に同情し、且つ先年盲唖教育視察の爲、歐米を巡歴したる際、米國にて聾唖同士夫婦になりて名聲隱れなきハースンターフ氏の如きを實見し居たれば、同校創立者山尾子爵と計りて、自ら兩人の爲めに出雲の神となり、去る三十四年花は雪と見紛ふ春四月十五日、東京盲唖學校創立二十五年の紀念式を擧ぐるに際し、世にも稀なる唖同志の結婚式を擧げたり、其後此新夫婦は、自分等が此幸福を享くると共に、同じ不自由の人々を教導せんとの志を立て、愛知縣豐橋東八町に世帯を持ちて、同町盲唖學校教師となり、夫婦相扶けて日々教堂に登る中、夫婦の間に長男鐵一（五）次男鐵義（四）艶重（二）を擧け、子等の爲には、特に乳母兼言葉の教師を雇ひて、一家いよ〳〵睦まじく、今回全國盲唖人大會華族會館に（十三、四の兩日）開くるや、金造は數日前より出京して、種々準備に盡力し、十三日は同會席上にて「幼年盲唖者の手藝」と題する意見を發表したりと云ふ、尚ほ金造は恩師の情にて、山梔の花さく身となたりるを喜び、山尾小西兩氏を始め、舊師の許へ夫婦子供の寫眞に、左の一首に歌を添へて贈り來りしとぞ、

にほひ出でん御世のためしの折を得て
先づ咲き初めし口なしの花

懸賞小説　貳等

心ごころ

東京　平井多喜子

誰が節をつけて歌はじめたのであらう、樂器と云へば鉦一つを便りに、人の情の蔭を頼んで、

盛りの花は、散りもせで、莟の花は枯るゝ世に、
莟の花は枯るゝ世に、

と、詠歌を歌つて、所構はず門に立つあはれ、木の葉の戰ぎも止つた夏の日ざかり、夢の中から其聲をたどるは、なか／＼に興味の感じらるゝものであるが、こゝ樺戸月形村の裏霞町の官舍、聞く人の不風流にも困つたもので、今しがたこの官舍の應接所に、しばし身體を安樂椅子にもたせて、華胥の國へ出掛けた所へ、お誂への順禮歌、よく寢つかるゝ所を調子に打つ鉦の音に吃驚して、片肱を椅子の枕から落すと、うつゝに縫ひさして居た、坊樣の涎掛が膝からすべり落ちた、

『シッ、人を吃驚させて、いやな順禮さんだ、旦那樣も御隱居樣も、奥でお寢み成さつて居るに、ホーラ坊樣がお目覺になつたんで、竹やが騷いで居る、

と、小言をいつて居るが、表ではもう手の内が出さうなものと、盛んに詠歌をやつて居る、豊は眼をこすり／＼玄關へ出て、

『順禮さん、もうよい加減にしておくれよ、やかましいぢやないか、いつまで歌つたつて出ませんからねー、

とまるで物でもほうり出したやうに云ふた、順禮は委細構はず、

後れ先だつ世の無常、誰からさきの夜の雨、老木

の松の袖ぬるゝ、老木の松の袖ぬるゝ、袂をよそにせんすべも、豈は氣が氣でないらしく、

『よしておくれといへば、よしておくれよ、強情な人じやないか、老木の松がどうしたの、莟の花がどうしたの、て、まア縁起でもない、そんなものは聞きたくないから、早う彼地へ去つておくれ、よく〳〵氣に障つたと見える、捨てゝ置けでよいに、態々玄關まで摽緻を下に出げて居る、

主人の居間は南に開いたる十疊敷、椽側の障子に沿うた、紫檀の唐机が置いてある、見附の床の間には彼の古今集の『若草』の歌を繪にした一軸がある、誰の筆かわからぬが余程時代な、高雅な、幅廣い大物である、並んで中床の眞中には、螺鈿の文臺に、恭しく佛像が安置せられてあつて、傍には主人が秘藏の香爐、銀梨子地の香盒、同じ蒔繪の硯箱、短冊、入などがあつて、それから隅の臺の上には、去年主人が獨逸から歸朝した際、南米の某博士から贈つて來た、と云ふ飛だ堀出しもの、非常に凝つた人體縮寫の可愛らしい、小さな彫刻物が四型程並んで居る同じ側の三尺の板の間には、去冬の雪の頃から、折々愛玩せる、村田製の獵銃や、短銃などが黄色の上袋を被らせられたまゝ、先代靜壽翁が高島城主から譲り受けたと云ふ備前某の名刀など、一緒に置かれてある、主人と云ふは、近來法醫學上研鑽する所があつて、醫界に其名喧傳せらるゝドクトル諏訪國彦で、年齒やう〳〵三十を越したばかりである、漆黒の髮の毛にくつきり喰込んだ額が、學者らしい人相で、そして何所やら愛くるしい一重瞼の黒眼勝な、人懐かしい顔立、其笑ふ時の露滿ちた光の沿うた情ふかい風眸には、如何なお藥嫌の坊ちやんも、氣難しやの孃さんも、我知らず打ち笑まされて、腕を出すといふ有様『君ア小兒科になりたまはんか』とは主人をよく知る友人から常に出る言葉である、然し主人の得意は寧ろ、外科解剖學であるさうな、今日は午後から珍らしく暇があつたので一寸枕を取りよ

せた、すると一種云ふに云はれない趣味のある順禮歌が、寢なさるなら、これを聞いて下さいといひたげに、歌はます〳〵佳境に入ると、それをぶち壞したのは豐である、もう止めればよいがと思ふて居ると、なか〳〵兩方が根くらべで、うたふ、怒鳴る、たゞ八釜しいばかりである、

『とし子、とし子、

呼ばれたのは奥様で、

『ハイ

と、答へて、しとやかに主人の前に出た所などは流石に豐らの見習はねばならぬ所である、

『とし子か、まだ叱つて居るやうじやが、豐は女のやうでもない、此日盛りにおゝやつて行くのだもの、いくら物乞でも巡禮でも可愛さうだ、これをお遣り』

と、そこに出した紙入を腮で見せると、奥様は十錢銀貨を出して、豐を呼ばうとすると、豐はまだ叱つて居る、主人は

『どうして豐は八釜しいのじやらう、折角歌うて居るものを、歌はして置くがよいじやないか、

『私が遣はして參りませう、これだけやれば喜ぶことでございませう、豐は此頃何か氣になるさうで大方また何かの八當りでございませう、

といひつゝしとやかに立つて行かれる、誠に何とも云はれぬ上品で、實によい奥様である、

『豐やまアお待ち、旦那樣が聞いていらつしやるじやないか、小言はよしてこれをお遣り、

と銀貨を出すと、豐よりは巡禮の耳が早い、歌をやめて玄關へ這入つて來るので、小言を漸くやめた豐も、

『オイ汚いじやないか、這入らいでも持つて居てやるのに、これをやるからさつさッとお歸り、

手の内を渡すと、巡禮も歌うた甲斐があると、お禮心にまた歌ひはじめる、主人は興ある事に思うて出て見ると、聲だけ聞いたのとは雲泥の相違、矢ッ

張乞食は乞食、あまり擧動があつかましいのに、聽かうと改まつて聽かれるほどの物でないから、今度は主人が、
『面白かつた、もうよいからお歸り、
といはれたので、巡禮は、
『有難うございます、
と、笠を傾けて覗くやうに辭儀をしたが、其頬は日にこそ燒けたれ、口元もいやしからず、どこやら奥様に似た所がある、主人はそを見送つて、
『三十に近い巡禮も可愛らしくないが、まんざら生れから賤しいものでないらしい、あれも世間で云ふ心がらと云ふのであらう、豊一つ巡禮になつて見ては、
果は大笑ひの中を、順禮は早や何れの門にかあはれな節をうたひはじめて居る、



小説

湘南の可亡人

國府津驛と、小田原町との中間、酒匂の村の片邊に、堀内別莊と云はゞ、土地の者は誰も知る才色双美の婦人佗住所あり、此家に出入りする人々には、書生とも紳士ともつかぬ者ありと思へば、又折々は角帽姿の學生も見受けらるゝに、抑も此婦人の正體は何者ぞと、村人の噂も高く、彼れより是れへと様々の虚を傳へけるが、素性を探れば、何ぞ知らん此婦人こそ彼西本願寺の新法主と共に、歐米漫遊の途に上り、不幸にも病の爲に馬耳塞にて客死したる、佛教界の名士故文學士藤井宣正氏の未亡人ならんとは、夫人は名を瑞枝子（三十七）と呼びて、信州飯山の生れ、亡き藤井文學士の夫人なるが、和漢洋の學問の素養も淺からず、文章にも熟達したる上、快活にして俠氣に富み、良人に死別れてより後は、現在の處に移りて、專ら回向と讀書とに餘念なく、自からは未亡人と云はずして、可亡人と稱し、其佗住居に置ける日々の出來事は、日記となりて折々雜誌『新佛教』の誌上に見ゆる事もあり、今は獨身のこれとて定まれる業もなきまゝ、亡夫の知友、さては弟子書生などの訪問し來るを悦びて快談至らざるなければ、客も亦樂しんで足繁く出入し、取り分け學生等は試驗準備や夏休の都度々々、必ず夫人の許に赴きて、慈愛母にも讓らざる世話を受け、其快活なる清話に汚れんとせる心の塵を拂ふも鮮なからず、さは云へ、夫人は村人と然まで深く交際せず、外出する事稀なれば、最初の程は村人等より怪しまれて、掏兒の姉御と誤認され、或時は警官に尾行されたる事もあり、或時はまた地方新聞記者に強請せられんとして、親しき野村子爵を煩はせし事もあり、或時はまた其容姿の美はしきが禍して、西本願寺新法主の愛妾と早合點されたる事もあり、久く一村の疑問となるに至りたるが此頃に至りて漸く其疑ひの雲も晴れ、天に輝く眞如の月のやうに、賢夫人として尊敬され、酒匂の里の可亡人と云へば、界限に誰知らぬものもなきまでに至りしとは、床しき人の歴史なるかな、

七十一



女子と繪畫

東京美術學校教授　黒田清輝

私は教育の目的を以て、繪畫を學んだのでないから、自分の學んで來た順序、自分の見聞した丈にたどつて、現今美術學校の授業をして居る次第である女子美術教育に就いては、近頃も近ごろ、漸く二三ヶ月以前から關係することになつたのであるが、いさゝか意見なきにしもあらずである、

そこで此繪畫が、どの位婦人に必要であるかといふ事が先決問題である、男子に必要であることは、今更喋々するまでもないことであるが、併しそれが婦人にまで必要であらうか、その程度もどの邊まであらうか、と云ふやうな事は、あまりさう一般に考へて居なかつたかの如く考へる、

併しよく考へて見れば、一般の人悉くが繪畫を學ぶ必要は、美術の眞正の趣味を解して、快樂を同じやうにして居るかと云へば、それは望んでもむつかしいことであるが、幾分かまでは其趣味を解する度を進めることが出來る、

而して其趣味を解す、即ち美術思想を進めた結果實用上果して如何なる利益があるか、繪畫は工藝上の發達に就ては、最も缺くべからざる科目で、繪畫が進めば、窯業の如きも、染色業の如きも、其他一般の工藝が大に發達するやうになる、されど或は窯業によつて繪畫を發達させやう、或は染色業によつて繪畫を進歩させやうといふことは、それは順序の間違つた話で、まづ繪畫を進歩させ、國民の美術思想を拵へ置けば、それですべて繪畫を應用すべき工藝は、自然に發達して來るのである、

次に起る問題は、工藝は男子の仕事である、即ち

男子には美術敎育の必要はあるが、随つて女子には其必要はあるまい、と考へて居る人もある、工藝は男子の専有たるや否やは別問題としても、實用上工藝の發達に繪畫が必要とすれば、打捨つておる女子こそ男子より多く美術思想を注入して置かねばならぬ、女子に美術思想を注入して置かねば、此思想を一般に行渡らすことが出來ぬ、

何故かと云へば、如何なる人でも、此社會に仕事をして居る人は、大なり小なりの家庭を造つて居る筈で、子供は母に育てられる、子供の接近するのは母親であつて、家を形づくるのは、主人であることに相違はないが、家といふものゝ集合體が社會である、



その社會の根元たる家庭の主宰者たる女子は、美術思想を注込んで置けば、小兒が乳を飲みながらも美術的觀念を他日に得らるゝやう、自然に敎育されることであらうと信ずる、

現今我國の文物は、非常に發展して、今後ますます進歩して行くに違ひない、そこで私は繪かきの専

門家として考へるに、工業の發達に、美術がその基礎とならねばならぬ筈であるに、却つて工業のお伴をして行く有樣で、今日の有樣から見れば、工藝の前途も危ぶまれる有樣である、

併し私はそれを心配して居るのではない、現在は甚だ幼稚な所に居るが、將來は發達するに違ひない私等も出來得る限りは、進歩せしむる考である、素より私ばかりでなく多くの同感者もあらうと思ふから、兎ても急に進める譯には行かぬ迄も、漸次に道が開いて行くであらうと思ふ、

前述の如く、女子に就ては、どの位迄は、美術教育が注意を拂はれて居るかと云ふことは、私人としては折々見受けるやうであるが、政府として充分に女子美術教育といふ事に力を入れて居るを知らぬ、今日の時期としては、政府でも、個人でも、今日以上の力を、女子美術教育に注がねばならぬ、而して男子の我々と相俟つて女子の美術思想を進めたならば、大に我日本の工藝界に稗益することが多からうと信ずるのである

女子と美術

石川殘月

婦人には學者乏しく藝術家も多からず、たゞ稀に婦人の間に學者を出し藝術家を觀ること是あり、これ何故に然るか、婦人の氣力性質が男子に及ばざる者あるが故に然るか、また婦人の性質が男子と異にして、凡ての點に於て特に學術と藝術とに於て男子に劣れる者あるが故に然るか、婦人は勿論、心身の勢力は男子に及ばざる點も或は是れあらん、されど是れがために婦人の學術と藝術とに對する研究進歩の實力が、根本的に男子に劣れる者あるべしとは斷定するを得ざるなり、

たとひ數百歩讓りて、斯の如き點に於て婦人は男子よりも劣れる事ありとするも、其が必ずしも女子固有の天性なるべしと斷定するを得ざるなり如何となれば、斯の如き差別相違が先天的性質に原因せずして、教育習慣等に原因することも間々あるを以て

なり、歐米の女子敎育は甚だ盛んなるが如しと雖もそはたゞ比較的に支那日本などよりも盛んなりと云ふに過ぎずして、本來の敎育と云ふ者より打算して云ふ事に非ず、之を男子の普通敎育と比較して、論ずる時は、男子の敎育は其性質に於ても、程度に於ても、女子敎育よりは數等の上に在り、勿論男子の敎育は直に以て男子の生活に關係するが故に、女子敎育よりも、盛大ならざる可からざる理由も無きに非らざるも、生活上の要件が既に女子敎育に重きを置かず、女子を男子の生活上の寄生的附屬物に終らしめんとするに原因せり、若し今日の社會を一新して、女子も男子と等しく生存競爭の間に、自ら生活の資を得ざる可らざる樣に、社會の境遇が一變せりと假定せば、女子の敎育は決して今日のまゝにてやむべきに非ず、必ず女子の生活に必要なるだけの進歩發達をなすに至るべし、即ち婦人の境遇をして假りに斯の如き境遇にあらしめ、是れが尠なくも二千有餘年間持續せる境遇なりとするに非ざれば、女子は男子よりも根本的に劣等なる者なりとは、斷定するを得ざるなり、

婦人をして學術藝術等の天才に乏しき者の如くならしめたるは、女子の天性に原因するに非ずして、數千年間の女子の境遇に原因せり、女子が男子の附屬物たる如き生活をなして、獨立の生活力を失ひ社會の境遇は女子に學問技藝の天才あるは寧ろ女子生活の邪魔物と同然にて、女子には斯の如き天才の發達は少しも用なき者となれり、稀に婦人の文學者や技藝家を出さゞるに非ざるも、斯の如き現象は寧ろ不思議異數の現象として、人生の常規以外の事となせり、暗黑なる洞中などに生活する動物は、洞中に光線なく、兩眼がありても更に其用をなさゞるより、二代三代または數代の後には、其動物は全く兩眼の必要を感ぜざるに至り、遂には兩眼の痕跡を止むるのみにして全く視力を有せざるに至る事あり、人類の性質も亦これと同樣にて、女子に學問技藝に出精せしむる必要を、數世紀間感せしめざる時は

女子は斯の如き性質を全く失ふに至るべきは見易きの道理なり、女子に勞働の必要を感ぜざる都會に於ては、女子は纖弱なる者としてゆるさるゝも、女子も勞働の必要ある濱邊の漁民、山野間に在る農家にありては、女子の體格は都會住居の男子の體格よりも大に勝れる者あり、智識才能も同樣にて、婦人は自己の智識才能を社會に自ら施して生活するの必要なかりしを以て、彼が天性の智識才能は、之を發達催進するの道なく、萎微衰弱して僅かに其痕跡を遺存するに至れるに過ぎず、

されば社會に於ける婦人の境遇だに一變して、將來の敎育も其に準じて改善せば、唯り婦人の位置品格等を高からしむるに止まらず、必ず男子に等しき學者も藝術家をも輩出するに至るべきは見易き道理なり、特に吾人が男子に比して靜思熟考の省察力に富み靜かなる、生活に適せる婦人の性質に省みて女子に希望する所のものは美術の研究にあり、美術の中にありても音樂、繪畫、彫塑の藝術の如きは、女子の爲すを得る藝術としては、最も應はしき事業なりとす、今日の女子敎育には、特に音樂の技藝の如きを、専ら授くるの傾向なきに非ざるも、是らは單に女子の嗜みとして、畢竟一種の娯樂を目的としてそを授くるに過ぎず、吾人の希望する所は單に娯樂もしくは嗜みとして授くるに非ずして、女子をして天賦の技倆を發輝せしむるの目的を以て、美術を研究せしめん事これなり、女子をして僅に刺繡造花の如き技術を研究せしめて恰も女子をして寸燐の箱張をなさしむると一般なる、內職の用に供せしめんとする如きは、吾人の敢て深く望む所にあらず、其等の目的を以て一種の美術に近き職業を學ばしむるも素より不可なるに非ず、只吾人は女子の美術研究の目的を更に一層高尙なる點に置きて、女子にも亦男子に等しき美術上の天才を發輝せしむべしと主張する者なり、

されど今日の女子敎育をして、斯の如き理想を實行せしむる事は、言ふ可して行はれざる者あるべし

茲に於て吾人も亦一歩退きて、今日の婦人に希望せざるべからざる者なり、

今日の社會に在りて音樂、繪畫、彫塑等の美術品を賞玩する者は、男子と女子と、何れに多きかと問はゞ、論ずる迄でもなく男子に多くして女子に少く女子は僅に音樂を除きては、美術の愛玩嗜好に乏しと言はざるべからず、これ今日の婦人は從來の敎育によりて、斯の如き結果に至れるものなる可けれど美術賞玩の嗜好心に乏しきは、大に女子の品性に取りて耻づ可き事なりとす、女子をして美術家としての天才を發輝せしむるの先きに、先づ美術製作品の賞玩嗜好の心を養はざる可らず、今日の婦人が比較的に音樂會に臨む者多きも、其等は多くは普通の演劇を見る積りにて、音樂會場に赴く者にて、音樂（特に西洋音樂）の眞味を解する者なるや否や大に疑はしき者なり、若し彼等婦人が果して音樂の眞味を十分に解する程に、美術の嗜好力を發達し居るとせば、繪畫、彫塑の展覽會などにも同様に多くの婦人の臨席を観ざる可らざる道理なり、されど今日まで何れの繪畫、彫塑等の展覽會に臨みて見るも婦人の來観者は甚だ稀なり、特に古美術品の展覽會の如きは、東京にありても西京にありても、婦人の來観者は殆んど皆無と云ふも可なり、美術品の賞玩嗜好といふ者は、一に慣習によりて養ふを得べきものなれば、婦人も力めて自ら嗜好力を養はざるべからず、婦人は衣服の模様縞柄等を品評するの能を轉じて、純美術の方に向はしめば、女子の鋭敏なる観察力は、確かに有力なる美術の批評家たらしむるを得べし、且、女子にして相當の美術の賞玩嗜好の傾きを有したらんには、兒女の敎育にも大なる利益あるべし、

故に吾人は今日の婦人に、餘り多くの事を希望せず、婦人も亦男子と等しく高尚なる、美術作品の賞玩者たり批評家たらん事を希望する者なり

△次號には、黒田畫伯の女子の人體畫に於ける高説を掲載すべし、而してこれを前々號に掲載せし小林畫伯の畫談と對讀せば頗る妙也、豫告す、



紀元二千五百六十六年　西暦一千九百六年　清暦光緒三十二年
明治三十九年十一月三日土曜日　かのとみ

△投書　この新聞誌面にも和歌俳句短文を歡迎す、續々おもしろき作を投稿あれ

▽定價　女鑑の附物にて女鑑の讀者には自然ロハで見らる、
▽廣告　一行十五字詰金二十錢但し四回に限る

發行人　紫式部　編輯人　清少納言　印刷人　赤染衛門

發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社

時言

繪畫の感化

山を畵けるに臨めば、山高く、水深し、日沒せんとして天甚だ紅し、川を畵けるに臨めば、水洋々、細石磊々、魚躍り、鳥群り、旭日映じて霧半ば去れり、花を畵けるに臨めば、瓣開き香散り、蝶舞ひ蜂働く、滿目紅々白々、異薫天の如し、月を畵けるに臨めば、雲開き水氣降り、滿界漠として一輪を見る、雁遙かに遊び、富峰足下に立つ、人を畵けるに臨めば、莞爾として笑めるあり、憤乎として戰はんとするあり、靜寂讀書するあり、耕すあり、釣するあり、伉儷伴行又愛兒左右に戲るゝあり、或は古聖眉目を開きて立ち、義士襟を正して座す、嗚呼畵工とならん、繪畵の人を化する、何ぞ斯の如きや

教育者

教育者たらん人は、一面に高潔の理想ありて、一面に實際の識見を有し、人をして天に通ぜしむる先覺たると共に、更に又實際世間に敏ならしむる案内者たらざる可らず、單に世にあかるきのみにては技藝の教師なり、空しく道學を語りて生氣なきは、文字の先生なり双ながら採るに足らず、今や滔々たる多數の女學生が、他日實際世に立つて、幾多の辛酸を嘗むるかを思惟し來らば、之に倍する苦心を以て、之を先んづる研究を遂げ豫め確實なる方針を示して、其行路の難を少くせんとこそ思ふべき筈なれ、夫子安閑として人生を知らず、徒らに文字章句を讀授し、其落すべき汗血の苦みに、些の同情なくして、常に天下泰平の顔付をなさんは、父母に代るべき教育者たる人の赤誠ならんや、



秋思吟

木内鷗子

澄わたる月の鏡に化すゝき、かげもてあそぶ我風さびし
風あれて瀨かれかす野邊に迷ふ、小狐あはれ月になくなり、
いかに世のつらき思ひにくろゝらん、盲人の笛の音も哀れなる、
夕あらしさわぐをよそに村岡の、木末にたかき松蟲のこゑ
秋かぜに色づきたれし蜀黍の、穗末にさわぐむら雀かな
いつしかも風に秋立つ向田の、松葉にそよく音めづらしき、
汝も世にわぶる類かともすれば、くさにかくれて鳴く轡むし、
人の世はさても似たるか籠に込めて、ありし昔の宿こふる蟲、
その恨今宵もさがの音に通ふ、調をつきに鳴くか松むし、

(此歌投稿中の秀逸より採る)

雜報

帝國婦人技藝協會

千家夫人を會長にせる、大日本婦人農藝會あり、大隈伯を會頭とせる大日本實業婦人會ある今日、また題號の如きも、京橋銀座一丁目六番地に設けられたり、同會は多年米國に留學して昨冬中歸朝せし、スタンフチールド大學の出身者飯島榮太郎氏夫妻の經營に係るものにて、會の目的は帝國婦人に各種の技藝を授くる事、研究會を公開して、各種技藝に關する教育講話をなす事、各種の製作品を汎く世に紹介し、且つ販賣の勞を執る事、時々技藝に關する展覽會を開きて斯道の奬勵を圖る事等とし矢張大隈伯贊助の下に三輪田、棚橋、沖田、佐藤、下田の各女史の幇助を得て、米國式に大活動を試み、其機關として大冊子の印刷物を毎月刊行すと云ふ

◎愛國婦人會の擴張成績　愛國婦人會にては、全國の女子人口百人に對し、四人を得、以て會員總數をして、百萬人に達せしめんとて、着々擴張に從事しつゝあるが、石川、山口、山形三縣の如きは既に右、標準以上に達し、岡山、熊本、富山、愛知外十餘縣も亦十分の成算あり、其他の地方も各支部役員をして、一層奮勵以て其目的を達せしむる樣頃日岩倉會長より懇諭する所ありたりと、



◎大日本實業婦人會發會式　去十一日午後二時より本郷座に發會式を擧行したり、同會長馬場達郎氏の開會の趣旨、坂谷藏相、山縣遞相、澁澤男等の祝辭朗讀後、女醫鷲山彌生氏の『婦人と女醫』、本間德次郎氏の『滿韓に於ける本邦女性の發展』、三輪田文學士の女子修養』、藏原惟郎氏の『實業と婦人』の演説あり、同五時より餘興に移れり、

◎關氏第三孃の結婚　貴族院議員にして、錦鷄間祗候たる關義臣氏の第三女花子は、步兵第三聯隊中隊長小原正忠氏と婚約整ひ、去月二十一日芝紅葉館に於て華燭の典を擧げしが、花子孃は華族女學校高等全科及び專修科（大學部）を好成績にて卒業し、小原大尉も亦前途有望の青年士官なりと

◎下婢學校の成績　新潟市婦人教會は、下婢及子守の女の爲、去三十七年中戰時紀念事業として、同地の高等小學校内に下婢學校を設立し、毎週金曜日夜間二時間づゝ修身、讀術、算術、家事育兒の各科を設け、教員報酬其他一切寄附により經營し來りしが、其成績頗る佳良にして、入學希望漸次增加し、目下百八十人の多きに達し、同時に下級勞働者等の風紀も、一新するに至れりとなり

◎東京女子音樂傳習所　神田區一橋通町二〇〇、同所にては、東儀鐵笛、上眞行氏の依賴により、大隈伯を會頭に戴ける文藝協會の爲に、近日上場の筈なる『常闇』の練習中なるが、其執行るを待ちて關係者會合の上、演奏準備會を催す由、尚同所にては新學期の開始と共に、生徒募集中なるが、音樂の素養なきものも、入會差支なしとのことあり、

文苑

巴里にて結婚式

鍋島侯爵の三女信子孃（二十）は、在倫敦帝國大使館に在勤する外交官補松平恒雄氏（二十七）と婚約成り去る二十日橫濱出發の郵船にて渡歐の途に上りたるが、孃は昨年華族女學校を卒業したる後、教師を自邸に聘して佛語を學び、才色雙美の佳人なり、又花婿なる恒雄氏は、舊會津藩主松平容大子の弟にして、一昨年學習院大學を卒業したる有望の外交官なり、健氣なる信子孃が今度の旅には、唯だ一人の侍女を引具して行くべき心なりしに、幸ひ鍋島家舊臣にして、商用の爲め佛國へ趣くものありて同行することゝなれり、尤も巴里には一條公爵が、帝國公使館附武官として在勤し、其夫人は孃と從弟の間柄なれば、公爵と共に媒妁の任に當り、萬事に斡旋する筈なり、

◎女教師の清國行　今回清國北京に初等の染織學校設置に付き、女教師一名入用なりとて、北京大學教頭服部博士より、手島東京高等工業學校長へ依賴し來りたるより同校長は機織科長高力教授の手を經て、千葉縣海上郡銚子染織學校長坂井氏の許に、其人選方を申越されしかば、坂井校長は同校第一回卒業生にして、專攻修了者たる野口ヨシ子（十七）を推擧したるに、孃は欣喜措かず、去月十日銚子を出發し、三日服部博士夫人と同行、渡清の途に就けり、着清の上は、食料住宅を給與せられたる上、月手當六拾圓の契約なりと

◎歐洲婦人の增加　英國統計協會の發表したる西歐婦人の增加せし統計を見るに▽獨逸は婦人の數男子より一百萬多く▽墺太利匈牙利は、婦人二千二百九十萬人にて、男子は二千二百四十萬人口西班牙は婦人九百三十六萬人にて、男子は九百萬人なり▽白耳義は婦人三百三十六萬人にて、男子は三百十二萬人なり▽諾威は婦人百十五萬人にて、男子は百〇六萬人▽瑞西は婦人百六十九萬人にて、男子百六十三萬人なり▽伊太利は一八八一年までは、男子の數婦人より多かりしも、漸次增加し來り、現今にては婦人の數男子より多きこと、十六萬四千九百九十三人△英國も亦百二十萬人の婦人多く、而してセルビヤ、ブルガリヤ、希臘の如き小國に至りては、男子の數婦人より多く、また北米合衆國は千九百一年の統計に就て見るに、婦人は男子より多きこと百七十萬人なり、されば歐洲は一般に婦人の缺乏を嘆ずる事なかるべき代りに、婦人の求職は勢ひ激烈となりたるなり、

八十

家庭と體温器

何れの家庭にても、體温器の一個ぐらいは備へ置く事肝要なるは云ふまでもなし、されど此器械は、能く品質を撰ばざれば、粗惡な品を購ふては、何の用をもなさゞるのみか、却つて飛んだ間違ひを生ずることあり、尤も品の良否は値段の高下に拘らず、假令舶來品なりとて、太平洋を越えて來る內には、赤道直下などにて計畫に狂ひを生じ易く、然ればとて和製の粗惡品は、値こそ安けれ、玩具同樣のもの多ければ、初めに當つて、專門の醫家によく〱試驗をして貰ひたる上にて買うがよかるべし又從來醫者自身の中にも、此不完全なる品を使用し居るもの少なからぬ由なるが、元來熱病の溫度を計る際には、一分一厘にても深き注意を要するものなるに、不完全の品と知りつゝ、之を使用し居るに至つては無責任も甚しく云ふべし、

園藝

菊の培養に就いて

之に就いて青山御苑、及大隈伯邸などの菊花培養係をなす、田付景福氏の談を聞くに

私は別に植物學など、云ふことは少しも知りませんから、學理的のお話は出來ないのですが、私の多年經驗せした、實際的のお話を致すに止まるのであります、

▽培養法　西洋などでは、人工を加ふるので、却つて天然の美を損ふのです、私は只適當に肥料を與へて、自然に委して行くのが最もよいだらうと思います、

▽菊の種類　色々ありますが、大別すれば、大菊、中菊、小菊、嵯峨、伊勢の五種類とします、

▽大菊　の中にも摑、妻拋、一文字等があります、凡て此菊は、花輪を大にするのが目的ですから、芽生のある毎に缺き取るが肝腎であります、

▽中菊　は其數無量で、花瓣の變化が甚だしく、此の種のものには狂菊に近いのがありますから、其培養も頗る面倒です、例令ば肥料を多く與へ過ぎると、幹が太り、さりとて之が少なければ細ります、花の咲く時は、其重みに堪へ兼て曲り、又は折れる事もありますから、素人の手ではマア極々難物の部類であります、

▽狂菊　は前の中菊の變化でありまして、花の外輪は管の瓣を出し中輪は匙の瓣があり、最も内部の瓣を平瓣と云いますが、之が變化して亂抱、盛上り、追狂などの名があります、

▽嵯峨菊　は又糸菊とも云いまして、花瓣の立つ樣にするのが良いのです、

▽伊勢菊　は花輪を大きくするのもよろしいのですが、例へば絹糸の如くに、下部に垂れしむるのが好いのであります、又葉と花輪の間を長くするのが、雅趣があるのです、之を培養するにも、餘りに莖を太らしめんのがよろしいと思ひます、

菊の歷史

理科大學附屬植物學教室にて、牧野富太郎氏の談られた譯でありますが、

菊の種類は非常に澤山ありますが先づ大菊、中菊、小菊の三種に大別するのが普通であります、其中でも大菊、中菊の全體と小菊の一部が同原種で、又小菊の他の一部は、之と自から其の原種を異にして居ります、されば菊には二種の系統があると云ふても差支ないと思ひます、で、甲の種類の菊も乙の種類も、共に支那から渡來したのは明白なる事實であります、私の考へでは抑もこの大、中、小の三種となつたのは、支那に於て培養した結果であらうと思ひます、支那に於いても野生の菊と園内に栽培して現今の園藝に屬する菊となつたことは人の疑はない所であります、

倩菊は支那から渡來したものとすれば

▽日本に原種がないかと云ふと決してさうではない、初めから支那の甲種類に相當するものが土佐に發見され、其の後鹿兒島縣下の大島に發見せられました、此の野生の菊は莖が四五尺にまで成長し花は白い一重で直徑一寸位なのが咲き、葉はハート形であります、然して乙種に屬するものは、日本固有の油菊と云ふに該當します、

花道の心得

利休流家元　正瓢庵宗月

古昔は生花の道なく、隨つて生花に定式なるものあらざるなり、されど生花の事起りてより、それぞれ花形の工夫あり、一家一流をなし、一流一法を定むるに至りて、花道多岐なるが如しと雖、花道の本旨は山水に添ふおのづからなる姿をあらはし、草木萬花其出生に順ひ、自然にそむかざるにあり、

東山義政公の頃より斯道世に行はれ、あらゆる儀式にこれを用ふるに至り、今は女藝中缺くべからざるものとなれり、さて初心のもて扱ふには、花器も只奇麗にをとなしきを用ひて、花も怪しからざるを撰びて挿すべし、珍らしく怪しき器を種々にあやどるは、花道の本意を失ひ、小兒の戯れに等しく、至つて俗情なり、又あまりにひねり過ぎたる或は模樣多きは素人好にして、雅趣の意に背けり、つとめてやすらかなる風情をとるべし、しかし催の折にふれては、珍花珍器、或はさびたる趣向も可ならんか、師を選み、稽古の功を積みて、花形心のまゝにならんには、此上の樂み如何でか他に求むべき、

或時太閤秀吉公武中某の茅舍にて、何にても花はなきか、利休花せよとありければ、利休はかしこまり奉ると、折ふしあたりの田甫に咲ける冬瓜の花を切取り、古き鎧のありけるを入船となし、彼の瓜蔓を床縁まで生さげたりしに、甚だうるはしく出來たるにぞ、風情おもしろしとて、太閤斜ならず感賞せられしとか、又ある時金の水ぶねに水をたゝえて床に置かせ、紅梅一枝を添えて、利休花を〳〵とありしに、利休かしこみて紅梅を手にし、水ぶねの上にて逆さにし、さら〳〵としごき入るれば、開花と蕾うち交り、水面にうるはしく浮びたるより、風情尋常ならずと、太閤また今更の感にうたれしと云ふ、實に味ある話ならずや、

生花は四季陰陽の氣を以てすべし、花器の口に一文字を入るゝこと草木の根にして、水中は土中と見

るべし、水際七寸を去りて陰陽を分つ、當時は花を二三種或は五種を挿せど、古代は一色を吉とせり、されどこは孰れにてもよし、自然の理を考へて作意あるべし、

花道は精一の元氣を以て、千萬無量の天倪顯出する、無形の眞理を悟了せざれば、花に生萌の氣なし花の活方は、眞は天地五行を象り、行は五倫五體をなし、草は陰陽體を顯はし、花と我と同體にして、萬法一如なる哲理として、利休居士此技術を後世に傳ふ、其草木と眞心精一にして、松に對する時は我乃ち松となり、梅に向へば我亦梅となり、杜若に向へば我其心になり、我と花とは同體なれば、終に天地自然千變萬化の形象を顯出するに至る、されば悟道の要術衛生の心法として、須臾も缺くべからざるものとなれり、而して諸派の風習陋俗に流れ、各異る所ありと雖、其源は皆一なり、草木には國風なき故に、唯其心術を以て、天地自然の元氣を保つ時は、遂に精一の氣顯出して、氣韵風韵の奇趣は、瓶中に躍如たらん、

水鳥の引もかへるも後絶えて、
されども道は忘れざりけり、

花を見るは席のよろしきを第一とす、相客に先づ御覽候へと挨拶あるべきなり、相客はお先へと一禮して、床前の疊をへだてゝ坐し、掛物を見、花を見其の風雅を賞翫し、花器等もよく注意して賞評あるべく、珍花珍器は一しほ心を用ひて賞むべし、扇は花を見るに風の緣もあれば、心安き朋友の前にても斟酌あるべきことなり、

懸花釣花を見るには席の様子にあり、立て腰をかゞめて見るべし、總じて客は主人に無禮なきやう注意す、失禮なき心掛専一たるべし、

花に眞行草あるは、元來筆道より出でたることにして、眞は坐したる如く、行は歩むが如く、草は走るが如く、立花は篆字、置花は眞、砂鉢物は行、釣花を草といへども、生花は通じて眞行草と形を區別して活くべし、

花形はすべて、ながしのつかひ方のみにて、いろ〳〵のかたち出來うるもの也、初心のうちは唯一つ形をよく生くるとを思ふべし、上達の上は、時に隨ひ機に應じて、種々の象に入るゝなり、故に花道はながしのつかひ方を工夫し、花形の姿に入るゝを以て本意とす、

庭前の花を生花に用ふべからず、據なき所望ある時は、閑靜に挿すこと肝要也、利休翁の庭に朝がほさかりの節、秀吉公御望みにて成らせられし事ありしに、圍の床、只一輪の牽牛花、葉をまじへて生置き、庭前の牽牛花は前夜翌朝咲くべきを殘らず摘み取りしほどに、庭前に一花もなかりければ、太閤一方ならず、賞賛したりしとぞ、

凡て生花は草木ともに込の中にさして見るに、くづを入れて立たざる時は、其根をわりて兩方へ開かせて入るべし、込は槿の木をよしとす、花をさすところは、枝の俣になりたる所を用ふるがよし、枝の俣なければ、其時の花に準じて、よきほどにわりかけ、ひらき用ふべし、込木は相應より少し細めにして、つよく持上る位がよし、槿はねばくてよけれど槿なき時は、其代りに杉箸竹串などを用ふるもよし込木は成るべく固くし　口狹き花器は一文字に一本にても入るなり、込なしにさすもよし、込木は目立たぬやうにありたし、

花を入るゝは山野に生出たる心を以てし無心にさして其色香のみを玩ぶにはあらず、みだりに花を縛りて生け、種々に枝をため、形を強て屈曲ならしめんとする如きは、花道の本意を失して造花の巧なるものに等しく、花に勢ひあらざれば詮なし、木の強き、草の弱き、各其生を得るを賞すべきなり、

掛物の前に花を活ける時は、繪の人物鳥獸の面、又は落款等のかくれざるやうにすべし、又掛物にある草木の繪の色と同じ色の花を用ふべからず、あるは萬花草木ともに花あるもの、葉ばかり、葉のあるもの、花ばかり入るゝことを嫌ふ、立花には用ふることあれど、生花には好んで入るべからず、又一説

陋巷の女繪師

憐なる夫婦の畫家伊勢の國より上京し、淺草區松清町の木賃宿にあり、其日の糊口だになし兼て居るとの噂朝報社員の耳に入りしより同社員は同町を捜し、夫より夫と、漸く本所區小梅業平町八木賃宿甲子屋と云ふに、妻なる芹香女史唯一人、瘦せ衰へし一子重吉(二つ)を掻き抱きて、三疊の一間を借りてありと聞き、點燈頃の小暗き門口、爪先の引掛かりさうな疊の上を一室に案内され、暫く待つ程に、洗ひ晒したる紺飛白の單衣に細き帶、子供を背に縛り、右手に竹の皮包を下げて、入り來りし年頃は四十許、長き旅に日に燒けて色黑く、貧に窶れて頰骨の高きが女史なりと、宿屋の主人が敎へぬ、社員は薦めらるゝ座布團を辭しつゝ、先づ是迄の經歷を問ふに、女史名は大澤お幸(四十)とて遠州濱名郡赤佐村重三郎長女にて、幼き頃より同地の山下青厓(七十)の弟子となり、書畫を稽古し、十五六歲の時出藍の譽內に高かりしが、二三年の間に父母初め親族悉くを喪ひ、賴る邊もなき濱名の住居もなり兼れ、藝が身を助くる不仕合せも、女だけに行先々の同情を得つゝ、旅畫師として遠く伊勢路に向ひ、引返し、又出立し、十數年を迂濶迂濶と過し、卅五年の秋信州路を筆一本に渡り渡りて、下伊那郡駒場に至りし時、緣は異なもの、是も旅畫師なる伊勢國松坂町日野町岡田清七(五十)號を燕雨といふに出會ひて、夫婦の約束をなし同道して松坂へ歸り、日野町岸松寺の裏手に借家し、夫婦して働きしも捗々しくは行かず、其內に昨年春長男重吉をさへ擧げしかば、田舍にては賣つて食ふ丈けの繪も買手なく、一層東京へ行きて腕も磨き、金を儲けんと、燕雨には姉婿なる岡田又右衞門よりの餞別廿圓と、貯蓄金四十餘圓とを力に、去五月上京し、淺草の木賃宿に泊り、廿日餘りを暮して、行先々の工風をなすに、到底も堪ふ程には金も取れさうになく、夫婦揃て遊び居るも、誠に心細く、分れ〳〵に働いて見んと相談一決し、其月廿日に袂を分ち、芹香は前記の木賃宿に入しも、忽ちに僅の金を費ひ盡し、重吉には乳足ず、有りとある衣類は悉く質入し、全くの着た切りとなり、肝心の筆も墨も紙さへ切れてと、同社員が所望せし揮毫も得られず、僅に書の斷片を請ひ得たり、憐れ陋巷に埋れ果て、知る人ありとも容易くは引揚げも得られぬ狀態、是からは如何する積ですかと尋ねしに、岡田の知己にて友禪の形付職日本橋區濱町長谷川久之助を賴りて、下繪なりと描かせて貰ひ、左もなくば緣日へ出で、辻畫でもしなければなりますまい、茲の家へも借りはあり、子供の乳の代もと云ひ掛けて、瘦せ衰へし重吉の糸の如き手を握りし其言葉の田舍丸出しの朴訥なるにも、氣の毒はいやまして、容易くは立際も見出し得ざりきとなん、

に夏水仙、曼珠沙花は苦しからずとあり、こは冬花なき時に葉を生る故なり、夏水仙は葉を生じ、四月に枯れ、六七月の頃に花さく、本名金燈草といふ、曼珠沙花は九月に葉出で丶、翌年四月に枯れ、秋のひがんに花さく時は葉なし、これ出生なり、故に假葉假花すべからず、

添物をさす時は、何によらず水際を高く入れ、添もの丶さし方は、眞の木へ添ふる草、茎見えて水際にてはひしと添へ、上にて木と草の體をきつと別る丶やうにすべし、さて眞の幹を添物にて隱すこと又眞の木にて添物の根の見えざるもあし丶、これを根〆も云ふ、

茶道盆立

有樂流　田畑夏子

この盆立の手前の目的とする所は、如何なる場合に限るかと申せば、それはいろ〳〵ありますが、大抵貴重なる茶器にて點茶する時に用ゆるやうであります、即ち祖先よりの傳來器とか、或は尊長者よりの頂戴品とか、又は親友より心をこめて贈られた器とかいふ場合に此手前をして、客の觀覽に供するのであります、

點茶用意は、茶入を帛紗につ丶み、小形盆即ち六寸四方の盆に飾り置、時間來り客も揃ひて、席入の挨拶あらば、主人は、本日は眞の盆立にて御薄茶をさし上げますといひて相互の禮あり、主人は座を立ち、水屋に退き、炭手前をして盆立にか丶るのであります、

點茶の順序

▽第一　例の通り菓子器を運ぶ、即ち目八分に已の方に向けて持出で、正客の前三尺の所に、左右と引退り、座につき、兩手にて菓子器の向を替へ、五寸前に差出で、兩手を膝の兩側につき、左右と進み出で兩手にて菓子器を直し、右手に中央を持ち、左手は膝の兩側につき、右手にて菓子器を正客の正面に

進め、兩手を膝の兩側につき、右左と引退り、客一同に向ひ、麁菓でございますが、召上つて下さいませ」と、挨拶をします、

▽第二　水指を運ぶ、例の如く目八分の處に兩手にさゝげ、持運ぶのであります、而して風爐釜の右の側に飾り附け、即ち釜と一文字に置きます、

▽第三　茶入、これは帛紗につゝみ、盆にのせたるまゝ運ぶ、持方は例の通りで、釜の正面に飾りつけます、

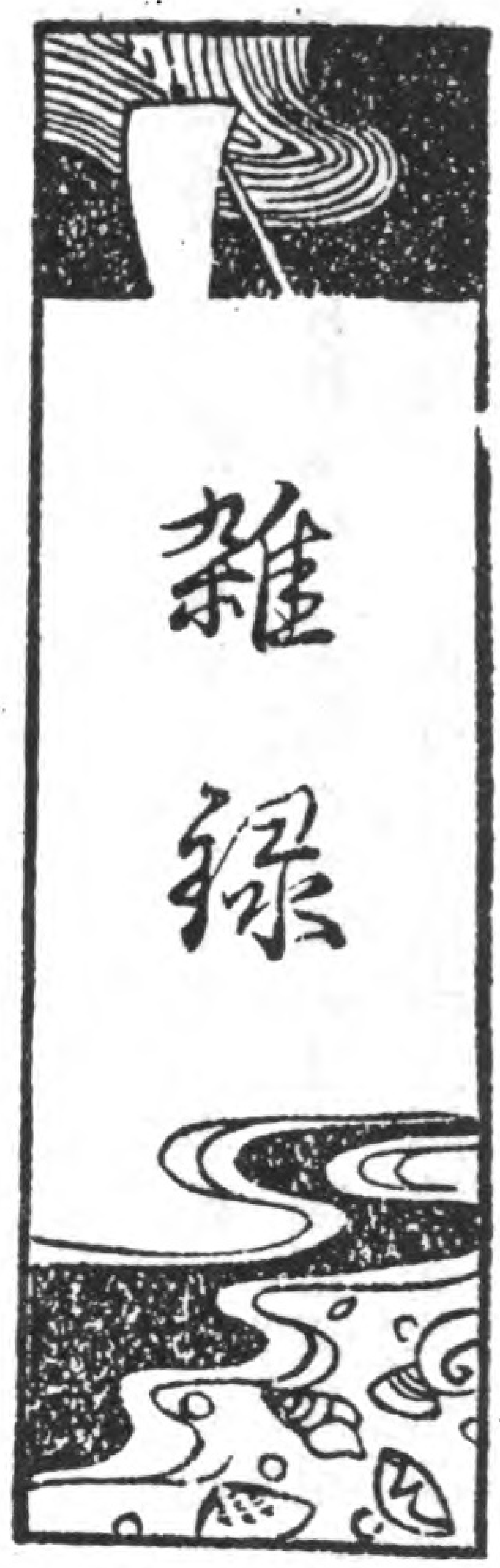
▽第四　茶碗は、茶巾茶筅茶杓と仕組めるまゝ、左手にて受け、右手にあしらうて運び、風爐の正面二寸手前に飾付ます、

△第五　建水、蓋置柄杓仕組めるを左手にて持ち運ぶ、釜と水指の中央に坐し、建水を下に置き、即ち膝側の左手に、柄杓を右手に取り、右手に持替へ、左手にて蓋置を取り、釜風爐の左側角の處へ飾り附右手の柄杓蓋置の上、右へ引きて風爐の前に飾り、身體の位置を正し、客一同に向ひて目禮し、兩手にて盆と共に茶入を直に手前凡そ五寸の所に引き、先づ茶入帛紗につゝみたるを、兩手にて膝の正面に置き、第一の帛紗さばきをして盆をふき、盆は元へ飾り附け、帛紗は一時片づけ、右手の腰につけ、兩手にて茶入の兩脇よりはさみて、兩手の人指にて帛紗をとき、右手に茶入を取り、左手に受け、右手にて第二の帛紗さばきをして茶入をふき清め、茶入盆の上の帛紗三角形の眞中に飾り附け、左手にて茶碗をとり、右手の帛紗持ちたるまゝあしらひ、膝の正面に置き、兩手にて第三の帛紗さばきをなし茶杓を清む、茶杓は右手にて茶入の左の方即ち盆の上に置く次に帛紗は一度腰に片付く、左手にて茶碗を取り、自分の正面に置き、左手にて茶筅を出し、盆の兩側手前角より奥の方へ置く、右手にて柄杓を取り、左手に持替えて膝の上につき、釜の蓋をとり第四の帛紗さばきにて釜の蓋の塵を左右とはらひてとる、而して右手にて茶巾を出し、左手の柄杓を右手に持換へ柄杓に八分目ほど湯を汲み、茶碗に移し、右手に

て茶筌を取り、初めの茶筌とうしを行ふ、茶筌とうしは、止情の茶筌とうしと申して、三度改めて三度ともに音を出すのであります、後はすゝぎ出して茶筌は元飾り附置の處へ置き、右手に茶碗を取り、左手にてあしらひ、一廻して右手にて取替へ、建水へ流し、右手にて茶巾を取り、左手の茶碗をふく、ふき方は例の通り三度半廻はし、茶碗の中は『り』の字形に二度ふきます、茶巾は元の釜の蓋の上に右手にて納め、右手にて茶碗を自分の膝の正面に置き、右手に柄杓をとり、右手のまゝ茶碗の右脇に假置をなし又右手にて茶入を取り左に受け、右手にて蓋を取り、蓋は元茶入のありし盆の上、即ち三角形の帛紗の上に置き、右手にて先に假置しました茶杓をとり茶を二匙茶碗に移し、茶杓は又茶碗に元の通りに置替をなし、右手に茶入の蓋を取り、元の通りに茶入の蓋をなし、盆の上の帛紗の三角形の上に納めます次に帛紗さばきをして茶杓をふき、帛紗を左手に持ちたるまゝ右手にて茶杓を元の盆の上に置く、而して右手にて柄杓に湯をたつぷりくみて、左手を茶碗にそへて、右手にて三口半程茶碗にうつし、彼の殘りの湯は釜に返し、右手にて茶筌をとり、左手は茶碗にあしらひて點茶し、よくたちたる茶を右手にとり左手にてあしらひ、客にのみ口よき所の參るやうに向を正し、右手に持ち、右膝の側凡そ八九寸先に差出し、身體は前こゞみの形にて客に進めます、

さて客より茶碗が返りますと、主人はそれを右手にとり、左にうけあしらひて、自分の兩膝の正面に置き、右手にて引柄杓にて湯をくみ、茶碗にうつし右手にて茶碗をとり、左に受あしらひて一廻はし、左手にて建水にこぼし、右手には茶巾を取り、茶碗の中に一度入れ、輪の所を取り、茶碗のふちにかけ三度半に廻し、これから又次の點茶に取かゝるのであります、





家と庭（回外）

子爵　秋元興朝

庭園の沿革

日本の庭園の初めは何時の頃であるか正確なることを知らんと欲するには系統的に研究を盡して見なければ分らぬが、口碑に傳ふる所、若くは多少形跡を存する所に就て考へると、奈良京都あたりにあるのが最も古いもの丶やうである、先づ一番古いと思はる丶のは大和の法隆寺に、

◎聖徳太子の花圃　の跡と云ふのがある、是れは寺の僧侶が傳へてさう云ふて居るので、一見したる所にて成程此處に聖徳太子の花圃があつたかと思へる程の形跡はない、所謂口碑に依つて名を傳へられたまでゞある、次は京都の、

◎神泉苑　是れは桓武天皇が嵯峨天皇の御宇に造られたものである、當時は東西二町、南北四町の境域を有し庭の主位に乾臨閣と云ふのが建てられて、之を正殿とし、其前に池があつたこと、又是れを代々天皇の御遊園と爲されたと云ふことも判然記錄に存して居る、宗時の歌に

　ちはやふる神の泉のその上に
　　花をみゆきのはじめなりけむ

とある、其後屢荒廢に歸して、應仁の亂以來は全然廢滅したのを、元祿の頃になつて僧某が再興して今でも神泉苑として殘つて居る、然し境域も記錄に存するものに比べては餘程少なく、且其形も果して往古のものに摸して造つたのであるかどうか、それも判然しない、次は融の左大臣の

◎六條河原の院の庭　是れは陸奥の景色を形どつて造つたもので、態々浪華の浦から鹽を運ばせて、

陸奥の鹽竈の浦で鹽を汲む風趣を演じたこともあつたさうである、其後此園も久しく荒廢に歸して居つた所が、德川氏時代になつて、東本願寺を建てる時に其の用地として之を與へられた、然るに此處が融の左大臣の庭の舊跡であると云ふことが分つて居たので、更に此處に枳殼殿と云ふのを建て、從つて相當に庭も造られたのが、今日まで有名な庭園となつて殘つて居る、今でも融の左大臣の塔なども殘つて居り、又當時植ゑられたと稱する白檀も二三株ある、其樹木は見受けた所隨分老樹ではあるが、眞に其時代のものであるかどうか頗る疑はしい、恐らく後世に至つて植ゑたものらしく思はれる、兎にも角にも此庭は多少殘つて居つた形跡に依つて想像を加へて更に造り上げたものであらうと思ふ、さすれば元の河原の左大臣の庭が果してどう云ふ形であつたかは固より判然しないことである、其外、古い庭と言ひ傳へられながら判然とせぬのは、後白河天皇の

◎法住寺の庭　である今の三十三間堂は其法住寺の本堂であつたと云ふに依つて考へて見ると、泉涌寺の境域であつたらしく思はれる、又法皇が紀州の熊野を平素深く御信仰で、態々行幸までもあり、特に此の法住寺の庭の中に新熊野神社と那智の觀音を御引きになつたのが、建物こそ違へ社も佛堂も共に現存する、今熊野觀音であると言はれて居る、之れに依つて見ても境域は大分廣かつたものと思はれる然しながら是れが果して今謂ふ所の庭の如きものであつたかと云ふと、さうではなく、寧ろ天然の地形の高低に幾分か人工を加へたものらしく思はれる、其外では

◎土佐繪の庭　の景色位のもので、是等の繪卷物が果して實物を描いたものであるか、又は全く想像畫であるかは何分藤原氏當時の實物が一つも殘つて居らぬから知るに便りがない、降つて足利時代になつて、

◎金閣寺や銀閣寺庭　が出來た、是等を確に原形を存する庭の中の一番古いものとしなければならぬ

是も中頃餘程荒廢したのを徳川氏時代になつて、修覆を加へたものであるが、閣と云ひ、池と云ひ、主なる部分は足利時代に出來たものであつて、十分當時の意匠を窺知る事が出來る、其の他は皆豊臣徳川以後に出來たものであるが完全に庭園の原形を存するものは、此時以降のものであつて、庭園の事を論ずるに當つては先づ標準を是等に取らなければならぬ、



庭園の種類

庭園が如何なる思想から生じて、日本に流行を來したものであるかは、數月前の女鑑に記述せし如くなれば、爰には先づ庭園の種類に就いての私の想像を述べて見やうと思ふ、自分は庭園に三種あると思ふ、即ち山水庭、平庭、茶の湯の庭の三つである、

◎山水庭　と云ふのは字に現す通りの意味であるが、山水を形取るに就ては實地の山水を小さく寫出すのと、繪の小さい山水を大きく寫出すのと、もう一つは元來無形のものを有形に造出すのと此三つがあるやうに思ふ

其中實地の山水又は繪畫の山水から出た庭は別に

細く說く程の必要もないが、無形のものを有形に造出した庭の好適例は

▽桂の庭　に多くあるやうに思ふ、例令ば月波樓と云ふ建物の如きは白樂天の月點波心の詩意を取つて、其處に建てられたもので、庭を裝飾する一の建物になつて居る、それから松琴亭と云ふのがある、是れは三十六歌選の齋宮の女御の

　琴の音に峯の松風通ふらし
　　何れの緒よりしらべそめけむ

と云ふ歌の意を取つて造つた茶室のやうなものである、其周圍には松の樹を多く植ゑて、其歌の趣を現してある、それから龍田山の御茶屋と云ふのも吉野龍田の花紅葉と云ふ言葉から出たので、御茶屋の周圍に紅葉と櫻が植ゑてあるが、紅葉は却て少い、それから園林堂と云ふのがある、是れは無量壽品と云ふ經文中の一節を形に現したのである、

其外細川などから出て、無形を轉じて有形に現はした庭が隨分多くあるやうに思ふ、一體日本人はイマジチーションを好んで風の神は袋を開いて風を煽出して居る、雷神は太鼓を叩いて居ると云ふやうな想像が往古から行れて居る、それに較べるとずつと高尙には違ひないが、矢張り同じ傾向に依つて是等の庭も造られたものと思ふ、甚だざつとした說明ではあるが、山水庭は以上三つの考から造出されて居ると思ふ、

◎平庭　と稱するものは主に京都に殘つて居るが是れは慣習上の考案から出たもので、風致も乏しく規模も甚だ狹隘で、更に賞するに足るものはない例令ば蓬萊山とか虎の子渡とか云ふて、石を置き小さい樹を植添えたやうなものが多い、故に一見庭としては甚だ詰らぬものであると云ふ感が起るが、元來此平庭は永久的に造られたるものではなからうと云ふ考もある、京都の紫宸殿の前の

▽南庭　などはホンの左右に櫻と橘と植ゑたばかりで、他は總體白砂である、淸凉殿の前の

▽御庭　の如きも吳竹臺、川竹臺と云ふて、竹が

二つ植つて居るのみで、他は同じく皆白砂である、是等には庭と云ふ字が實に能く當嵌つて居ると思ふ又公卿方、將軍、大名などが

▽書院　と稱するものも、其前庭は同じく白砂を盛つたばかりで、別に形は造らなかつたやうである是等は高貴な人が來られるとか、又は何か儀式のある時に、其時々に應じて一種の裝飾をして、平生に其れを取除いて元の白砂にして盛つて置くと云ふのが、本來の趣意ではなかつたであらうか、例令ば婚禮の時に島臺を出す如き、それと同じ趣意であつたとするならば、一概に詰らぬものとのみ云ふ譯にもいかぬ、然しわれを永久の庭として造つたものとすれば、甚だ沒趣味な詰らぬものと言ふ外はない、次は

◎茶の湯の庭　であるが、是れは山水庭にもあらず、平庭にもあらず、別に一種の庭である、茶の湯の起源は能くは知らぬが、世の中の所謂利用主義が本であらうと思ふ、即ち既に捨てられたものを採り他の目的を以て造られた物を寄集めて、而も唯ゝ集めたゞけでは詰らぬから各々其有する趣味の配合を好くして之を用ゐ、さうして茶の味を成さうと云ふ是れが茶の湯の本旨であらうと思ふ、從つて、其配合に適する建物を要するので、茶の湯の座敷が出來座敷があれば其周圍を裝飾する庭もなければならぬと云ふので、所謂茶の湯の庭も出來たことゝ思ふ、茶の湯の起つた時代は最も禪宗の盛んな時代であつたから、餘程禪味を加味した所があるが、禪が本旨ではなく、配合と云ふことが本旨であるから、從つて庭も強ちに山水に由ると云ふでもなく、又他に是れと云ふ據りどころもなく、總て相待つた配合の上から造られてある、

地形と庭園

今京都あたりに存する庭の種類を數へて見れば、山水庭、平庭、茶の湯庭の三種の中に含まれる、他の地方の庭園と云ふても元と是等に倣つて造られたものであるから、略々相同じき形を成して居る、然

し又其土地自らの天然の地形に依りても庭の趣向は自から多少異らうと思ふ、即ち京都の庭は餘り築山を用ゐないのは、周圍に山があつて、其れを取込で庭が造られるからであり、之に反して東京では山が無い故に、山水の景色を造るには必ず築山を築かなければならぬと云ふ如き、斯様に地形と相待つて庭園の趣向の異ることは至る所に見らるゝのである、

時勢と庭園

世の學者は、繪畫に依つて當時の人情風俗を知ることが出來るが、文章に於ても亦然りと說いて居る自分の考では其點は庭園も亦同じで、之に依つて當時の風潮の一端を窺知ることが出來ると思ふ、其證據としては足利時代に出來た庭が、多く禪味を帶びて居る如き其の一例である、又二條の御城の中の庭が、今日の我々の眼から見ては分らぬが、當時の陣勢を形取つて造られてあると言傳ふる如く、庭造傳の中に、書院前の庭には築山を造るべからず、垣も人の丈より高きを造るときは下部を透すべし、刺客等の伏匿なき爲の用意なり、とある如き、又其例である、庭造傳の中に五禍三忌とか三吉二祥とか云ふことが書いてある、是等は古く足利時代に起つた考でなく、何れ利久遠州の後に起つた考で、多分は易若くは其他一種の信仰の上から生じたものと思はれる、是等も亦其例である、されば庭園に依つて當時の人の思想の一端を窺知ることは出來るに相違ない

婦人と文學

文學士　三輪田元道

自分は近來女子を敎育するに付て特に深く感じましたのは、今日我國の婦人間に行はるゝ所の文學の內容、即ち其の思想の本質如何と言ふ問題であります、蓋し文學は文明の花とも見られ、亦亡國の徵とも見られますから、女子敎育上重大の關係を有します、由來日本の文學は殆んど婦人の文學といつても宜い位で、是迄世間に愛讀せらるゝ傑作の主なる

ものは、婦人の手によりて成つたものが最も多い、即ち源氏物語枕草紙を始めとして、十六夜日記の類など悉く婦人の手によつて成つたものでありますから、自然我國の文學と婦人とは、特に深き關係あるものと歴史的に認められて居るのであります、勿論文學なるもの丶本質は多くは感情より發するものであるから、感情に富んで居る所の婦人の之を好み、從つて之を善くするに至るも亦無理ない次第であります、

併し乍ら自分が今日の婦人の好みて研究する處の文學と、其の製作せる所の文學の內容とに就て考察して見ますると、頗る遺憾に堪へぬ所が多くあります、即ち第一は餘り單調である、第二は餘り厭世的である、第三は餘り擬古的である、是畢竟其の內容即ち思想が徒に往時の紫式部とか淸少納言とかの類が、所謂春秋の花紅葉に附て感じたる思想を單に敷演したり、又繰回したり甚だしきは之を剽窃したりするに止まり、婦人の自ら奮て創見的に製作するもの丶少なく、從て時勢と共に進歩發達するといふことがないからだといふて宜しいと思ひます、併し進歩發達は人間の生命とも謂つべきものであるから、苟も思想にして進歩發達せざれば、恰も沈滯せる水の如く自ら腐敗に至るは、止むを得ぬ次第である凡そ彼の紫式部や淸少納言の全盛なりし時代、即ち平安朝奈良朝時代の文學の對象となつて居つたものは、四時の雪月花若くは當時の宮中に於ける風俗習慣及び人情に過ぎなかつた、而して雪月花は古も今も所謂年々歳々花相似たりで更に變りはないが、人生即ち社會の狀態に至りては、歳々年々人不同で殆んど想像も附かぬ程相異つて居るのである、故に彼等を模擬して擬古的文章を書くものは、雪月花に就ては模擬し易いから進歩もありて、稍見るべきものもないではないが、今日の人事を寫すことは殆んどなし得ず、間々これを企つるも頗る拙劣である故に又勉めもしない、是其の文學の單調になつた次第である、

更に進んで考へて見ると、平安朝奈良朝の文學はまだ日本固有の思想が存在して居つたから、寧ろ單調でも稍可なる所もあるが、下つて鎌倉朝に至つては、我國の文學は厭世思想によりて大なる影響を被つたから、寧ろ我國の文學思想は全く厭世思想に變化したものといつても宜しい、即ち彼の鎌倉時代の文學を代表する、方丈記、いざよひ日記の如きものに至りては、全然と厭世主義に變化して來たのである、故に是等の文學のみを見る人は、勢ひ生者必滅とか會者定離とかいふ佛敎的感慨によりて影響せらるゝは當然である、猶其時代前後に於て發達せし戰記體の文學、即ち平家物語の如き太平記の如きものも、亦悉く奢る平家の忽ち亡びたる有樣、若くは權勢盛なる北條の俄然倒れたる狀況を寫して、人生の頼みなく悲しげなること等を寫し、又三鏡と稱する即ち大鏡増鏡水鏡の如き、歷史體の文學も亦多く遁世者の手になつたものゆゑ悉く厭世思想によりて人生の盛者必衰の理を記載したものであるから、此等を好讀するところの婦人が、自然厭世的思想によりて陶冶せられたのも無理ないことであるが、然し是とても少しく之に注意するときは、必ずしも其の弊に陷落する計りでなく寧ろ活動すべき餘地がないでもない、蓋し彼の佛敎は無論印度に起つて、其の國の氣候の極熱にして、深林には猛獸多く、沼澤には毒蛇が多くして人畜を害することの少なくないから、自ら印度の人々は厭世的にならざるを得ない次第であるが、不思議にも此の佛敎が印度より支那を通過して、我國に入るや自然日本の氣候の温暖にして山水の明媚なる此世からの極樂淨土ともいふべき狀態に移され、在來の厭世觀も自ら樂天的の趣味を帶ぶる樣になつたのは、掩ふべからざる事實である、例令ば彼の西行法師は一見して、厭世的思想の代表者の如く思ふ人もあるべけれども、彼れは寧ろ一種の樂天家といはなければならぬ所がある、即ち彼の雲水を逐うて行脚し、或は西に或は東に各地に漂流して、日本の山川草木の美を樂しみたるが如き

第五回博覽會褒狀受領

定價 壹袋壹錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々様の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居桝形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
電話 下谷 一二三四

東京銀座一丁目河岸通り
帝國貯蓄銀行
（電話 新橋 八一六 二八〇八）

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
橫濱吉田町 橫濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●每月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候



TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimho-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
確實製造販賣
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺拾參圓四拾錢 並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
婦人用（小學用） 七圓
同二號（一號） 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾七錢
テニス組一張一、八八〇ヨリ三、一五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

は、如何に彼が樂天的行爲なりしを知るに足る、即ち換言すれば彼れ西行は、當時のあじきなき心を持ちたる人間は厭ひしかも知れん、が麗はしく笑うて迎ふる處の花とか、又靜かに眺むるに足る秋の月とかを樂しんで居つたに相違ないのである、故に西行は實は樂天的の境涯を送つたといつてもよろしいのです、又鴨の長明も同樣である、然らば即ち日本と云ふ國土に住する人は、風土氣候の關係よりして、絶對的に厭世思想と相容れぬから、絶對的の厭世思想の人はないといつてもよいのである、然るに世の婦女子などが古來の文學を讀んで、其の裏面に流れて居る所の思潮を洞察するの明なく、又釋迦は人類のため布敎せしを知らずして、單に言語の上に行はるゝ印度思想、即ち古來の文學書に觸接し、獨り厭世的思想にのみ傾いたのは、彼の婦女子がいつも一家にのみ閉居して、山水明媚の天然に接觸することの機會が乏しかつたからであらうと、されば今後の文學を事とするものは、死せし古書物のみを友とせずして、活たる山水を讀め、長へに光る所に星辰を見て自然に發達する處の感情を發表したならば、今日の如く單調にして且つ厭世的のもの計りでない樣にならう、重言すれば婦人の文學に於ける思想の内容は、天眞爛熳たる女性より出づるにあらずして、古き寧ろ反古に屬する古人の言語のみより材料を求めて、擬古的文章を作るに職由するものであるから自分の考ふる所によれば、文學の骨子或は神髓ともなるべきものは、宇内に於ける眞善美の三者であるといつてもよろしいと思ふ、よく眼界を擴大して人生の活世界を寫す覺悟がなくてはならぬ殊に眞とか美とかの方面に就て、十分の研究して貰いたいものだと思ふ、

若しも果して斯の如くなれば、自然是迄行はれて居た、單調なる所の思想が一變せられて大に面目を開くであらうと思ふ、

然らば將來に於て婦人の文學は、如何に變化し如何なる形式によるべきかといふに、自分の考を以て

すれば、即ち所謂明治の言語を以て、明治の思想を現はすといふことが必要である、而して更に文學を以て任とするものは、人生の理想若くは大問題の解決を與ふるといふことを以て、任とせなければならぬ譯である、流石に紫式部は大家の名に背ずして、よく文學上の實質を具へて居た、假令へば源氏物語を見ましても、婦人の品定等に於て明に之を観ることが出來る、即ち夕顏の卷の如く其の人物はいはゞ體質の弱き神經質の女子であるといふことが想像せられる、今日よりして之を見れば如何にも外見に優美の點はあつても、其精神に至つては實に不健全の、性格を現はして居る婦人の代表者と見てもよからう又光る源氏の性格に至りても、亦當時の雲の上人の思想の狀態趣味の有樣等を代表して居るといつても宜しい、又今日は已に絶版になつて其書物は世にないが、紫式部が源氏物語を書いたのを見て、淸少納言は之に劣らじとの考を以て、曇る藤氏といふを著はしたが、或る方の威權に觸れて遂に絶版せられたと云ふことがある、是等の事實によつても、大文學者とも言はるべきものは、健全なる思想を發表せんがために、筆を下すものであつた、徒に筆硯を弄するものでないと云ふことが分る、

然るに慨はしい事には後世の婦女、文學者にはかゝる遠大の思想を懷かずして、唯文筆の末事を事とし、彼等の糟粕を嘗めて雪月花一事のみに就きて定見もなく、識見もなく、又所信もなくして徒に擬古の文體を以て、文學の能事とするに至つては惜むべきの至りであると思ふ、故に今後の女子たるものにして、苟も文學を事とせんと欲せば、先づよく眼を社會萬般の事に注ぎ、以て健全なる人生觀を造り、眞に讀むものをして渴するものに淸き水を與へ、饑たるものに甘き食を與ふるが如く、所謂文學は社會の生命であるとの感あらしむる樣、勉めたきものである、勿論かゝる偉大なる識見を以て筆を下すは、實に容易の業でないからして、種々の學術を研究して、又自ら天地間の美妙に接近して、天眞爛熳の

態度を以て神聖なる筆を下したならば、即ち彼の歷史的の習慣に拘泥せずして、特得の思想を發表し反りて大に見るべきものあらうと、思ふ、要するに今日の婦人界に行はるゝ文學の內容は、或は厭世的に傾き或は心にもなきことを古人に模擬し、擬古體文章を造るに過ぎない傾向のあるは、明治昭代の耻辱といつてもよからうと思ふから、願くは今後の文學は自ら信じて、我が胸中に沸然として浮び出でたる思想を、根底として筆に著はしたい、されば明治の婦人文壇として、後世の歷史に一時代をなすの機會もあるに違ひないと考へます、之に就て思ひ當りましたのは、古より諸葛孔明の出師の表を讀めば、苟も心あるものは皆、涙を落さゞる者はないといはれてあるが、元來武侯は文人でもなく、又學者でもないが、單に鬱勃として胸中に浮び出たる至誠の一片の發表したるによりて、斯も妙力を得るのであると思ふから、願くば世の婦人達も厭世的若くは擬古體の文章のみを事とせずして責任ある即ち至誠の態度を以て筆を下したならば、眞に天地をも動かし鬼神をも泣かしむるの妙あるのみならず、是と同時に家庭の趣味ともなり、社會の改良ともなり、親子の愛情も夫婦の感念も、いはゞあらゆる人生問題も、此の筆によりて決せらるゝであらうと思ひます

女の勝利（貯金管理所珠算練習）

郵便爲替貯金管理所にては、新雇拜命者に對し、日々退廳時間後珠算練習の爲、毎日一時間居殘らしめ、且毎週土曜日には、一同に對し百圓以下の數字を記せる傳票百枚を、四分間に計算する試驗を實施し、該試驗に合格したる者に對しては、翌日よりの居殘りを廢し其他は試驗合格迄は、毎週日曜日にても出勤して練習せしめ居れり之が爲め新に拜命したる諸員も、二三週間にして練習を積み、一般に成績良好なりとの事なるが、同所は男女相半し居り、時々兩方より優等なる者を出し、競技會を催しつゝあるが、珠算に於ては男子は一般、成績女子に及ばず、去十六日の競技會に於ても、百枚の傳票計算に對し、一等二分十秒、二等二分十五秒にて、何れも女子に歸し、男子は漸く三分にて終りたるもの最も速かなりしと、同所は之が練習に就ては、今後益奬勵する筈なりと云ふ、

人體と科學

工學士　長橋芝翁

事物を詳しく見ると云ふことは大切なことで、又興味のあるもので御座ります、例へば手近な人間ですが、誠に好く出來た機械ではござりませんか、堅い骨といふものがチヤンと土臺になつて、それを筋や腱が程よくあやつり、丸で時計の仕掛と少しも違はない、ゼンマイが心臟で調整器が神經系統、イヤどんな進歩した機械でも人間の樣に能く出來ては居りますまい、つまり手足が造られたと云ふことも聞かんし、又心が發明されたといふことも聞かんのがまア好い證據でござりませう、サアその人體ですがその人體は實に幾億萬とも數限りのない細胞から出來て居ることは皆樣の御案內の通りで御座りますが精細に見ますると其各々の細胞は皆化學室、又細胞全體即ち人體は一大化學工場で御座ります、勿論此工場には暑いからといつて寒いからといつて年中休暇などはないのであります、イヤあつたら大變です其處ではどんな仕事をして居るかといふに、即ち生理的仕事で、ドシ／＼勢力を作つて居ります、それを熱に變へたり、働したり又電氣を起さしたりさま／＼の事をして、而して其上斷へず生物を破壞したり修理したり、又再造したり、ソレハ／＼ナカ／＼多忙なもので御座ります、之れを科學的に命名したら先づ代謝機能とでも云ふのでしやう、

さて其數知れない程の細胞にはいろ／＼の種類がありまして、全體之等は何から出來て居るか、つまり人體の組織分は何であるかといふのが第一に起る問題で御座りませうか、併し其明答はチヤンと化學書に出て居ります、即ち三原素から出來て居て、常溫では其中の八ッは固體、殘り五ッは瓦斯體、固體といふのは炭素、カルシユム、燐素、硫黃、ポッタシユム、ソヂユム、マグチシユム及び鐵、又瓦斯體といふのは、酸素、水素、窒素、鹽素及び弗素でござります、獨逸の學者レーモンド氏のいつた通り鐵

の原子は何處にあらうか、隕石の內に在つて大空を飛んで居やうが、車輪の一部となつて地上を廻轉して居やうが、又は血球中にひそんで詩人の胸中を走つて居やうが少しも變らないのです、どうも科學といふものは有りがたいもので、其十三原素の分量をれ〳〵取調べがついて居ります、例へば殆んど百六十ポンドの目方のある人を分解して見ると、

酸素	八八、〇ポンド
水素	一四、〇
窒素	三、五
鹽素	一、六
弗素	〇、二
以上瓦斯體合計	一〇七、三ポンド
炭素	四四、〇〇ポンド
カルシユム	三、五〇
燐素	一、六〇
硫黃	〇、二〇
ポツタシユム	〇、一六
ソヂユム	、一四
マグネシユム	、一〇
鐵	、〇九
以上固體合計	四九、七九ポンド

だそうです、こんなことを申し上げると何だつまらんお話だナーと早合點なさるお方がないとも限りませんが、つまらん樣でも知つて居らねばなりませんと云ふのは、身體は自分のものだが、何から出來て居るか少しも知らんといへば、それこそ馬鹿げた話で、いはゞ自分に顏は持つて居るが眼鼻があるかないか知らんといふも同一で賞めた話ではありやすまい、チト話は外へそれますが、元來生理的智識の少ないのは今の敎育の一大缺點であらうと存じます、學校にも家庭にも又社會にもどうも此缺點が甚しく見えるので、戰後一等國に列して此劇しい競爭の大波瀾中に投ずる日本の爲質に寒心の極みで御座ります、近來八釜しい學生風儀問題の如きも亦生理的智識の無い爲に起つて來る結果ではなからうかと案じられます、只管監督々々といつて丁度倒れかゝつた木を手で支へて居ると同樣、いつ迄もつゞくものではありません、ナゼ地盤のことを考へたり、根本の

原因を正したりしないのでしやう、兎も角生理的智識は一身の幸福を導く計りでなく、一國强弱の岐るゝ一大動力たることを深く心に銘じて、進んで生理的智識を得る樣に皆樣から心がけていたゞきたいので御座ります、又それに此頃はどういふものか靑年男女が揃も揃つて狂的病的患者を理想として崇拜して居るのは、かへす〲も口惜しい次第でトント言葉の出し樣も御座りません、餘計な口をたゝいて失禮いたしました、再び本題に歸りまして、此人體にある瓦斯體は非常に小さくなつて入つて居るのです、八十八ポンドの酸素といへば通常の狀態で一千立方呎以上即ちザツト十疊敷の室程あり、十四ポンドの水素といへば二千六百立方呎以上即ちザツト二十四疊敷の室程あらうといふのですから大抵想像することが出來ませう、而して其原素はいろいろさま〲に結合つて、絶えず化學的變化を受けながら腐つたり新しくなつたりして居りますが、之が一向目には見えない、物質が常に千變萬化新陳代謝して居ても、さてどこがどうなつたか形はチヤンとして居るところなどは實に巧妙至極なものでは御座りませんか、手品などを見て驚いて居るよりは自分の持つて居る身體を能く見た方が、また〲眼の玉を飛出す程驚くことが澤山あるので御座ります、リービヒ氏、モーレシヨツト氏及其他の生理學者の計算によると、人體の大部分の物質は二十日か三十日かゝると新たになるそうですから、普通七年目毎に人體が新たになるといふ説は大方誤解であらうと信じます、人體を造つたり補ふたりするものは何んでありませうか、いはずとしれた食物であります、即ち滋養分がその代謝機能によつて生ずる不足を滿して行くことは申す迄もありません、中年で强壯の人が夏になると二十四時間で目方の十四分の一、冬になると十二分の一を失ふそうです、尤も其失ふ量は强さと働きとによつて增すと申します、モールシヨツト氏は、代謝機能の速度にて生命の長短をトせらるゝと迄いつて居ります、一番代謝機能のはげしい

時は三十歳と四十歳の間ですし、胃は女や子供よりも、又働く働かぬ人よりも代謝機能が大きいそうで御座ります、

今目方百六十ポンドの人があるとすると、其人は毎日十一ポンド乃至十三ポンドづゝ失ふわけですから抵抗力も失はないで、同じ樣に働きつゞけ樣と思へば、即ち身體の經濟を保つて行かうとするのにはどうしても之丈けの不足を食物で補はなければなりません、世の中には食物と滋養物と混合して考へるものがありまして、滋養物のあるかないかをそつちのけにし、只腹中へ押込めば好いとすまして居るのは、身體經濟の會計出納法を知らぬといつても差支ありますまい、滋養分の多い食物が上々の食物であることは事新しくいふ迄もありません、此食物が體中へ送られると恰も材料が會社へ入つて來たと同じく、所謂化學工場では其滋養分吸收業に營々と從事いたし、吸收した其滋養物は今度化學工場へ運ばれ細胞にて一々精密に吟味し以て身體の組織を作るといふ仕掛で御座ります、役に立たないものは排泄物となつて體外へ出ることは何人も千萬御承知の通りで細かく述べる迄もありません、排泄物即ち糞尿等と申しますれば何となく穢たない感じがいたしませうし、禮儀上堂々といふを憚りませうが、有機生活の原則を考へて見ますると之が再び食物といふ立派な物になり、滋養分を以て此化學工場へ立歸つて來るので、そうすると今度は打つて變つて、やれお味しいの喰いつきたい樣だのとソレハ〳〵有りがたいお賞めに預るといふのですから、實に面白いでは御座りませんか、之が天地の輪回法と云ふものでせう、

月と海の話

山科禮藏

私は見掛は大層丈夫な樣でありますが、なか〳〵種々な病氣を持て居りますから、平生不愉快の日を

起る事が多いのであります、其の故に毎年夏季になりますと、大概一ヶ月ばかりは箱根あたりに保養する例になつてをりますが、近頃は箱根邊は非常に不養生地となりまして、病氣保養が却つて不養生の原因を作り出す様な感があるのと、東京より至極便利であるからして、なか〳〵知人が多く、殊に多少の惡友も含まれて居る譯でありますからして、トテモ養生處ではありません、そこで一番卒先して、療養的に眞の入湯をやつて見たい考で、今年は大に方向を轉じて、天下の名湯を探る事にしまして、遂に上州草津に遊ぶ事となりました、此の滯在中に一寸面白い事がありましたからして、其のお話を致しまして療養的功能の顯著なる草津温泉の名と共に吹聽しようと思ふのであります、

私のお話を仕樣と云ふのは山上に世界の海を一目したと云ふ、最も不思議なる月蝕觀であります、御承知の通り去る八月四日は、月蝕の當日でありましたが、其の夜東京は雨天の爲に見る事が出來なかつたそうですが、草津は幸に晴朗なる天氣でありまして分明に觀る事が出來ました、殊に海抜四千五百尺もあり、自分の滯在した座敷は、新築の三階であつた爲め、月は我が正面に我座敷に向ふと云ふ有樣でありまして、何となく近く月に謁するの感が有つたのであります、幸に有合せの双眼鏡を取り出して細かに月の顏に接しました處が、如何にも妙に感じたのは、月中の薄黒き者は、恰も世界の圖を畫きたるが如き感があり、海は世界の四分の三を領して居ると云ふ事が、何となく證明せられて居るが如き有樣でありますからして、是は精細に寫生して見たならば面白き材料もあらうと思ひまして、早速世界の圖を開き、傍に白紙を置いて、第一陸地と想像せられた、薄黒き月中の斑點を畫いて見ますと、丁度世界の陸地に類似して居るのであります、それから世界の高山の有る所を、あらかじめ其白紙に記して、月中に薄黒き内の最も濃黑なる點に對比して見ますと丁度高山のある處であります、斯の如き有樣を發

見しまして、月中薄黒き個所を除き、透明なる圓形の水色は、即ち世界の海が映じて居るものと見ゆる事を認めたのであります、

實に山上に於て世界を一目したと云ふ右觀察の事柄は、殆んど不思議でありまして、自分も窃に疑を懐いたほどであります、斯の如き事を天文通に聞かせたならば、定めし噴飯するでありましようが、それは笑ふが嘲けらうが、ちつとも差閊はない、自分は偶然の思ひ付きより觀察したる事ながら如何にも事實の樣に見え妙ならざる興味を感じたのであるから、其儘をお話するのであります

扨て世界と云ふお話を縮めて、單に日本と云ふ最小區域に於て考へて見ますと、日本は島國である、此の延長一萬六千哩、此一萬六千哩の上に五千萬の人口が捿息して居るのであります、加之年々五六十萬の人口が増加して居るのであります、然るに一萬六千哩の島は、何處迄も一萬六千哩島であつて、百年の後と雖、自然には二萬哩に達する事はないのであります、斯の如き有樣では、計算の上から考へても、到底此の儘で押して行かうならば、日本も人の爲に破裂するより外に仕方がない、

然るに眼を轉じて此の海國たる日本が領する所の海を見給へ、やはり計算上一萬六千哩島の四分の三の廣き樂境があるのであります、而して此の樂境に向つて活動して居る處の人は如何でありましよう、實に驚くべき少數でありまして、五千萬人の人口中僅に二百萬餘の人が働いて居るのであります、何故日本の人は斯の如き天與の樂境を顧みず、せゝらせまき陸地のみに齷齪するのでありましようか、心靜に世界の歴史を繙いて御覽なさい、清國の如き四億の人口を有する廣大無邊の國でも、更に開發しないではありませぬか、之に反して英國の如き一小島國でありながら、世界に雄飛して居るのは、何の故であります、即ち英國が海に向つて開展した結果に外はないのであります、海上に覇たる所以は、海上權の掌握であります、日清の役、日露の役、此の戰捷

の起源は、海であります、爰に至つて考へますと、海と云ふ事は實に尊ぶべく敬すべく、一國の盛衰を左右する權能は、殆ど海其の物であらうと考へます
我が國の進歩は實に恐るべき者でありまして、今日浮んで居ります船の數は、殆ど五十七萬艘以上であります、近きは滊船に對し百萬噸の紀念祝賀會を開かれんとする光景でありますが、斯の如き驚くべき進歩も、英國の進歩に比すれば、實に憐れなる有樣であります、どうか私は此の海上の發達を圖るに付いては、とりもなほさず、天より授けられたる海上の樂境を開拓したいのであります、からして海事思想の養成と云ふ事が、一番大切である、山上に於て世界の海を一目し、其の擴大なる樂境に何ぞ苦しむで赴かざる、實に不思議の極と云はなければなりませぬ、どうか一日も速に海上の愉快を悟らしめ、海上の樂園に自勞自食する自由を授け、東洋の英國として、世界の海上權を世界に向つて爭はん事を望むのであります、まだ申し上げたいと考へますが長くなりますから、他日更に御手數を煩す事に致します

（記者筆記）

◎池田鑑子刀自の臨終

同刀自の淑德は誰も知る所なるが此頃池田家事務所長高崎勝可氏の語る所を聞くに、同刀自の逝去せらるゝや、都會の各新聞は其賢明を賞揚せるが、或新聞紙の如きは賞贊に過ぎ、却て其德を穢すの嫌無きにしも非ず、同夫人の前侯爵に事ふる貞明、奴婢に對する慈愛恰も偏愛に流れざるは、今更喋々するに及ばず、唯余が最も感歎措からざるものは、逝去の前に當り自ら起たざるを知り、侯爵同夫人、池田政保子同夫人令息、令孃及び池田花子、出石家令、昵近三谷峻、古家喜間太并に余を臥床の側に召し一々握手して既往の勤勞を謝し、將來の家事を托し、或は訓誡を與へ、永訣を告らる、更に余に對して、卿は恰も岡山人の總代として上京せしものと認む、今岡山の舊故と永訣す、惜別無限の思に堪へず、然れども天命の歸する所は如何ともする能はず、家務萬端に至ては、出石にも托する所あり、能く聞きて供に計畫考慮する所あれ、尙ほ岡山人一同にも、能く此意を傳へ呉れよと語られ、言々流暢、一滴の涙も下されず、須臾にして令息令孃を退けしめ、徐かに最早言ふべきなし、再び藥を與ふる勿れ、若し渇するときは、少量の氷を含ましめよ、今命將に終らんとす、一同靜肅にせよと、言畢て目を閉ぢ、復び語られず、間もなく永逝せられたり、臨終に際して此言動あり、家を思ひ舊を愛し、丈夫と雖ども及ばざる氣象あるを以て、在世中平素の一斑を窺ふに足るべしと云へり、

瓊子内親王（五）

三島江月

十五

その頃のことにやありけん、姫宮御性行の一端をもうかゞひ奉るに、此上なき御歌こそあるなれ、宮と御同腹の御兄君にわたらせ給ふ中務卿尊良親王は、第一の皇子なれば、とく東宮に立たせ給ふべかりしを、關東の議に依り後二條天皇の皇子邦良親王立ち給ひしかば、いと本意なうも御座しましけるを、その後また淺間しきことさへ世に出で來て、土佐の國へ流され給ひしが、ほどなく都に還りたまひしも、今度は第六の皇子恒良親王、建武元年正月に東宮とならせ給ひしかば、今は立坊の御望みも絶えてなければ、いと味氣なうも世を送らせ給ひつるを、今また御妹にわたらせ給ひて、年來御中らひも殊に親かりつる姫宮のたゞ一人、いとも鄙ざかる伯耆路にとゞまり給ひて歸りたまはぬのみか、御姿さへも變へさせ給ひし由、ほのかにも聞きたひては、いよ〱あはれに思し召しこを慰め奉らばや、かつは御述懐のもらしきこえなしと、

如何でなほ我も浮き世をそむきなむ
　うらやましきはすみぞめの袖

寂しき山寺にたゞひとり味氣なき世をおくらせたまふ姫宮は、春は花咲き鳥うたひ、秋は散りゆく木の葉にも、鳴きつゝ來たる雁が音にも過ぎにし方の偲ばれつゝも、たえ〲來くる都よりの御たよりをのみ待たせ給ひつる折しも、親しかりつる御兄君よりの御玉章、如何ばかり嬉うも懐うも思しめされけむ、

さるにても、また御兄君の御心のまゝならで、結ぼふれさせ給ふを聞きたまひては、一しほ憂れたくも思さるゝものから、

君はなほそむきなはてそとにかくに
　さだめなき世の定めなければ

かくと、御返しの歌を書き記し、御兄君の許へ贈

らせたまひけり、
今にしてこの御歌を拜誦し奉つるも、うたゝ懷古の情に堪えざるなり、げにや姫宮は、いとやさしうも大和詞をたねとして、有爲轉變の眞理をさとさせ給ひつゝも、なほ御兄君をいたはり給ふ御心のほど、推し奉つるも畏しや、

十六

さきに帝の御使として下りし女房どもゝ、此の山寺に留まりて、姫宮と倶に永く御佛に仕へまつりぬ流れも涸るゝ夏の日も、氷むすぼる冬の夜も、佛に閼伽をすゝめつゝ讀經の聲の絶え間なく、ひたすら天が下をば泰らけく平かに、わが大君の御榮えは千代に八千代にましませと、祈りたまはぬ時もなしさりながらまた、夏去り秋來り、春を迎ふる年毎に都の空の戀しうも、はた懷しう思されつゝも、此の山寺に勤行の日を送らせたまふこと三年ばかりになりぬ、

祇園精舍にあらなくも、入相つぐる鐘の音は、諸行無常の響あり、沙羅桑樹の花ならなくも、盛者必衰の世の習ひ、定めなき世の現し身は、憂きこと積るぞ哀れなる、一度は治まりたりし大御代も、忽にして又も亂るゝ天が下、叢雲四方にふさがりて、建武の亂は起りたり、帝は遂に白雲のかゝりて深きみよしのゝ、芳野の奥に行幸ます、あな淺間しの世の中や、

ことゝふ人も絶えてなき、かゝる侘しき山寺にもそよとの風のたよりにや、事の由をば傳へてぞ、聞き給ひにし姫宮の、心の中や如何ならむ、あはれあはれ今はゝや、頼める甲斐も頼みなく、浮き世の浪の寄せ來なり、世を遁れにし此の身にも、なほ捨て難き呼子鳥、君を思ふの眞心と歎きたまふも哀れなり、さりながら斯くてもなほ、治まる御代となれよかし、わが大君よ安かれと、晝はひねもすまたきより、夜は夜もすからひたすらに、心を碎き身を盡し祈らせ給ふ甲斐もなく、世はなか〳〵亂れたり、亂れはてゝや忠臣も、いやつぎ〳〵に討死し、今は頼

むの影もなし、
かゝる憂きことのみ歎かせたまふ積りにや、身にしむ秋風吹きすさみ、峯の木の葉も色あせて、御園に匂ふ白菊の花のみや、おく露霜にもいやまして、菫をはなつ朝まだき、にてありけらし、姫宮は御父君より贈り賜はりし阿彌陀如來の本尊に正しく向ひて合掌したまひ、御念佛をば唱へつゝ遂に此の世を薨れさせ給ひけり、あはれ御年僅に二十四にならせたまひて、いまだ春秋にとまらせられながら、延元四年九月十二日の朝まだき、草葉における白露も、いまだかはかぬ束の間に、いとはかなうも消え失せ給ひしこそ、げに傷ましの極みなれ、

十七

後醍醐天皇勅願の靈場たる安養寺は、皇女の薨れたまひし後は、御附添の女房ども相續ぎて尼となり、四代ばかりは傳はりしが、戰國の世となりては寺領の田園も荒れはてゝ、費用など献ずるものも無かりしかば、さしも莊麗を極めたりし堂搭伽藍も、柱傾き軒朽ちて殆んど狐狸の住處となりはてたりき、斯かる淺間しき、狀にて、一百年ばかりを經て德川氏の世となりければ、再び寺院を建立し、寺領百石を供養して、漸く昔の態にもたち復らんとせしを、享保の頃火災にかゝりて燒け失せぬ、

その後、寶歷の頃に至りて、河内國正林寺の住職覺阿、諸國を遍歷して此處に來り、斯かる由緒ある古刹の荒れ果てたるを見て大に歎き、如何にもして再興せんものと思ひたち、遂には己この寺の住職となりて、再び法燈を輝すにいたりぬ、これを第十七代中興の祖となす、それより代々相傳へて現時の住職池田端道師に至まで二十四代におよべりといふ、

右に記しゝは、安養寺沿革の大略なり、さればその上、姫宮の御草創以來、時に盛衰ありつれど、下りて今に至るまで五百七十餘年の久しき、連綿として法燈の傳はりたる一古刹なり、かつ寶物など見るべきもの、また少なからざるなり、殊に境内には姫宮の御墓ありて、宮内省よりは高塚淸八郎氏を守部

として、御墓に關する事ども掌らしめられたり、

十八

以上述べ來りしは、姫宮御事蹟の大要なり、讀者はたして何の感かある、再び告げん、宮は孝養を盡さん一念に、金枝玉葉の御身をも。賤の女に窶し給ひしなり、御心たけく思したち嶮しき山坂はる〳〵と、御供したまひし甲斐もなく、彼方此方に行き別れ、朝夕に仕へ給はん由もなかりしなり、然らば如何せん孝養を盡さん途はたゞ一つ、治まる御代になれかしと祈らん外は世にあらじ、されば鄙ざかる伯耆路にも、たゞ一人とゞまり給ひ、いとも侘しき山里に草の庵をむすびてぞ、御姿さへも墨染にかへさせ給ひ、早く治まる御代となりて還幸あらせ給ふやう、切にこれのみ祈らせ給ひしなり、その効驗も空しからずして、いよ〳〵帝の都に還らせたまふ日は勅使を寺に下され、共に都へ歸らんことを、あまたゝび促したまひしをも、ながくこの地にとゞまりて君の御行末を祈り奉らむとて辭し給ひ、遂に此の山寺に薨れさせ給ひしなり、

あゝその深き御孝心のほど、あゝ、此の畏き御心のほど、何にかたとへ奉らん方あらじ、今更こゝに申すも畏けれど、げに姫宮の御性行は、みな以て我國婦德の例として、將た孝道の鑑として、ながく何人も仰ぎ奉るべきなり、

昔、橘逸勢流されて、女の共に下りしは、孝女の鑑と歌に詠み、青史の上にも傳はりて、唯れ知らぬ人もあらざらん、然るを斯くも孝養盡したまひし姫宮の御事蹟は、殆んど知る人も無く、記せる文書とても無きこそ、かへす〴〵も遺憾の極みなれ、

われ讀者に望むらくは、これに依て姫宮御事蹟の大要を知り、その昔かく孝養盡したまひし宮の御座しまし〻を追想せられんを、かつて畏き宮の御心を心として仰ぎ奉らんことを、余の本懷これに過ぎざるなり、

秋の歌の中に

わきいづる雲をちらして足引の
山の高嶺にあき風ぞ吹く

新歸朝のドクトル夫婦

男は齒科の專門醫として、女は内外全科の醫として、米國歸りのドクトル同士が夫婦となり、麹町區士手三番町三十一に『ドクトル大屋齒科醫院』『ドクトル柳澤米子』と記したる二つのハイカラ式の金看板を掲げて、此程開業したる面白き話あり、扨此新夫婦が今日の地位を得る迄の經歷や其抱負などに就いて後進者の參考とも、また獎勵ともなるべき點など多ければ其談話の一節を記さん

▽初めの目的は法律　ドクトル大屋氏は名を要作(三十三)と云ひ栃木縣足利町の人茂兵衛氏の長男にて曾て麹町區富士見町曉星中學校に在學中法律の研究に熱中し、理屈屋とまで喚はれし程なりしが、其中に語學の素養も稍や出來たれば、イデや海の外に學びて法律學の蘊奥を究めばやと、郷里なる父に其旨を計りたるは、年甫めて十九の秋にてありき、

▽いよ〱死に行くか　當時栃木縣下より洋行せし者は僅に二三人に過ぎずして、若し洋行せんなどゝ希望を述ぶるもののある時は『お前さんも死に往くのか』とて村人より呆れられたるものにて、暇乞に行けば念佛を唱へると云ふ始末、されば氏の洋行の相談も親戚や知己等が容易く承諾せざりしも、決心固くして動かすべくもあられば『そんなら愈よ死に往くか』と止むなき体に許されたるが、固より家富めるにもあらねば、充分なる旅費や學費をば携ふる餘裕もなく僅に船賃と小使錢二圓の外には、一貫の洋服のみにて、青年の勇氣勃々と、兎も角も渡米の途に上り、無事に桑港に到着したり

▽路頭に迷ふ　愈よ是れからが奮闘時代なり、上陸後幸にも同地日本人教會の世話にて某中學教授の許へスクールボーイたるべく紹介され、紹介狀を携へて同家へ訪れ行きたるに、教授は『氣の毒だがお前は詞がわからないから使へぬ』と木で鼻を括るやうな挨拶に、氏は熟々と思ふやう、渡航の途次船中にて外國人と對話をしても然程解らぬと云ふ事はなかりしに、扨はまだ態度ことでは米國人は雇うてくれざるかと、一度は太くも悲觀して口惜しいやら面目ないやらにて、教會へもオメ〱歸られずと、三日三晩彼方此方を彷徨ひつゝ『ジャップ〱』と冷罵さるゝ苦しみを忍びて、頻りに米國人に向つて談しかけ居るうち、何うやら斯うやら我が云ふ事の先方へ分るやうになりしかば、我と我心を勵まして再び教會の厄介となり兎角してオークランドの齒科醫テード方の擂鉢番に住み込みたり、

▽一ケ月十五弗　當時日本人の同地に在留する者僅かに四十人内外(現今は二千餘人)に過ぎず、物價も今日よりは廉なりしかど、給料もまた廉く、大なる抱負を有せる大の日本人が、お爨どんの眞似をして一ケ月僅に十五弗、しかも此内にて着もし食ひもせればならず又學費も絞り出さねばならぬと云ふ始末なれば、其苦辛は尋常ならず、餘暇を得ては辛くも中學校に通ひ居たりしも、學費不足の爲中途に業を廢するの悲境に瀕せし事も屢なりし

止むなく目的を變ず、齒科醫テード氏方の掃除番に住み込みたる大屋氏は、餘暇を偸んで苦學六年、遂に中學の業を卒へて語學も餘程上達し、給料も今は殆ど倍額となりて前に比すれば、大に樂になりたれば、イデ是くよりは法科大學に入らんとする刹那、恩師テード氏は『是非に日本の爲に齒科醫になるやうに』と勸めて止まず、氏は飽くまでも初一念を貫かでは置かぬと思へど、六年間の永き星霜一方ならぬ恩義を蒙りたる師の言葉には抗ふべきやうもなく、竟に其勸めに從ひて齒科大學に入り、日曜と土曜日とは主人の許にて助手を勤め居たり、

△醫學博士となる　温情深きテード氏より、從前の如く給料を受けたる上、永年忠實に働いたと云ふ廉にて、學費までも貢いで貰ひ、齒科大學も芽出度く卒業したれば、更に齒科醫には缺くべからざる口腔外科學を研究すべく、テード氏方の暇を乞てボストン府に到りハーバート大學院に入りて業を修め、醫學博士の稱號を得たるは、去る卅六年の事なりし、

△滊車賃に五弗の不足　氏はそれより直ちに桑港に歸らんとし不圖財布の底を探り見たるに、剩す所僅に七十弗、滊車賃には尚五弗の不足を告ぐるに太く窮し居る樣子を、友人等も氣の毒がり、是より紐育(滊車賃五圓)へ赴きて、紐育週報の記者となりては如何と勸められたれど、一刻も早く恩師テード氏に面會して、恩を謝したしとの一念もあり、且は將來此學校にて日本の紳士氣取りに一ヶ月百弗位の生活を爲し居たる者が、俄にしみつたれた眞似をすれば、日本人の體面にも拘はる事なれば、ボロを出さぬ内一刻も早く此地を去るに如かずと思ひたれば、不足の錢を引摑み、停車場へと馳せ着ける、時は、滊笛一聲已に發車したる後なりしに、足摺りしつゝも賃錢表など眺め居る内、加奈陀線を利用せば、オークランドまで最下等の賃錢六十七弗にて歸らるゝ事を知り、是れぞ天祐と打喜びたるが、携へたる數百斤の荷物を運送するには、廿弗餘を要するとの事なれば、已むなく此方は賃錢先拂ひとして送り、身は滊車賃を支拂ひたる殘りの三弗を懷中して、兎も角も汽車に乘りは乘りたるもの〻、オークランドへ着するまでには八日と七晩を費す此間の食料は如何はせんと、之れが先づ心配の種となりたり

▽凍死するを待　金がなくならば飲まず食はずにて押し通さんと決心の臍を固め、揺られ揺られて來るうちに、泣面に蜂とは是れか汽車セントポールに着したる頃は、雪は盛に降り積もり寒暖計は零度を下ること正に十度、膚を劈く寒さの凌ぎ難きさへあるに、滊車は雪の爲に進まぬとあつて、乘客は悉く同所へ一泊せねばならぬ事となれり懷中を探れば南無三！三弗は疾くも半ばを失ひ居り心細さは限りなく、僅かに廿五仙を投じて、とある木賃宿に泊りたるはよけれど、酷寒の最中と云ふに板の間へ汚き名ばかりのベッドが作られあるのみにて、火の氣一つだになき處へ此四五日、温いもの

とては腹の中に入れたる事なき身に情なくも只凍死たるを待つ外になかりし、

▽地獄で佛　斯かる處で夜一夜を明かさんと思へば、智慧なき限りなれば窮策ながらも、夜の十時頃木賃宿を飛出して停車場に馳け込み、暖爐の傍にて辛くし一夜を明かしつゝ、翌朝九時に滊車は再び進行を續けたるが、同じ列車の中に加奈陀のセンジョン邊より乘り込みたる五十歳餘の佛國紳士あり、此老紳士英話が出來ぬと見え、手眞似や身振りにて苦しげに用を辨じ居る滑稽さ、又氣の毒にも思ひたれば、氏は通辯の勞を執り遣りたるに、老紳士は此上もなく喜び、夫れより忽ち親しき間となりて、滊車中盛に饗應しくれたるは、是ぞ洵に地獄で佛、幸にして之が爲に飢を免れオークランドに着したる時、嚢底餘す處僅に十仙、斯かる悲境に陷りしも、全く大學院に在る頃日本の紳士氣取りで虚飾を張り、一ケ月百弗宛も消費したる天罰覿面に報いたるものと、其時しみ〴〵と感じたりとは氏の懺悔談なり、

又夫人米子女史は群馬縣碓氷郡坂本町柳澤佐吉氏の女にて、佐吉氏は故陸奥伯の令甥伊達某と共に採鑛の目的を以て、明治六年カリホルニヤのゴールへエールに渡り、其後農業に從事せるうち、明治六年彼地にて生れたるが、即ち女史にて、米子と云ふ名も、亞米利加の國名に因みて附けたるなりとぞ、

▽女文學士　女史は同地の小學を卒業したる後、私立パアスペッタ大學に入り、又轉じてカリホルニヤ州立の文科大學に入り、業卒りてバチエローフ、オブ、レターースの學位を得たるが、當時日本人の同大學に在るもの男學生は十五六人ありしも、婦人は女史一人にて日本婦人が同大學を卒業したるは大に賀すべきことなりとて、領事代理の瀨川氏より祝ひ越されし程なりと、

▽醫學の修業　錦を飾りて家に歸り、扨熟々と行末の事を思へば、身は米國に生れたとは云へ苟も日本國民の端くれなれば、何とかして御國の爲となるべき事業に就きたしと、千思萬考の折柄、常に病氣勝なりし父が、遽に痙攣を起したるに驚き、種々介抱したる甲斐ありて、間もなく回復したるが、夫れにつけても、兼て學校の寄宿舍に在る頃、日々厄介となり居たる老婆が、時々病の爲に苦しめらるゝを、傍にて看護したる折など、此上なう欣ばれたる事ども思ひ出され、寧ろ醫師となりて御國の爲を圖らばやと決心し、父の許しを得て醫科大學に入り、三年の發憤を經て全科を終りドクトル、オブ、メヂシンの學位を得たるは、實に異數なりと云ふべし、

▽病家は皆外國人　大屋ドクトルの開業と共に、女史も亦開業はせしものゝ、半生を米國に送りたる事とて、日本語を話すに不便なる爲、且つは醫學上の專門語を研究中でもあれば、玆暫くは專ら外國人(殊に婦人)のみを病家となし居れりと云ふ、

疎ましきもの

黄離女史

男　年わかき男子の一人居たらむ折は、大かたは物耻づかしげにて、同じ年頃の女子の物いふだに口ごもりて、花やかにも得答へざるを、五人六人とその勢加はるまゝに、いたく强がり所えて、聞きにく、らうがはしきこともいふもの哉、門いかめしう構へたる校舍の前に立ちて、道行く女の品定めする男子、公衆の席に女の入り來るを、それ每にはしたなく囁きてのゝしる男子、四重音の歌學ばむとて男女入り交りたる席に女を蔑にして、吾が事いふと思はしめて、どよみになりて笑ふ男子、いかなる心あるらむとぞ侮づらるゝ、すべて男を女にたやすからず思はれむやうにおほしたるべしと古へは敎へたりけむを今の世の人は露ばかりも身の上の事とは思はざりけりな、

女　物學ぶ女の志高く、望いと遙けかるべき時に、仇なる色香にあくがれて、心をそらに衣紋引きつくろひ、髮容なよやかに、わざとふるまひたるさましてよくもあらぬ男の前にさし出でたる、いとさらずともとぞ覺ゆる、また吾が身の品を下して、心にもなき愛嬌を誰彼といはず男に振りまきたる、それ物しづかに床しう賴もしうする方にはあらで、只さはやかなるを持て興ずるさまに、わきて此の頃敎師などいふ肩書えたる人の、たやすう男引きいれて、夕すぐる頃まで暗き所などに佇みて、何をかひそ〳〵とさゝやきあひたる、大路を肩うちならべて行きかひ、聲高やかに馴れむつみたるなど、すべて女の親しき中らひとてもかくまでにやはすると思ふばかりなり、春ならぬ骨牌あそび、夏には納凉、秋は野草を尋ねむとて、殊さらに男の友を唆のかすは、極まりなきくされたまひしかなと唾をもしつべし、

男　心ひがみたる男は女の才學あるを一方ならず忌むものにや、人妻にて物知れるをば、必夫を蔑ろにすらむ必男を物の屑ともせじ、とさてしもなき妄

想を繪がきて、其過失を求めんとし、望ありて嫁がぬ人をば、世界に吾が夫なしと權ふりてやあるらむとも、いかなる人に失戀やしつらむともいひて、吾が思ふかたに嘲り笑ひ、己れ娶らむとて耻うけしにもあらぬを、用なき當らぬ推量をなして、兎角に敵のやうに思ふこそ心得ね、物しれぬ妻女、嫁がぬ婦人の斯くばかり忌まはしきものたらば、己れ物しらぬ女を妻にと据ゑて、吾が女をば必人に嫁がしめてやみなむ、用なきさしいらへは、いと男子らしうもあらずかし、

女　朝寝して十時頃に食事する家は、午砲を聞きて驚きて火桶の火かき起す妻女の飩き整理にいつかは其家を破らざらむ、さる人の厨は、必ず汚れたる膳椀など終日取り亂されて、白きが鼠いろとなれる襯衣ども、屋の隅にうづ高く置かるゝならむ、互にいひたき程の事をばいひて、いさかひ腹だち、吾が脊はかくなむいふ、かれてそは吾が脊を見誤りつれ、などあさましう人には云ふあり、正しき愛もて結ばれ、正しき媒を立てゝ、式あげたる伉儷には、いつかは斯くの如きことのありしが、あくまで艶書とりかはし、幾度、醜聞流したる人の身の果のみこそ、さる淺ましきことも多くあるめれ、互に心おとりせらるゝ本性あらはれて、侮り惡みあひつゝ、長き年月を送らむこと、いと疎ましうなりぬべし、

男、途にて知れる人に逢ふに、さまで親しからぬ際は、見ぬふりして過ぐる人、男子にはよくあるべし、女に對してのみしかるにや、はた何となう煩はしくてにや、近う摺れあはんとする時、扇かざして日よけするさまして過ぐる人あり、傘を斜にして過ぐる人あり、わざと空うそぶきしてすぐる人あり、用なき露店など顧みつゝすぐる人あり、いと安からぬさま也、殊更に傘を斜にし、空を仰ぎ、首を背くると、輕く會釋してすぐると、いか計りの難易あるか、無心に會釋せんは、いと心易からましを、いかなれば見ぬふりせむに何のしわざを設けむと、過ぎて心をば勞する、馴れ親まずんば禮なき迄うとく、

さもあらずんば亦親しみて禮を失ふは今の男女の通弊なり、途上の禮は只その一端にすぎざれども、疎ましき心はこの一つにてぞ知らるゝ、

女　久しくたよりきかぬを心もとながりて、やう〱暇作りいで、尋ねたる人の、何せんに來しぞといはまほしきさましたるいと疎まし、親しかりし人のよき方に嫁ぎて心驕りせる、實業家に嫁ぎて學事を打ち捨てたる友の、今は御身と語るにも堪へずなどいひていたう崇めたる、さあらぬにも總て家庭の愛情にのみ引れて昔の友を忘るゝこそ疎ましけれ、夫子の愛はさることなれど、親しき友の頼もしきは夫婦の情に劣ることかは、後れ先だつ人のいのちの計られぬ中に、吾れ先づ深き不幸の的にあたりて、一家の死亡の後に取り遺されむ時、その心を慰むるものは、唯多年の親友にあらずや、これを思はずして一朝の富にまどひ、家庭の樂しきに安んじて其友を失ふものは、艱難を共をすべきも、安樂を共にすべからぬ友ぞとて、人皆これを退けなむ、

男　欲しくもあらぬ男の寫眞を、故々しう女のもとに携へ來る人、色好むかたにはあらねど、風流の道ならずしてあまりに文多くよする人、少しきの事なして與へたるに、煩はしきまでに禮のべて吾が德をたゝへなどするは、諂ひこのむ人よと見えてうとまし、親しくもあらぬ男が、いと隔てなきやうにものし、人にもいひきかしたる、晝夜いとまなくてある身を知りつゝ、此の書飜譯したまはずや、利いと多く得られて、名もあらはれぬべしとあからさまにいひ寄る人、かくまでわが心を知らずやといと口をしすべて確なる父兄の後見ある人には、我こそは其身を思ふものよといふらむ面して、云はずとも覺ゆることゝもいひて其内證に立いたらぬぞよき、必ずうとみ遠ざけらる、

女　貧しうして外面をそれとなくつくろへる人の、親しき友にもいとさもあらずと思はれけんやうにいひなし、吾身の程を思はずしてよき人に交らんことを求め、吾が力に及ばぬ慈善に名を得んとて、人の

物借りてまで行ひ、家庭を離れたる弟妹をいたはり遠き方にいます父母をなつかしみて、言たくみに説きいづる物語には、おのづから涙こぼるゝやうなるを、思はぬかたより、己はかばかりの憂き目にあはされたり、某もかくなむいひてつぶやきたりき、眞に僞り多き人にて、かくやうに言葉設けつるなり、弱きもの苦しめて強きに媚ぶることいか計り巧なるか、一言も信を置きがたしなどきくにいと淺ましうなりて、日頃の感涙いたづらにぞなりぬる、

獨逸に於ける子供の日曜

日曜の安息日を分けても樂しみにして居る子供等には、何うか一日愉快な遊びを取らせたいものです、此の點に就て、多年獨逸の家庭に親しみ、其の内情に精通せる、ドクトル宇良田女史は、子供の日曜日に就て趣味ある談話を試みられました、

△日曜日の遊び事　土曜日の晩からして、明日は何處へ連れて往つて下さいます、と子供はサモ愉快げに、此事を兩親に尋ねます、此時兩親の答へは、多くは『郊外へ散歩に連れて往きませう』とか、或は「お伽芝居へ見物に遣りませう』とか、左もなくば胡桃のある時などは、『裏の胡桃を一緒に落さう』とか、『繩飛びを仕ませう』とか總べて親達が子供の境遇になつて、少しも大人の心持を出さずに、子供の趣味を充分に與へて遣るやうにします、故に子供と共に遊ぶ時は、父も母も全く子供の氣になつて遊びます、

△面白いお伽芝居　是等の遊びの中で、郊外へ連れ出すのが一番多く、之れは何處の家庭でも行る事ですが、自由自在に遊べるので、子供は非常に郊外運動を樂しみにして、兩親にも屢々之れを請願るさうです、其の次ぎはお伽芝居で大抵午後の三時頃から、夕景へ渡つて興行し、其の時間は凡三時間位です、之れは教訓と趣味を兼ねた有益な興樂で、彼國の子供は日本で大人が芝居を樂しみにするやうに、大層其日を待詫びて居ます、

△御馳走はしない　郊外へも、公園へも、亦た芝居へも連れて往かぬ時は、兩親が一緒になつて庭園で繩飛びや毬投げをいたします、左もなくば子供の友達が尋ねて來ますが、日本のやうに親達が菓子や果物を無暗に與へるやうな事は仕ません、珈琲でも御馳走すれば、夫れが關の山です、夫れ故晩餐なども決して出しませんから其の時刻が來れば遊びに來た子はサッサと歸ります、此の規律はナカ〱嚴重ですから、遊びに遣つた爲め、子供が胃腸を傷めて來たと云ふやうな事は決してありません、日曜日の晩は平日の如く夕飯が畢へると、七時から八時迄には必ず臥床に眠らせ、宵張りなど確く禁じてあります、

紅葉の話

奈良縣女子手藝學校教諭　今西桃里

白露の色はひとつをいかにして
　秋の木の葉をちゞに染むなん

「もみぢ」の義は「紅出づ」と云ふことで秋時いろ／＼の樹の紅葉するを指した語である。此紅葉する樹木の數多ある中にも、かへで、つた、はぜ、うるし、かき、にしきゞ、はゝそ、などは皆人の賞するところである。殊にかへでは最も美で葉の形もやさしく樹を山谷溪水に配合して何んとも言ひ得ぬ感がする春の花秋の草如何に美しく如何にやさしいと云ふても此紅葉には及ばぬであらう、今一枝を手折りて檢するに綠より青に、青より黃に、黃より樺色に、樺色より赤にと移りもて行く樣は天下の色彩悉くこの一枝に集めたかと思はるゝのである。一度夕日に挿せば萬色悉く生きて實に愉快の感を催さしめる。かゝれば單にもみぢと云はゞ此かへでを指すことになつて居るのも亦無理でない。さて此千々の色は如何にして染むらんと云ふに之れは葉の細胞內に花靑素といふ一種の色素が形成せらるゝからである。しかし同じ紅葉の中でもいてふやはこやなぎの如く黃色に染まつて居るのは畢竟細胞內葉綠質の退化の結果である。それから紅葉の原因は恐らく日光の微弱、氣候の變化等にあるのであらう。

かへでの種類は植物分類では槭樹科と云ふて此科には一般に愛らしき葉を有するのみならず、翅果とて蜻蛉のやうな果實を結ぶのが特徵となつて居る、之れは種子を散布せしむるに都合よく出來たので亦以て自然の妙を味ふことが出來る、さて此科の普通な種類にちりめんもみぢ、はうちはかへで、いたやかへで、うちはだかへで、ひとつばかへで、あさのはかへで、かぢかへで、みつばかへでなどある。秋紅葉せるを採集して其まゝ厚い書物の間へ挿んで置きますと何時までも色が殘りまして美しいです、それを取り出して友垣に送らる手紙に封じますなど至極やさしい心得と云ふべきか

珈琲の話

多賀みや子

燃ゆるやうな眞紅のリボンで房々とした緑の黒髪を束ねた淑子が、今しも純白を琲珈の茶碗を手にしてうまそうに啜りながら、傍の仕事板に坐つて居る母の顔を見上げた時、

『母様！母様が拵へて下さると、どうしてこんなに香が高くつてそして嗜のでせう、

と感に堪へない様な風で訊ね出した、是も子供の愛にひかされて、自分の飲むよりも更に嬉しそうな顔付して見て居た母は、かく問ひかけられて針の手を息めつ、先づネ、と微笑で、

『淑ちやんも大層お世辭がよくなりましたね、けれどお茶にしろ珈琲にしろ凡て飲物には餘程拵方の加減があるのだから、よく知つてお置きなさい父様なにかは、あのやうに琲珈がお好だけれど入れやうがまづいと一口も召食らないのだからね、

今年とつて十三歳の少女なれど、末の子の愛娘どてまでも後氣なき淑子は、スプーンの尖についた砂糖を白隱元のやうな齒を見せて嘗めながら、圓らな眼を見張りて聞き居たるを、母の語のまだ終らぬに唐突に、

『母様、今夜は淑子が父様に入れて上げたいから、教へて頂戴な、私父様にうまく入れて上げて讃めて頂きたいから、チツ母様！

と云ふ、

可愛い子は、惡戯をしても可愛いものをまして父のために自ら作りたいと云ふ優しき心に、母は今さらながら嬉しくてや、

『ア、教へませうとも、では克く聞いて居て今晩は貴女が入れてあげるのですよ、

と話し出して、

先づ最初に珈琲器を煮へ湯で洒ぎ、是に挽きたての珈琲を入れたる綿紗の袋を落し、そして此袋へ煮湯を注ぎ稍々一二分待て居ると、色のよい、味のう

まい、香の高い珈琲が出來るのです、而して是を飲む時は、珈琲茶碗に角砂糖を一個若しくは二個を入れて置いて、珈琲湯を注すのです、然しお客などに出します時は、砂糖を先に入れないで、別に添へて置きます、是はお客樣によつては甘いづきとさうでないのがあるからです、砂糖を入れた上に牛乳を注すと一層うまくなります、生乳の用意が面倒な所では罐に入つた煉乳を用ひますが、其時は砂糖を省くがよろしいのです、餘り甘つたるくなるからです
人によると袋を使はないで、直ぐ粉のまゝ珈琲器に入れますが、さうすると輕い粉は上へ浮きまして充分珈琲の味が出ないし、又是を茶碗に注ぐ時、兎角粉がもれ出ていけませぬ、またお湯の煮たつのを待兼ねて構はず微温るい湯に入れて珈琲を煮る人がありますが、
是も眞に珈琲を味ふ佛蘭西人のやうな人のことではありません、
かく母は語り終つて

『どうです、淑ちやんわかりましたか、
と、答を待てば、紅葉のやうな可愛い手を膝の上にのせて、謹聽して居た淑子は、もうすつかり呑み込んだ如く、
『母樣！もうすつかりわかりました、今晩は私が父樣に入れて上げて、驚かして上げますわ、父樣はキッと、お驚きになりますよ、ジャー母樣、お湯の仕度をして置いて下さいまし、ネッ母樣！、
『そりやずるいよ、仕度は母樣にさせて、珈琲を入れるだけて讃めて頂かうなんて……ホ……もう十三にもなつたんだから、自分で何でもやらなければなりません、
と、云はれて淑子は怪訝な顏して、
『さう……、
『さうッてお前、このあいだ先生も、さう仰しやつたでせう、いつまでも母樣や女中にばかり世話を燒かしちやいけないつて……、
利發な淑子は、昨日學校の保證人懇話會で云はれ

た事を直ぐ廻想だして、
『母様、ホントニチー、是からは私が何でも致しますよ、此茶碗も洗ひませう、早く晩になつて、父様がお歸りになるとやうでざいまますネ……と時計を見上げたが、父の歸りにはまだ間があるので待遠そうに殘る時間を數へて居たが急になにか思ひ出したらしく、
『あの……母樣、此間先生からうかゞひましたが世界中で一番珈琲を多く飲む人種は、佛蘭西人ですつてねー、
『アヽさう云ひますね……



『一體珈琲は何時頃から飲み初めたのでせう、
『さうです、そう云ふことは、外の歴史と違つてよくわかりまんが、飲料に用ゐた一番古い人種は波斯人、土耳古人、及び他の回敎徒人種ださうですが、年代から云ふと一千年も前から初まつて居ると云ふことです、だが詳しい事は今晩お父樣から伺がうほうがよろしうございます、
と、母の語り了つた時、『お歸り――』と長く高く引いた一聲と共に勇まし轍の音が玄關先に消えた、

母たるの尊號

高橋五子

春の風のやうに、暖く和かな家庭の中に、おひ立ち給へる子女達は、如何にも幸福多きことではございませんか、私にはかゝる善き家庭の談や、斯やうに家庭におひたちまする、子女達の談などを聞きますと、誠に奥床しく、うれしく感せられまして、他人事とは思はれません、それと共に又、斯のやうな立派なる家庭を成し立て遊ばさるゝ婦人は、如何やうな人で、如何やうな家法をとられて、そのやうな善い家庭を成したてゝゐらるゝかと思ひますると、其人物が如何にも高尚に、如何にも立派なやうに、私の心に歴々と映ります、

世間のあらゆる人は、何人でも美事な家庭を好まないものはありません、況して近頃は、家庭教育てふ聲が遠近に高まりまして、出來ないながらも精を出さう、人の笑ひを招かないやうに、子女を教育しやうと、多少心を注ぐやうになりました、故に、思ひ〳〵に其家庭を組織いたしまして、西洋風にする人もあれば、日本風にする人もあり、和洋折衷にする人もありますが、まだこれと云ふ秀でた家庭を見受けません。

西洋風でも、日本風でも、和洋折衷でも、善良なる家庭を成し立てますには、其主婦が確立しなければなりません、又世間も一般に左樣認めてるやうです、然るに肝要な家庭の心捧ともなるべき主婦が、なまくらなのに、外からばかり西洋風だの、日本風だの、和洋折衷だのと云ふて、撰び立ていたしましても、所詮及びがたいことで、斯のやうな仕方は、豆腐に漆喰を塗ると同樣、永劫堅固に確立するものと、ならう理由はありません、言はゞ家庭の組織風などは、裝飾のやうなものだから、二の次にしましても、差支はありません、如何いたしましても肝要なのは、心捧でございます、心捧が確立しまして土臺が定りました所に、西洋風になり、日本風にな

り、和洋折衷になり、何なり主婦の意に任せて組織しましたならば、必ず善い家庭が出來るに相違ありません、主婦といふ者は、如何にも責任の重大なものではございませんか、然し責任の重大なる代りに其權力も亦重大で、所謂家庭の女王とでも申しませうか、家庭に關することは、大小漏さず一にも主婦二にも主婦、善いことがありても主婦、惡いことがありても主婦、と云ふやうに、打ち任せられます、凡て責任の重いものは、權力も大い、權力の重大なものは、其本分を成し遂げることがなか〳〵困難でございます、主婦の本分と申さば、一口のやうでございますけれども、口で申すやうにはまゐりません、私の考では、一家の主婦たる本分を成し遂げますには、母たる尊號を失はないやうにすれば、よいかと存じます、世には母といふ號は、さほど重大なものとは思ひませんで、何でも子さへ生めば、母であるといふ樣に心得てる方があります、母と云ふ號は、そんなに輕々しい價値のない者でありません徒に吾が生んでやつたのだから母だ、子たるものは母を尊ばなければならない、義務の上からいふても、德義の上からいふても、十分尊ぶべき理由があると申しましても、口で云ふやうにばかりなるものではございません、成程子たるものは、十分に母を尊敬すべき義務があります、然れども人は、義務があるからとて、義務の上にてせらるゝことを喜ぶやうでは、甚だ面白からざることで、それでは何事も誠といふことを悟ることは出來ません、すべて世の中の事は、義務によりてせらるゝことが、兎角多いやうに思はれますが、義務によりてせられますことは、如何に深切に、如何にぬけめのないやうにせられましても、何處かに水臭い所があります、例へば娘と姑との關係は、どれ程深切に、どれ程調和してゐても、血を分けた親子のやうにゆかぬといふのは義務上からする行だからです義務上からすることには、誠の愛を見出すことは出來ません、誠の愛のない所には、誠の尊敬を表はすことは出來ますまい

母といふ名を呼びます時には、それと同時に愛といふことを直ぐに感ずるやうでなければ、眞の母たる尊號を下すことは出來ません、然るに世の人は申されませう『母として子を愛せざるものなし』と、成程如何な人でも、子を愛しない人はありません、教育のある人でも、無教育の人でも、貴い人でも、賤しい人でも、開化の人でも、未開の人でも、子の可愛といふ情は、一樣でございます、唯其愛しやうに種々の差があるのみでございます、

それ女子は、若し一度處女の境界を離れて、母の境界に移りましたならば、かりそめにも、處女の氣樂なりし時代を追想すべきではありません、即ち設けたる胎兒の世に出でました曉には、須臾の間も其兒の德育と智育と體育とに注意を怠らないやうにしなければなりません、人は申します『嬰兒の中は夢我夢中だから何をしても妨なし』と、これは大なる誤解でございます、人の成長しまして後の心の善惡は、皆此嬰孩の時代より胎まるゝのでございます、故に心ある母は、其子の胎内にある時より大切にいたしまして、其子の成人して、獨立する迄は、何事も打捨てゝ、子を教育するのが吾が今日の務なり、子を育つるは、吾が今日の急務なりと思ひて、これを以て第一の樂としなければなりません、試に御覽なさい、人若し花園に花卉を栽ゑましたならば、其種の折より花を開く迄の丹精は、如何程だかわかりません、されば人を教育いたしますには、それより幾層倍の丹精が入用だか、到底比る事は出來ません、

故に母たるものは、其子の生れ出でゝ、呱々の聲を發すると同時に、已が心に略其子の爲に將來の立脚地を定めて、靈形共に正路を渉るやう丹精しなければなりません、或教育家が申しました『世の中の人は、其子を教育するに當りて、人には各獨特の性質と、意識とを有てる故、成長の後には如何なるものになるか計るべからず、故にたとひ吾が子と雖も將來の目的、立脚地などは、到底豫定なし置くとも益なきことなりしといふが、それは尤も道理である

然れども亦、子供の量見にばかりも任せて置けない所もあるかと思はれる、何故なれば少年時代は進取の氣象に非常に富んでるから、其思想も非常に動き易い、今日言ふたことは、明日は早や變つてる、今年希望した目的は、明年破壞されるといふ有様だ、故に子供の自由は十分に保護してやるのは當然だけれども、又一方よりは、能く其子の性質を試みて、其子の爲に豫じめ立脚地を定めてやつて、それに向はせるやうに方針を取つて行くのも、教育の一策かと思はれる』と、

實に其言の通りでございます、自分の幼少の時の事を考へて見ましても、あまりに自由に任せられましたことは、却りて惡いやうに思はれます、其折には窮屈なやうでしたが、母の略定めてくれた道に從つて行つたことが、今となつて見ると成就してゐます、又其方が迷はないで渉り易かつたやうな感じがします、故に母たるものは、返す〲も萬事に注意して、其子の爲に慮らなければなりません、さうして又、それを慮りますにも順序をもつてしなければ、左樣の利益は見えません、

先づ嬰兒の中には、外形上のことは兎まれ、精神上に就きては、非常の注意を加へなければなりません、漸々目が見えるやうになり、物の色合のわかるやうになり、母の顔を見覺える樣になると云ふ工合に順序を追ふて、其智識が發達しまして最早玩具でも弄ぶ樣になりました時からは、實に〲母たる人は、三度の食事も悠々と出來ない程、大切な時代でございます、即ち寐ても起きても、絶へず其心の中には、如何なる事をして、子供を樂ませやう、如何なる玩具は吾が子に適ふだらう、如何なる遊戲は我が子の智識を育ふだらう、如何なる談は吾が子の徳を育ふだらう、と鋭意苦慮して或時は種々の面白き物語などして聞かせ、或時は歌など歌ひて其心を爽快にさせ、或時は種々の問などかけて、其答を考へさせ、或時は種々の遊戲をなし、己も小供となりて共に樂む樣にして、其心に暫時もすきの無い樣に計

らひて、倦み怠の心の起らない樣にすべきでございます、世には其子の不行儀と、我儘なることを切に歎く母がありますけれ共、此は畢竟、自已の怠惰にして、想像に乏しき爲、子女に相應の快樂を與ふる事が出來ないからです、實に母は其子の爲には、或は保護者となり、或は敎師となり、或は朋友となりて、夜を日に繼いで敎育し、小供の爲には多くの時間を費すもの、終日の時間は子供の敎育の爲に備へられたるものと、觀念しなければなりません、

それのみならず、已が家庭の整理は、充分に其子女に快樂を與ふることが出來るか、又子女は、此家庭にありて靈形共に滿足して居るか、といふことに注意し、吾が子女は何處に行きても、吾が家よりは面白き所なしといふ迄、滿足を與ふるやう計ることは、必要でございます、子女が成長して、家外の快樂に耽り、或は放蕩淫逸に陷いりますのも、畢竟母の注意の足らないからです、若し母親が充分の愛を盡して、其家庭にて靈形共に無二の快樂を得らるゝやうにしまして、其子女の心を繋ぐやうに計つたならば、子女の心は、其家庭に繫ぐまいとしても、自然と繫がるゝやうになります、それに就きましても、毎度私が申します事でありますが、一家の祝ひ事やら、或は誕生日などには、其家の貧富に應じたる祝い事を致しますのは、これ母たるものゝ必ず爲すべき務でございまして、これによりて小兒の美情と、秩序の心とを惹き起し、小兒の心に快樂を與へますることは、一通りではございません、此やうにして時々小兒の心に滿足を與ふる時は、子女の心は、何時の間にか母の恩愛に感染して、其感情の薫陶は、成長して後までも、消滅する憂はございません

此れ程迄に家庭に注意いたす母なれば、何處に出しましても立派なものでございまして、これこそ母と云ふ尊號を下しましても、恥しくはありませんけれどもかゝる母は、百人に一人も稀でございます古の諺に「子を見ること親に若かず」といふことがございますが、已が子女の觀察が出來る位の母親

は、余程非凡の人でございます、普通の母親なれば、先づ小供に呑まれる方が多いやうです、今其一例を擧げますれば、維新前の吾が國の婦人には、無學の人が多くありました、維新後になりまして、教育の道が進歩して、子女に一通りの教育を施すやうになりました所が、あちらこちらに、母と小供との智識の衝突が始りまして、母が小供に遣り込められたといふことは、耳新しくもないことでございます、然しこれは世の中が俄に變遷したのだから、是非もないことでございますが、其後普通の教育を受けてゐながら、其子の性質の如何なるかをも、觀察することだにせずして、少でも其子の智惠才能の進歩の見ゆるときは、吾が子のみ秀づるやう思ひて、それとなしに人に吹聽し、甚しきは、吾が子に遣り込められた失策談などを喋々して、かゝることの將來如何なる結果を生ずるかを、念頭にも浮べない人があります、固より智識才能の開發は、時勢と、其身の境遇とに關することですから、子供が母より秀で、母が子供より劣るといふことは、不思議なことでもございません、けれどもそれと共に、母たる資格まで下げるには及びません、智識才能は、子供より劣つた所がありましても、母はどこまでも母でございます、然るに以上申しましたやうな動作は、どれ程母たる權力を毀損するか知れません、母は子供の爲には名譽のやうに思ひましても、子供は母を蔑視する心を起します、子供の心に一度其やうな種を蒔きましたならば、生涯恢復することは出來ませんのみならず、教育を重んずるものゝなすべきことではなく、又其子を眞實に愛する人ではございません、これ自己の母たる尊號を忘れて、子供に呑まれた結果でございます、

次に近時教育てふ聲が非常に喧しくなりまして、如何なる人でも二三人集まれば、教育談の出ないことはありません、これは教育の進歩せし一現象でございますから、誠に慶賀すべきことでございます、然るに他の方面から考へますと、何やら教育といふ

話は、一種の流行のやうになつてはゐないかと疑はるゝ點もありまする、何故なれば、世間の有樣を見ますると、斯のやうに言囃すほど實行せられてないのは、其現象です、固より言行一致と言ふことはむづかしい、然し世間の人が口で言ひ囃すほど、敎育の道が急務と悟つたならば、社會に於ても、家庭に於ても、最早充分に證據が擧らなければならないのです、然るに擧らない處を以て見ると、實際に敎育の道を唱ふるのでなくて、一種の流行視してるとしか思はれません、

こんなことでは、到底眞正の敎育の普及する筈はありません、結局敎育は愛てふ眞理によるといふことを悟つた敎育家が乏しいからです、それにつきましても、愛の花束を以て飾つた、母たる榮冠を被つた、眞正の母たる人がほしいものでございます、

目下流行のリボン

近年大流行のリボンは、重に婦人の帽子洋服又は束髮用簪の飾りに使用され居たるが、近頃は需用いよ〳〵增加し、樣々なる物に應用さるゝに至りたり、今思ひ付きたる一二を掲げんに、婦人の髮の飾りは言はずもがな、小供の涎掛飾、ハート袋の飾、帶止、絲編紙折飾・洋傘の柄飾、袴の腰板飾改良服の胸飾、ノートブツクの飾綴、靴の紐飾、又男子にてはシヤツの胸飾、時計紐、筒袖括り、羽織の紐・リフトハツツトの顋紐、運動服の胸印、接待員の徽章、カフスの釦代り等、此外數へ立てれば幾らもあるべく、兎に角リボンの全盛は、今が絶頂なるべし、扨て此リボンの最初輸入されたるは、全部木綿の繻子織にて、片面物なりしが、近年は佛蘭西より頗る精巧の物の輸入あり、尚ほ本邦製にても、西陣の縞模樣物などは、優に舶來品を凌駕する樣なりたれど、桐生又は東京の普通品は元料の好きにも關らず、光澤惡しく、織耳の揃はぬ爲め、上等品の裝飾には適せずとなり、目下流行のものは、無地と杢目とにて浮出し模樣や染模樣は、早や飽れ氣味となれり、幅も是れ迄は二インチと云へば隨分廣き方なりしが、幅廣物にて小ザンマリと、蝶や花物を結べは格好も至極好ければとて、重に二インチ乃至三インチの幅廣を好むやうになり、彼の元祿物と稱する三色四色を配合したる、格子縞物等の流行も幾分か廢れぬ、是れより追々寒さに向ひては、夏場の絽紗、透し織等に代りて、茶と鼠、紺に花色など混ぜ合したる色の繻子地・琥珀地にて、肉の確りしたるなど流行すること丶知るべし、尚ほ本年の新流行品は、一樂風のリボンにて、着荷早々頗る評判宜く此外ベルベツトリボン即ち天鵞絨リボンは、昨年始めて輸入せるものなり、

婦人と宗教

一般に宗教界は振はぬが、今首都に於ける貴婦人連の宗教會として見る可きもの、中に、京橋築地本願寺に

△令女會　と云ふあり、九條公爵夫人毛利公爵母堂を首め鍋島侯爵夫人、黒木、奥等の男爵夫人に到るまで、百二三十名の會員を有し、又東本願寺の

△佛教法話會　に至りては、九條二條岩倉等の公爵夫人を首め、松平頼壽伯母堂故菊亭侯母堂等、これ亦百四五十名の出席者あり、而して兩會の成立より記さば、前者は明治二十年、後者は十九年の創立以來、毎月一回の會合は繼續し來り居るも、右の會合は一種の交際倶樂部として見る可きものなり、この外芝愛岩町青松寺に

△正法婦人會　と云ふあり、此會は素と眞言派の婦人會と二種ありしを、先年三浦梧樓氏の斡旋によりて、青松寺派と合併したるものにて、此會にも矢張り毛利侯母堂を首め、三好中將未亡人、佐藤軍醫總監夫人、岩佐侍醫夫人、松田道之氏未亡人、板垣伯夫人、波多野夫人等、百名近くありて、また一方の覇をなせり、是れよりして更に又

△基督教派の婦人　に就いて記さば、前記の佛教派の夫より、其活動の狀態と云ひ、熱心の程度も到底比較す可きものにあらず、一般に能く社會に知られたる婦人を列擧すれば

矢島楫子(日基)▲本多貞子(美以)▲山脇房子(聖公)▲山崎千代子(組合)▲大山捨松子(組合)▲津田梅子(聖公)▲戸板關子(日基)▲渡邊辰子(日基)▲小林歌子(日基)

之れと同時に、

△宗教趣味の女學校　に就ては、兩派とも、其軒輊ある處極めて甚しきを見る、先づ左記の基督教派の女學校に見よ、

立教女學校(聖公)▲女子學院▲駿臺英和女學校(浸祉)▲女子神學校(正教會)▲普連土女學校(友會)▲香蘭女學校(聖公)▲東洋英和女學校(美以)▲青山學院(美以)▲高[illegible]女子佛英和學校(興教)▲女子語學校(興教)

女子と貯蓄

内川桂雨

江戸ッ子は『宵越しの錢は持たぬ』など自慢する者あるが、こは大なる誤りにて『宵越しのものは、腦に盛らぬ』との事を云ひ僻めたるなりと、家嚴は常に我等を始め、斯かる謬見を抱ける人々に會ふ每に、必ずいましめ給ひぬ。

然るに滔々たる下流の人民は、斯かる覩易き誤りをも、尙誤りとせず、却つて之をほこる者あるは、實に慨嘆の外なし、試に思へ、人若し斯かる謬見に陷り平常無事の日に在りて、貯蓄の心掛なからんか一朝疾病、死亡、水害、火災、地震、暴風等の變災に遭遇するときは、何を以て生命を保たんと欲するか、且つ變災に遭遇するときは、假令其害甚しからざるも、收入減額して、支出增額するが故に、忽ち生計の途に苦しむは、數の免れ難き所なり、諺にも『轉ばぬ先の杖』と云ふ如く、無事の日にありて、常に是等の覺悟なきときは、遂に意外の困難に陷るは火を見るよりも明らかなり

又人事の榮枯盛衰は、定め難きものなれ共、大方は金錢出納の如何に依るなり、然して、一家の金錢出納を預るは、概ね主婦なる者の務めなれば、主婦たる者は日日の收入或は月々の收入を考へて、一家の支出を制し、能く內政を管理して怠らず、些少の出納も精密に帳簿に記入し、決して等閑に付する事なく、出來得る限りは、少しにても剩餘を生ずる樣に、冗費に省き、收入高以內にて生活を立て、其剩餘は、必ず確實なる所へ貯蓄して、一日も手元へ置くことなく、利子を殖やすことを計るべし、古き諺なる『塵積んで山をなし、露滴りて淵をなす』てふ語を心に印識して、一刻も忘るべからず、然れども儉を欲して吝に陷るは、不可なり、儉とは、己れに克ちて情慾を制し、驕奢を抑ふるを云ふ、吝とは、爲すべきことをもなさず、財を貪るを云ふが故に、儉と吝とは、其道自から異なるなり、されど、世人

の中には、儉と吝との別を誤り、却りて災ひを招く者あり、苟も一家の主人となり、一家の主婦となりて、產を治め家を齊へんとするものは資產不相應の生計をなし、贅澤にして負債の淵に沈み、或は吝にして世の擯斥を受けざるやう、其中庸を取らざるべからず、

婦人は男子に比して、一層貯蓄の心掛あらんこと必要なり、何となれば、總じて男子は、大膽にして『明日は明日の風や吹くらむ』など云ひて、家計に無頓着なるもの尠からず、よし又緻密なる人と雖も家事にくらきが爲に、冗費を意とせざること多し、依つて是等の事は、一家の主婦たるべき者の、よく注意して、たとひ一厘、一錢と雖も、剩餘は濫りに消費せず、不時の變災に應ずる豫備として、之を貯蓄すべし、不慮に備ふる等の事は、男子の責任重き樣なれ共、實際は然らずして、內政管理者たる一家の主婦こそ、其任重くして、且つ實行の場合にも、あづかりて力ある者なり

笑ひ草

湖庵主人

呆郎

ある家に一人の婿があつて、それが馬鹿だといふ評判があつた、そこで舅が婿を試して見やうと思つて、ある時、門前の柳の木をさして、尋ねていつた

『これは何になるか』

婿は直に答へた、……

『さうさね、この樹が大きくなつたら、車輪でも製らへることが出來るだらう』

舅は感心して、人は皆おれの所の婿は馬鹿だ馬鹿だといふけれど、皆僞だと、心私かに喜で居た、所が、その婿が廚下にいつた時に、味噌擂鉢を見て『この擂鉢が大きくなつたら、石臼でも製へることが出來るだらう』

と、遂に馬鹿の本性を顯はした、

復跌

ある人が偶ま地に仆れた、早速爬ひあがつたが、また跌いたので、其人は怒つて云ふた、

『かうと知つたら、起るのぢやなかつた、』

抵償

ある時、虎が猿を喰はうとした、猿は持前の猿智惠を出して、誑つて虎にいつた、

『虎さん、私はこんなに少さい身だから、あなたが私を食べたとて、食べ甲斐もありますまい、あの山に大きな獸がゐますから、御案內申しませう、それをお食べなさいな』、

虎先生も、成程左樣かよと思つて、お猿兄さんと御一所にその山へ行つた、扨て山に着くと、向に一匹の角鹿がゐて、この樣を見て、あいつら二匹でおれを食いに來たなと疑ぐつたから、角鹿も智惠をめぐらした、さて角鹿は大喝して『ヤイ、猿の人でなしめ、きさまは已に十二枚虎の皮をよこすと約束しておき乍ら、今たつた一枚しきや持つて來ないじやないか、あとの十一枚は何時よこすのだ』、と、やりつけた、

流石の虎も、之を聞いて驚いて遁げて、

『猿め、ひどい奴だ、おれを拐かして、舊帳を消さうとしやがつた、』

夢美酒

ある酒好が、夢に美酒のあるのを見て、熱して之を呑もうとした、すると、忽然目が覺めたから、

『あゝ、早く目がさめると知つたら、冷でやつゝけたのに』、

不奉富

ある富人の子息が貧乏人に驕つて云ふには、

『おれは金が澤山ある、貴樣はおれに奉承ないか』、

貧乏人は答へた、……

『お前さんが澤山お金を持つてゐたとて、それがおれのになるのぢやなし、お前に奉承る譯はない』、

『それぢや半分わけてやるから奉承るか』、

「半分貰へばお前さんも五百なり、おれも五百の金持で、同じ身分だから奉承る譯はない」、

「ぢや皆やるからおれに奉承へるか」、

「さうすりや、お前さんは一文なしで、おれは大金持だから、お前さんがおれに奉承なさい」、

表號

ある富翁があつたが、學問のなき男であつた、或時、他の人が手紙で馬を借りやうとした、その文に「外出せんと存候につき、駿足一乘借し下され度し」と書いてあつた、で、富翁は怒つていつた、

「おれは畜生ぢやあるまいし、足は二本しかない、人に借す足は持つて居ない」、

傍にゐた友だちは、氣の毒に思つて、

『駿足とは馬の異名です』、と解譯した、翁は大に笑つて、

「ハヽ、さうですか、馬にも稚號があるとは、思ひませんでした」、

内氣な娘

若い娘の癖に口も八丁手も八丁餘り出者張り過ぎるのは醜いけれども、餘りとて餘り内氣で含羞み勝ちなのも、事が截然と運ばないで却て困たものです、此内氣を治して臆面なく而も人好きのする性格とするには、奈何な方法を用ゐたら能でしよう？、大抵の人は、内氣過ぎる娘は絶えず種々な公會の席抔へ出て、多くの人と交はれば自然と物馴れる樣に成ると申しますが、妾の經驗に依りますに、是れでは什麼も善い結果が見はれぬ樣です、妾は内氣な娘さん達に勸めます、的も考もなく無暗と交際社會抔へ出て、却て輕薄な皮想な身振りなんどを習ふよりも、先づ退いて當分社會と絶つて、自分の信念を養ふと云ふ事にお努めなさい、信念は實に王侯の前にも膝を屈しない、有力なる味方です、妾の知つて居る一人の娘が、矢張非常に内氣な質で、親達も持て餘して居りましたが、妾が勸めて每日數時間宛二三人の子供許りを、相手に全く自分を忘れて遊ぶ樣にさせました所が、數日經過てから、其娘が來て申し升には、「妾はほと〳〵子供が恐くなりました、石を投げる小刀を揮ふ、木へ登る、溝を飛ぶ、子供は全く無鐵砲ですから、妾は之を監督して居るに堪へません」と、其の時妾は手を拍つて申しました「貴女の内氣が治るのは遠くは有りません今少し辛棒なさい」娘は之を聞いて解せぬ顏で歸り行きましたが、又數日經過て來て申しますには「妾は全く子供の無邪氣なのに感心しました、子供が遊んで居るのを見ると、全然自分を忘れて怪我をしようが、怒られやうが、一向御構ひ無しですから、子供は全く愛らしい者です」と、妾は乃で娘に申しました「其子供が自分を忘れると云ふのは、即ち自分より外に他人をも認めぬと云ふ事です、子供は自分を信ずる事が最も厚いから、自分の善いと信じた事は、何事でも行ります、人が嘲はふが人が怒らふが」娘は之を聞いて得心したのでしやう、其の後は全然内氣の癖が直りました。（アリス、プレストン夫人談）

婦人の歴史的相貌

關　如　來

唐の玄宗皇帝の頃に周昉と申す畫家があつた、此の人は周郎と呼ばれて、杜甫や其他の詩人にうたはれた人であるが、美人畫の名人で、惜花士女圖、美人按箏圖など有名なのが澤山ある、其畫を見ると、婦人の容貌が皆豐頰曲眉に描かれてあつたさうであるが、これは其當時の美人、則天武后や、楊貴妃の形相が豐肌秀骨で、豐頰曲眉、明眸皓齒は此の時代の唐人の好尙であつたから、つまり時好に投ずるやうに描いたのである、

さて、我國で豐頰曲眉の婦人の容貌が行はれたのは、上代の事は暫らく措いて、先づ天平時代の初めである、此の時代は恰度唐代風化を蒙むつて居た時代であつたので、その影響でもあつたであらう、樹下美人の屛風（正倉院御物）、また光明皇后の御姿を寫しまゐらせたといふ傳說のある吉祥天女畫像（大和藥師寺藏）など、いづれも豐頰曲眉で、優に太平の像を具へて居る、それから、平安時代より鎌倉の初期に入つて、土佐光長、藤原信實、藤原隆信高階隆兼、土佐吉光等の描いた婦人の形相はやはり豐肌秀骨で、神彩奕然として、各々その精妙を極めて居る、當代は純日本的美術のはじめて眉目を開いた時代で、久しく醞釀せる文化の如何に國風のまゝに發展し、國民的感想の如何に優美嫻雅であつたかは、光長の『伴大納言草紙』、隆兼の『春日權現驗記』信實の『畫師草紙』『榮華物語畫卷』、吉光の『法然上人畫傳』、其他『源氏物語畫卷』『平家物語畫卷』等を見れば、あり〳〵と眼前に映つて來る、次で、鎌倉の末期より應神の亂を經て、元龜天正の頃までは、如拙周文など宋元墨畫派が天下を吹き靡かせ、狩野派、雲谷派などの崛起した時代で、當代の日本人物畫は、たゞ土佐光信の大手筆によつて解るのであるその遺品『福富草紙』『北野緣起』『職人盡歌合』等を繙くと、其頃の婦人の面貌が、前期よりは面長に

傾いて、ことに額が長いやうである、額の長いのは狩野の古畫に能く見ることで、胡粉を厚く額に塗るからでもあらうが、これは元代繪畫の影響をうけた結果で、光信と元信の姻戚上、幾分かそれにかぶれたのであらう、續いて永徳山樂が桃山一代の豪華を描き盡して、狩野探幽出で、土佐光起起り、住吉如慶たつに及んで、面長の相は次第々々に圓みを帶びて來て、世は元祿の、幕府昇平二百八十有餘年のうち、最も靜謐に最も絢爛を極めたる時代となつてからは、婦人の相貌が再び豐頰曲眉の昔にたち返つた、如慶の『橋姫物語』具慶の『宇治拾遺物語』『落中洛外畫卷』菱川師直、鳥居清信、宮川長春等の浮世繪を展觀すれば、此の時代の美人想は、最も精彩に最も婉麗に、描寫され、裝飾されてある、

この以後、寶暦明和より文化文政を經て、明治時代に入る、婦人の相好は漸を逐うて再び面長となり細おもてとなり、甚しいのは眉昂り、鼻高く、頤長く、隨分險相なのもある、尤も此の時代は餘程明代の感化を蒙むつて、畫家も明畫に現はれた花顏柳腰に筆を奪はれ、時人の高尚も亦それに傾むいて來た樣に思はれる、兎も角、勝川春章、喜多川歌麿、歌川豐國、葛飾北斎等の美人畫は、この好標本である次で明治となりては河鍋曉齋、月岡芳年、小林永濯等を先鋒として、渡邊省亭、尾形月耕、武内桂舟、水野年方、寺崎廣業、梶田半古、右田英年、富岡永洗等諸家の作品は、現代の風俗及び好尙を知るに足る立派な證據物件で、概して纖弱娉[illegible]の極を盡して居る樣に思はれる、從つて平生現代の風俗を描きならした筆は、たま／＼元祿姿を描いても、明治式の神經質な細おもての相貌に、元祿の衣裳を纏はせて居るのは、猶花柳社會に於て元祿衣裳を着飾つたのと同樣の趣が見えるのは遺憾の次第である、

元祿時代の應揚な、ゆつたりした、浮世の風は何處を吹くかといふ樣な容貌に、あの大柄な驕奢な衣裝を着飾つてこそ、はじめて調和が宜い、配合の妙があると云ふものである、若し元祿の容貌に天平摸

樣の裝束をさせ、天平の相貌に元祿衣裳を着飾らせたら何如であらう、隨分奇態だらうと思はれる、つまり、時代には必らず其時代の特質がある、精神がこもつて居ります、單に豐頰曲眉といつても、時代によつて大に其趣味風尚が異つて居ります、即ち天平は莊嚴で、平安は優雅で、さて元祿は華美なのである、從つて模樣も其時代相應なのが起つた譯で、現代はまた現代の風俗相應の模樣を選ばねば、如何に元祿の模樣が宜いからといつて、それを其まゝ今日に流用すれば、不調和なことは當然である、

話は岐路へそれたが、同じ豐頰曲眉の顔も、時代によつて其特質は異つては居るが、その容貌の行はれた時代は、天平といひ、平安といひ、元祿といひ何時も天下泰平、文華昌盛の極に達した時代で、國家多事、武力の爭甚しき元龜天正の頃は固より、遠きは鎌倉、近くは幕末より明治に入つて、面長な細おもての顔が行はれましたのは一考すべき問題であらうと思ふ、支那も、唐の玄宗皇帝の時代は、人文の開化、思想の發達、其頂上に達し、支那文明史上最も注目すべき極盛の時代であつたが、元明と降るにつれて、國家の騷擾絕えぬやうに考へる、まさかに瘦ぎすの細おもてが亂世の相で、曲眉豐頰が泰平の表象であることは斷ずることは出來ぬ、これには外來の感化もあり、また時人の好尚にも基くから、一概にはいへぬが、婦人の相貌と時世の汚隆消長とは、冥々の中淺からぬ關繫がある樣に思はれる、

さて、今日此頃の時人の好尚は如何であらうが、やはり豐頰曲眉を愛づる傾向が見えるやうである、流行の廂髮が細おもてよりは比較的まる顔に配合のよいのも、茲にあるのである、思へば明治も既に三十有九年、今までは隨分多事の世の中であつた、先づ維新の騷擾をはじめとして、七年の佐賀の亂、十年、西南の役、廿七八年の日淸戰役、續いて北淸事件、先般の征露戰役など數ふれば、僅か卅九年間の事變としては、既往の歷史に比べても隨分國家多事であつた、

ことに先般の戰役は一國興廢のかゝる所、且多年禍根の包藏れて居つた大戰爭であるからは、此の多事の間に生育した婦人の形想が、多くは瘦ぎすの神經質に傾き、美人といへば、雨に惱める海棠の如きを、自分も喜び、人も好み、美術家もまた繪筆にのぼせ、彫塑の材に採つて、互に其美を誇つて居つたのは、所謂自然の數ではあるまいか、さるに、今日では此大戰爭も千古の大偉勳を奏して、玆に平和の光りかゝやく時に當りて、婦人の相貌に對する時人の好尙も、亦局面展開、豊頰曲眉を愛する傾向の見えるのは、歐米の風化を蒙むつた今日、歐米人が曲眉豊頰を好むにも因るであらうが、其間に何かの約束でもあるやうに感ぜられる、

豊頰曲眉は圓滿の相である、平和の相である、菩薩相、觀音相、阿彌陀相、皆豊頰曲眉相である、平和克復の今日に、時人の好尙が此の婦人相に傾いたとすれば、之を平和克復相といつても差支はあるまい、實に此婦人相の行はれた時代は、前段にも述べた通り、我が日本民族が文學に藝術に各奔放自在の妙想を發揮して居る、平安に在ては貴族的に、元祿に在ては平民的に、或は華麗に、或は優雅に其趣致は各々異つては居るが、我が國有の美質を發揮して偉大なる發達を遂げて居る、そのかはり、世間が平穩無事、泰平靜謐なるに狃れて、兎角に偷安佚樂に耽り、驕奢淫靡に流れ易いのは、人情の弱點、誠に嘆ずべきことである、思ふに、今日以後、わが文華と國光は燦然として四表に煥發きて、定めし驚くべきものがあらうと思ふ、奈良大佛の大工事、御堂關白道長が法成寺の大建築、常憲院時代の文藝の發達それにもましたる、わが純日本的文藝の勃興を近き將來に望みたいのである、併しこゝに最も戒心すべきは、人情の驕奢佚樂に耽り易いことで、豊頰曲眉の婦人相の行はるゝにつけて、坐ろに安祿山の故事に鑑むるの情切なのである、以上は唯本邦歷代の繪畫を通覽して、胸に浮んだまゝをざつと述べたまでゝある、若し出來るならば千五百年來の婦人相を、

一々に幻燈に寫して自説の左券と致したいのである、

小兒の間食

鈴木清子

小兒の間食てふ事につきては、今更事新らしく云ふ迄もなく、心ある母親は已に其害を認めて注意せらるゝ所ならん、されど世間には小兒の眼覺むるや未だ口もすゝがず顔だに洗はぬ内より、お目覺とて菓子杯を與へ、其他小兒の遊び居るを煩しとて食物を與へ、泣く時は食物にてなだめ、少しおとなしき時には褒美なりとて又食物を與ふ、かゝる樣にて、三食の外に菓子果物等を終日絶間なく食はしむる母親さへ見受くる事あり、かくの如くに養はれたる小兒は能く腹痛を母に訴ふるものなれども、不注意なる母は、小兒の腹痛を通例の如く思ひ、輕々しく見過すもあり、又過食の爲とは心付かずして狼狽し、急に賣藥よと立ち騷ぎて、素人療治をなすも多かり

小兒の胃腸は發育不充分にして、いと薄弱なるものなれば、過度の間食は、甚く胃腸の働きを妨げ、營養の不良を來し、腦脊髓病の原因となり、終には生命をも失ふに至る、いと恐るべき事ならずや、されば小兒の年齡によりて分量を定め一日二回位に規律を立つるは、最も大切なる事と思はる、余は二人の男子を養育なし居るものなるが、兄は學校に行き弟は六才にて家にあり、出來得べくば、全く間食を禁ずるは衛生上望まし事なれど、闇に迷ふ親心には、忍ばれぬ心地もせらるれば、午後三時に余自ら分量を計りて與ふる事に定めしより、絶えて腸胃の病になやむ事なくなりぬ、

他家を訪ふ時、手土産とて菓子又は其他の食物を持ち行きて小兒に手渡しせる人あれど、いと心なき業也、注意深き母親は、豫め小兒の間食に時間と制限とを定め置けるに、小兒は已に與へられた故、特別に權利ある物の如く心得、殊に二三歳頃の幼兒な

どは、客の面前にて飽まで食し、無理に止めんとすれば泣出すなど、客の手前に面目を失ひ、折角の好意も却つて迷惑の種となるべし、故に食物を贈る時には、母親に渡して、御子供にと云へば事足るべし、

又家庭によりては、小兒の乞ふ儘に金錢を與へ、勝手に食物を買はしむる事あれど、こは考ふべき事にこそ、衛生上の害は云ふ迄もなく、金錢を浪費する習はしを養ふものなれば、よく注意すべき事ならずや、世の父母は小兒に金錢食物等を充分に與ふる事を慈悲の樣に心得、かく致さねば小兒の性質の賤しくなるおそれある故なりと云はるゝ人あれど、幼兒の時よりよく注意して、規律正しく哺乳せしめ、成長するに從ひ時を定めて與ふる樣にせば、かゝる患ひなきものなり、

すべて子を持てる親は、道理の上にては間食の害を認むれども、愛の一方に傾きて、知らず〱の間に其度を過さしむるに至る、小兒死亡の數は大人の死亡數に倍し、其死の原因は即ち親の不注意より過度に飲食せしめたる結果なりとか聞く、いと恐るべき事ならずや、世には己の愛子の柩に取付きて物狂はしく泣き悲みて神佛を怨み、醫師を罵る母も多かるべし、しかもこは大方己の不注意と云ふ乃によりて愛子の貴き生命を斷ちたるを知らざるなり、いと悲しむべき事ならずや、

スペンサー曰く『世界の母は毎月若干の子女を殺害せり、其如何なる時に如何なる食物を與ふべきかを知らずして……徒に罪なき兒童を死に至らしめ、其然らざるも大に身體を弱からしむるものなり然るに其小兒の不幸を見て、天道の是非を疑ふが如きは愚の極なり』と、味ふべき言ならずや、

天性につぐもの

小衣女史

愛らしき童

愛らしき童、三々伍々集ひて、庭の面に咲そろひたる千々の草花を

手折り、あるはかなたにもえ出づる楓樹の下に、何やらんさゝやくさまにの愛らしさよ。滴たる笑顔は、しぐれに染みし秋の錦と、いづれがまさりたりやはする。無垢清軟なる小蝶の、片々なる化に戯るゝに似たり。餘念もなく、惡念もなく、又賢愚のけじめ、貧富の隔てもなし。その動容の一として、相似ざるものなければ、孺祠が人は

氏より育

と云へる書を思ひ出しぬ。猿公の劇を演ぜしむるや。小猿を取りて之を敎ふと。況んや人の子に於てをや。幼兒の習、智愚賢不肖、獸類にさへ耻づ可きに至るは、孔丘の所謂、性相近く、習相遠きなり

世の敎育の任にある者

は宜しく玩味すべく、又愼む可きとにこそ。秋葉慘々枯れ落ちて、寒鴉空しく叫び、骨のみあらはなる冬木立の、春に至りて若芽の繁れるは、これ決して偶然の事にあらず。そも秋葉の將に落ちんとするや、來年の財寶を貯ふるが爲に、一苞もて其芽を深く藏めて、春を待つなり。人も幼時は、其の芳神百骨は、日を經ざる玉子の如く、柔軟なるが故に、恰も苞を以て深く之を藏さざれば、春陽の新芽を見ること能はず。これを譬ふれば、

父母なり

世界の萬物は互に相愛し、自他相援けて、始めて天地の美を爲す者なり。人と云へる字を見よ、兩々相須つて立てるを、これこの義なり、父は子の綱たり、君は臣の綱たり、夫は妻の綱たり、一起一擒之に依らざるはあらんや。幼童の互に縺れ合ひつゝ遊ぶさま、彼是其動容の相似たるも、稍長じては、或は超出して上流に達し、或は下りて卑俗となる。其由る所、習の自然にして、善は少なりとも難く、惡は大なりとも易し。茲に至りては、自然にもゑ出る、

雜草

を抜き去るべし。これを抜き去りて良心を培養し、完全なる家庭の敎育を以て養成するは、第二の天性にして、習なり。されども、幼子は自ら之を抜き去るべき力なし、故に寒さを防ぐ、深き母の訓養は苞の如し、堅固なる父の保育は、幹樹の如し。兩々全くして、茲に完全なる子たるを得ん。世には只管幼時の弊習を坐視して、其の惡草を去らしめず。其局枯稿して、復伸びざらしむる者あり。凡て人は、成長しても受動によりて、靈魂の變化あるを、まして幼時は、父母の言行に倣ふ者なり、豈愼まざる可けんや、

誌友倶樂部

◎洗濯の仕方　インキでよごれたるものを、洗いおとす方法のなきものに候や、御たづね申上候(横須賀鹽田こと子)

◎右の答　それは汚れたる上に鹽を載せ、酢でしめして布で擦り、それを幾度も汚れの取れるまで繰かへし、其後を淸き水で洗へば、大抵元の通り奇麗になります、また印刷したものへは鹽水をそゝぐと大變面喫になります、序に他の洗濯の仕方をも述べます、柳行李のやうに編んだものを奇麗にするには、つよき毛に鹽をつけてこすり、毛氈の汚れたのには、明礬か曹達を薄く溶かしたので洗ふと色が奇麗になり、石膏製の裝飾品は澱粉即ち片栗などを溶した中へ浸して取出し、乾いた後で附着した粉を輕く掃取るのであります、その外いろ〳〵ありますがいづれまとめて掲載します(社内秋雨生)

◎魚の見かた　魚類の新鮮なるか否やを別明する、尤も簡便の法あらば御教示にあづかりたし(本郷森田幸子)

◎その答　魚類を買ふに、鰓赤きか、眼は澄んで居るか、肉を指で押して、凹んだ所がすぐ元へかへるかを吟味せよ、これに反對するものは腐敗して居るなり(社内夕暮山人)

◎和歌投稿に就て　和歌は詞藻欄に載るもの、多く一人一首のやうに見受けるが、あれは一人幾首出しても差支なきや、それとも制限されあり候や伺ひたく候(芝山内香華女史)

◎右の答　これまでの所にても、一人幾首を投ぜるも可なり、たゞ撰拔の外の歌は沒書にしたるが、以後は特に佳作とみとめたるものは、場所をかへて幾首にても掲載するつもりなり、併しそれは第十七年第一號の誌上より也(編輯掛)

◎遊學案内　私は東京にて一修業仕度く存じ候が、遊學案内は何と申すが一番確かな物に候や(羽後安田とき子)

◎その答　遊學案内と申すものに、あまり當になるものは少く候、殊に女子の遊學案内は猶更の事に候、何れの學校にても、規則だけ見れば立派でないのはなく、主義も結構なものばかりなるが、さて入學して見ると後悔することが多い、併しさうなつては物が後手になる譯であるから、案内書位を當にせず、先づ自分の目的を示して相當に信用ある向へ照會して、これならば安全といふのを見極めて入學せられたきものである(同)

誌友諸君に

本誌第十七年第一號より、詞藻欄を從來の和歌、短文、新體詩、俳句に限らず『誌友諸君の領分』として誌友諸君の筆に成るものにて、差支なき限りは、何にても掲載すべければ盛に投稿せられたきもの也、差當り一月の風俗遊戲等に就て、思寄りの事もあらば、十一月中に投稿ありたし、



婦人の體育に就て

女子美術學校幹事　磯部吉雄

健康は誰も彼も一様に人の冀ふところで、單に人類のみに限らない宇宙の生きとし生けるものは悉くこれを希望して已まぬのでありませう、されば健康は實に大切で生活上最も注意せねばならぬ事であります、德育、智育、體育、この三者の良否は、賢愚強弱の人を作り幸と不幸とを與へるので有ますが、たとへば此三者と衣食住とは影と日向の樣なもので、共に生活上の要素であります、でこの三者の完全な發達は一つは生活の基礎となり、一には社會の光明となつて輝くのでありますが、畢竟この原動力となるものは健康の如何にあると云ふ事を記憶して置かれたいのであります、現今の人の健不健はその伏線遠く往昔にあるので亂雜な配遇や風教等の影響その他周圍の事情が全く現今の狀態に導いたもので一朝のことではないのであります、現時我國婦人の體格は概して小軀に見えて外國人などに比べると僅に一寸强の不足を見るのみであります、而も尚ほ小さく見えるのは主に頭部の權衡が歐米人に比して非常に大きい點にあるので、從つて小柄に見ゆるのでありませう、これは祖先を恨むよりも抑も人種の故でもありませう、概して日本婦人の體軀は身長のみならず、總ての點を檢すると遺憾ながら未だしき者であります、そも〱古來我國の婦人は體育に就いては多くのよい歷史を持つて居りません、只武家では稀には相應の修養も行はれたから立派な婦人もないではありませぬが、近代に至つては兎角柔弱に陷つて、體育のことなどは皆無な有樣で、所謂こゞみ女にそり男といふ數へ方で婦人には强いて屈ま

したのであります

元來我國の今の家庭の有樣は中流以上は萬事に自由がき、一には封建的遺風でもありませう、何れ多數の召使を使役して何事もこの召使に委ねて置いて、自身は長袖を纏ひつゝ、これを奧樣と稱して皆引籠つて中々顏は見せぬと云ふ有樣なのでありますゝ單に奧樣には限らないお孃樣の時代から既に左樣でありませす、甚だ其意を得ぬと思いますが一には我國の家屋の構造が兎角非體育的で、坐つたら中々立つのが面倒だ、寒い時などは火鉢を抱へたら近處にあるものでさへ遠くの召使を呼んで用を使せさせるといふ有樣、又



戸外運動といふたら追羽根とか手鞠位のものがせいゝ、せいなのであります、かう云ふ風で奈何して健康な婦人が出來ませう、如何に人間の身體が神妙を極めて居ても修養することなしで發達を望むことは無理といはねばなりませぬ又かゝる上にも男尊女卑の風があつて兎角男が婦人を輕侮するといふ事があつて屈み女の頭の上る瀨がなかつたのでありますから身體は虛弱、精神は不活潑になつて妬心は深くなる感情は鋭くなり、益々婦人の美飾の發達を妨げるのでありました、才子多病佳人薄命抔と忌はしい字句を平氣で通用させて居るやうでは健康は甚だ覺束な

い、で、かの所謂細眉纖腰の美人とは結核質で色青く感性一點張で、俗に生理的美人といへば脂肪過多で慈悲などは語れないところの人を指すらしい、尤も追羽根や手鞠で養はれた結果といへば是非がない事でありませう、併し諸子には斯ういふ事はない筈で今は過去の歴史と見て宜しいのでありませう、げに聖代の餘徳は泰西の文化を加味して敎育の事益々振ふので萬事發達して行く筈でありますが、獨りこの體育のみは如何に周圍からその利を說いても自身がこゝに留意する所がなくては決して發達するものでないのであります、全く自動的に身自ら蹶起して利害ある所を察し、重大なる事柄であることを自覺して克く修養しなければ到底健康は得られぬのであります、尤も體軀の改良は一朝にその實を結ばしめることは出來ませぬが、さりとて進まなければ退くよりも外ないのですから、先づこゝに鑑みて第一に各自が鋭意修養して最もよき健康を得るのが急要務であります、その結果は延いて子孫長久の榮となり且は最大慈悲をつくすに至るのであります、この責務を負うて居る諸子の幸福が如何に多大であるかを羨むのであります、

さて健康を得るには近來體育として種々な方法があり議論もある事でありますが、要は倦まず撓まず日課として適宜の運動を續けるといふ事が肝腎であります、けれども只人には困ることは善いと知りつゝも常住不斷それを遂行すると云ふ點が至難なのであります、暴食安居は健康を過る基である位のことは誰も知りながら、さて尙ほ改善が出來ぬもので、之は人間の弱點で、體育ばかりの事でありません、他の事でも兎角かういふ事が多いのであります、心せねばならぬことゝ思ひます、一體積極的な事柄は、何によらず一時に良好なる成績を擧げるといふ譯に行きませんが、何でも自己の健否を檢して可成興味ある運動法を撰んでそれを遂行するのであります、併し何でも運動さへすれば可いといつて自己を忘れて過度にやつては不可ません、方法、時間等はよく

その適否を鑑みて行かぬと却つて益がなくて害になる位でありますから、其邊は宜しく自分を知る必要があるのであります。

かくの如く健康の要を主張すると同時に體格の上に流行を來させたいと思ひます、ひさし髮も元祿も結構ですが、いかに外形附隨の美を競うた所で、不權衡で發育不完全な身體では何にもならぬ、錦繍を纏うても反つて醜く見えはしませんか、宜しく內容の完全を計つて然る後に衣服とか髮とかに注意するが順序であらうと思ひます、乃で是非とも體格の上に流行を促したいと思ふのであります、英國では體格の良いのは上流の人と極まつて居ます、若し農家などに體格の善い小兒が出來ますれば貴族の小兒のやうだと言つて誰も彼も羨むと云ふ有樣で、誠に良い習慣である、又當然なことゝ思ひます、よい家庭では夫れだけの用意も出來、何不自由なく體育其他すべてに盡すことが出來るから何處まで良くある可き筈で、我國のそれと比較して如何にも差異の大なるを覺えるのであります。

常に修養に修養を重ねて圓滿に發達した筋肉は權衡よき骨格を支へて圓轉滑脱の活動に具へ、淸き血と涙は愛の泉ともなり、かくて豊麗なる德望ある相は克く人をして慕はしむるものであります、思ふに諸子は實に此資格に近づきつゝあるのであります、須らく自己の身體に速にこの原動力を得せしめて、然る後に德智の發展に具へらるゝは、實に至大の幸福であること言を要せぬのであります。

教員の待遇に就て

黄離女史

沛乎として僻陬の島村にまで及ぼしたる教育の事業は、今や其統一を計るべき必要を生じ、或は教育に關する會議の比々として都下に開かれ、或は民間に於ける教育演說の、屢各所に設けらるゝをも觀る誠に前途有望なる吾が教育界が、年毎に進歩の方針

を取り、而も全國その權衡を齎しうせんとの計畫あるを見て、國家の爲に深く賀せずんばあらず、

余此頃某所に於て開かれたる最も盛大なる敎育演說を聽きぬ、十餘名の敎育家、更る〳〵立ちて現今の敎育を論難せられたる中に就きて、余の傍聽せし者を概括せば、直接間接に、敎員優待法敎員增給法を說き、並に敎員速成の弊害は、往々人格不相應なる敎員を生ずるに至りしを慨ずる者の如くなりき、要する處は、敎育に犧牲の精神なく、利を以て誘はるれば、忽ち之に應ずる者のみ多ければ、之を繫ぐ方法としては、勢優待法、增給法に因らざるを得ずとの意あり、誠に一理ある說なりと雖も、余の卑見を以てせば、猶之に滿足する能はざるなり、

敎員優待法、大に可なり、優待は即禮の存する所なれば、世間幾多の職務中、此の最も高尙なる職責にある者を尊敬優待して、云ふべからざる困難の業に服する勞を謝し、益意を敎育事業に委ねしむる樣導くは當然の義務にして、之を顧みざるこそ道を知らざる者といふべきなれ、

敎員增給法も大に可なり、かの小學敎員の薄給に至りては、終日營々として精神を勞し、かくて高等敎員の閑暇ありて多給なる者の半にだも及ぶ能はず高等敎員とても、其地其學校の富の度に從つて、一定の俸給なければ、常に上なるを羨み、相爭つて富める地富める學校に轉せんと欲するは、防ぐべからざる趨勢なれば、之を救ひ且其去るを留めんとには增給法尤も近策たるべし、されど、若し此の增給が、亦平均を失ひ、地に依り、學校に依りて大に相違あり、且中學小學及び各種の學校が依然として甚だ俸給の權衡を失はゞ、終に此の弊風を救ふ能はずして重ねて增給の必要を叫ぶに至るところあるべし、故に余の私見は中學校、高等女學校、小學校其何れを問はず、勤勞の度を計りて俸給を平均にし、以て小學敎員の所謂、足掛思想を除き、亦高等敎員が小學敎員を侮る惡風も斥け、凡そ敎育といふ事には決して學校の上下なく、唯生涯志を移さず熱誠を以

て子弟を導く者を上者となす、との高尚なる觀念を深く心に抱かしむるを得ば、かくて後にぞ、増給の効果果して永續せらるゝには非ざる乎、

されど、退きて考ふれば、是猶彌縫の策と云はざるを得ず　蓋人間の欲望には限りなければ、若し増給の法のみを以て、一時敎員の足を留めんとせば、三年にして去るべきは五年、五年にして去るべきは七八年間留るに過ぎずして、限りなき欲望は、到底一校に留りて滿足を得ることなく必ずふたゝび其心を動すに至るべし、

さはいへ、人間は必しも欲の爲にのみ進退するものに非らず、此の間に一種人心を支配する感情といふ者ありて、一朝恩に感ずるか、或は事に激する事あらば、焔の如き欲心をも、容易に沈壓するを得べき力あれば、平常事なき時といへども、感情が人を左右すること決して少からず、故に敎員優待法の如きは、最も感情に影響あれば、増給法と共に、必實行の心要ありと雖、若し此の優待法が、果して名實相伴ふに非ざれば、これ亦一時敎員の歡心を買ふに過ぎずして徒勞に歸せんのみ、

敢て問ふ、何をか名實相伴はざる優待法といふ、校長驕慢にして　敎員と共に敎育上の事を謀らざる者是なり、校長貪欲にして、贈賄の多少に因りて敎育を左右する者是なり、彼を愛し是を疎んじて、偏頗の擧動ある者是なり、校長の衣食甚だ高くして、敢て敎員の情狀を斟酌せざる者是なり、擧げ來れば猶少からずと雖、要する所は、其心實に配下の敎員を尊敬優待する心あらずして、只已れに背かれんことを恐るゝが爲に　形式の禮のみを厚うして、一種の優待法を行ふに至りては、これ即名實相伴はざる優待法と云はざるを得ず、斯の如き物質的の優待は、聊か人の感情を動かすにも足らざれば、焉ぞその恩に感激して、總ての不自由を厭はず、進退を決せしむる程の力あらんや、故に優待は必心より發せざるべからず、心此に在れば勤めずと雖、禮自ら備はり、即名實相伴ふ優待となるべきなり、人徒ら

に敎員の不實不格を責むるのみにして、其長職たる人の性行を忽にす、故に敎員の惡しき者は、益惡しく、善き者と雖、遂に慨嘆して望を失ふこと屢あるには非ざる乎、敎員速成の弊害は實に人格不相當の者も多かるべし、學力不十分の者も多かるべし、されど苟にも敎員に思慮ありて、此の職を選びし者が、若し其任に堪へずんば、之を支配すべき校長等は、殊更其摸範となりて、熱心に之を善導すべき義務あるに非ざる乎　名は敎育者なりと雖、其實己れも敎育を要するは、今の諸敎員の通憾なり　然りと雖、敎育者を敎ふるは最も困難の業にて　固より言のみを以て諭すを得ず、行のみを以ても示すべからず、必威と恩とを以て之に臨み、敬と愛とを以て之に親しみ、校長が肝腑より流出する言語は、一言一句たりと雖、聞く人をして感動せしめ、校長が犠牲の精神より發する日常の德行は見る人をして、愧死せしむる如くなるを得ば、諸敎員の精神も必之に化せられて學校の敎化靡然として行はるゝに至らん、

噫、若し誠に斯くの如くんば、「一度此に敎職たりし人は、必其恩に感激して、焉ぞ私欲の爲に此に靄然たる校舍を去るに忍びん、焉ぞ增給の爲に、暫時その足を留むる敎育者の精神に類すべけん、彼と是とは、恰も精氣充滿せる壯者と、五臟腐敗せる病者との如き乎、今や敎育の事業誠に盛んなりといへども何故に其効未だ擧からざるかと考ふれば、殆んど病める敎育者の手に依りてのみ經營せらるれば也、此際若しかの精氣充滿せる壯者を用ひて之に當らしめなば、其效滴然として、必見るを得べきに此根本的精神的の發達を期せずして、苟且彌縫の窮策をのみ講ずるは、其實未だ進歩の域に達せざるなり、吾が敎育界は誠に前途多望なり、諸の敎育家は混沌として、未だ一定せざる敎育界に立ちて、何れの方針によりて完全なる敎育の統一を計らんかと惑へるが如しされど終には必根本的精神的敎育に歸せざるを得ず　凡そ此完全なる、基礎に依りて成立せば、所謂敎員優待法增加法の如きは、殊更に論ずるを要せず

人格不相當なる教員の如きは全く蹤を絶つに至らん然る後にあらざれば、眞に進歩せる教育として、國家の慶するには値せざる可し、偶其所の演説を聞きて猶其説を嫌らずしとなし、男子なりせば直に立ちて吾が宿論をも稱へつべきにと思ひし事の一端を錄すること然り。

心情美しき女學生

女學生の事と云へば、惡聲か醜聞か、二つに一つならぬは無き此の頃、此は殊勝なる令孃の、隱さんと爲し心の珠、いつか輝きの外に漏れて傳へらるゝに至りしこそ嬉しけれ、住居は芝田町七丁目八番地とか、下山商船學校長の姪にて、吉村つね子(二十)と云ふがあり、家には年老し母と、病身の姉とを控へ看護に怠りなき傍ら、島田友春氏の經營する芝山內の日本女子美術學校に通學して普通、高等、研究と順次各科を修行し行く內、玆に同女が麗はしき精神のはしなくも世に顯はるゝ緒口となりたるは、同校國語の教師山本靜家と云へるが、久しく腦病に苦められし揚句、遂に他界の人となりたる事なり　然るに此山本と云るは、紀州在の某富豪の相續人なりしが先代中無學の爲に人より財產を横奪されし者なりしとかにて、同家の相續人たる者は、必ず法律の一通を學習ばねばならぬ事と定めあり、靜家も父より此旨を固く命ぜられ居りたるも、性得の嗜好は國文に傾き、源氏、榮花などの物語を繰開げ行くには、夜を徹すともいとはねど法律の法の字から見るさへ肩の縮む苦しみと、逃て回るだけ尙責つけられ、互に面白からぬ親子中の、遂には舊弊の勘當と、一文不通の間柄となりたるに、靜家は容易に志を屈せず　如何にも一度は思ふ丈を達せでは已みがたしと、樣々に苦心の末、東上して苦學生となり、國學院大學に通ひて一通りの修得したるまゝ、尙奥深く別行んには、旁收入の途を講せねばと、口ある儘に島田氏の女子美術學校には入りたるなるが、不幸は尙氏が身を去らず、過度の勉學と、一家の不和合は痛く氏が

健康を損ねて、快き日とては一日も無く、かて丶加へて僅少なる收入は、多く讀書の材料に費やされ、到底藥の代にも回りかぬれば、羸たる骨身は、愈節立ち、品川の裏通りなる某寺院の一隅を借りて、漸く自炊の煙を絶さずと云ふのみ、只慰むは教室の講義と折々の作歌にて、此にせめてもの悶えをやり居りしが、病苦は日に日に勢を加へて、遂には身動きも出來ぬ始末となり、折々ごとに生徒の慰問を受る他は看護する者とては無き有樣なるにぞ、つね子は病身の姉を持るだけ、同情を寄する事も深く、斯る時こそ師の恩の萬一にも報ずべけれと、同窓の人々と申合せ、出來べき限り慰問の實は致しながら、獨身の先生に女學生の看護すと云はゞ、世の傳へも如何なるべきと、亦其の事を顧はざるにあらず、千々に心を碎きつゝ、其の注意は怠らず、されど如何に不通の間柄なりとて、斯なりては郷里の方々こそ親身の中、弟もありと云へば、誰か介抱の誠を盡すべしと、代筆の覺束なくも山本氏病臥の實狀を報じ、早く誰にても看護の爲上京せられたしと申しやりしも、梨の礫の絶て音沙汰も無く、一人胸を痛め居るを、近隣の賣卜者鈴木幸太郎と云ふが、如何にもつね子の至れり盡せる周到の振舞に感じ入り、足らずとも私こそ身を以て代るべしと進み出で、それより同人は山本を看護する事とはなりたり、

特志家鈴木の義侠の振舞に、山本の看護の方は稍滿足なる手當を爲すを得るやうになりたれ共、紀州よりは一片の音信さへ無き始末に、藥餌の代より日常の雜費まで、多くは常子が負擔に歸して、入りては姉に、出ては師と二道の盡し方、なみ〳〵ならぬ骨折なるを、更に物の數ともせず、只單に其の回復の速かならんを祈りたる甲斐も無く、本年の始靜家は遂に不歸の客となりたり、斯と報せなば流石の肉身別けたる一家の人の上京を見るべしと、鈴木某とも相談の上、葬式の期日まで心積りに先を延して、待ども〳〵一向に音沙汰も無きより、是も遂につね子の取まかなひにて、賣卜者と共々に型ばかりの營

を爲したりとか、如何に一家の不和なればとて、其の最期の刹那まで、一片の寛容も示さず、見殺にしたる山本一家の無情を見ては、つね子は逝し人の不幸の今更にも甚しかりしに、他事ならず覺ゆると共に、死後の祀の尙更に觀る者も無きを思ひては、其の草茫々たる土饅頭の前に叩頭くことに、人知れぬ淚を注ぎ居りしが、思へば先師が國語に倫理に、致室の授業の恵みは吾が獨り受けしにあらず、懇篤なり先師の面影は、まだ組の人々より消ざるべく●此際一層一同より醵金して師恩奉謝の永き紀念に朽ぬ名殘の墓石にても寄進したらば、校の面目にも師弟の途にも兩全の方法なるべしと、殊勝にも思立ち此の春より去月にかけて、八方に奔走し賣卜者鈴木氏には先師が關係せし書店等の勸誘を依賴し、己は校長始め同窓の人々の、既に卒業後各所に散在して知れにくきを一々に歴訪りて、遂に七十餘圓の義金を得、遂に此程美事なる墓石を購ひ、無事に目的を果したりと、而も孃が美事は此に止まらず▲先年芝山内にて一老婆の孫娘をつれたるが、馬車に衝突して跳飛され、負傷したる事ありたるに、折柄通りかゝりたるつね子は、直に馳寄り、様々に介抱しやりたる擧句、老婆の感泣してその名を問ひ、所を問ひ、果は學校にてもと問ひたるに、只通りかゝりの女とのみ答へて　姿を隱したるを、老婆はよく〳〵本意なかりしと見へ、附近の者に尋ねて、其の日本女子美術學校の校章をつけ居りたるを告られ、早速懇切なる書面にて同校に宛て其の容貌、服裝等巨細にしたゝめて、若し斯る生徒の同校にあらば、婆が一生忘れ難き感謝の念を傳へてよと申來りたる事もありとか▲生徒等よりは姉と仰がれ、學校よりは花と云はれ、現に同校の備品の如きも、つね子の主唱になりて醵金したる、生徒よりの寄贈品多き由なるが、斯く常に先頭に立ちて奔走する事多きにも係らず、更にさし出がましき振舞を見せず、只身を抱いの衆美を濟すと云ふ有様なるより、孃を知れる者は内外と無く、皆其の心掛の勝れたるを唱へぬは無き

穏なりとか、

第五 女子高等師範學校の位置

近來女子高等教育の勃興に從ひ、これが教育に從事する女教員養成の必要を感ずれども、現今の東京女子高等師範學校のみにては、女子高等教育に從事すべき多數の女教員を養成する能はざるを以てその筋にては、男子高等師範學校を地方に分立せるの例を倣ひ、新に女子高等師範學校を設立するの議あり、文部省は來年度の豫算概算に、その經費を繰込み、大藏省に送附したるが、その設立地に就ては、各地の競爭を慮り、秘密に附し居れども、或確なる筋より聞く所に依れば、京都に於て設立することに確定し居る由、いよ〳〵設立の曉には、現今の京都府第一高等女學校を、高等女子師範學校の附屬女學校となすの計畫なりといふ

◎女學生服裝改正　文部省は、近時一般女學生徒の華美に流れ易きと、現在の服裝は運動に不便なるより、之を改正して一定の服裝を制定せしむる等にて過般全國女子師範學校及び高等女學校長へ、之れが意見を問合せたるに、殆ど異議なき摸樣に付き、一時は右改正の訓令を發する迄の運びに至り居りしも其後種々なる事情を生じたる爲、目下其儘となり居れりと、

◎裁縫檢定試驗合格者　本年度裁縫の檢定試驗に合格せる者左の如し、

岩瀬まつ	東京	岩崎さだ	長崎	五十嵐とよ	山形
井村きく	東京	星野なか	新潟	穂積ます	三重
岡田けい	兵庫	小田ふさえ	兵庫	垣田ふさを	福岡
山田あきの	山梨	山川あい	京都	松嶋喜美恵	熊本
近藤すゝ	靜岡	後藤とく	神奈川	麻生まつ	千葉
湯村梅の	宮城	高野サダ	神奈川	岩城せん	山口
宮嶋あい	千葉	勝又とく	靜岡	横山のぶ	靜岡
戸塚はま	靜岡	高柳とめ	靜岡	花輪ためえ	山梨
若林つる	長野	和田たけ	嶋根	上田くま	岡山

◎東京市の學齡就學兒童　東京市に於ける學齡兒童數の調査は、最も困難なるもの丶一にして、普通の

人口調査さへ、區役所と警察所の調べが互に相違する位なれば、學齡兒童の年齡調査は頗る面倒なるも此頃市の教育課が調べたるものは、比較的正鵠を得たるものなりと稱せらる、即ち左の如し

	男	女	合計
學齡兒童	八四、五三五	八〇、五四五	一六五、〇八〇
卒業兒童	三三、〇二九	三一、〇一六	六四、〇四五
就學兒童	四七、三〇八	四四、九八二	九二、二九〇
不就學兒童	四、一九八	四、五四七	八、七四五
百分比例	九、五〇四	九、四三五	九、四二九

又右の學齡兒童の就學の狀況を見るに左の如し

	男	女	合計
官公立小學校に於てする者	三五、四七九	三三、六八八	六九、一六七
代用小學校に於てする者	四、三三八	四、〇九七	八、四三五
私立小學校又は家庭に於てする者	七、五〇六	七、二〇九	一六、七一五

又右の內義務教育即ち尋常小學校を卒業したるものを擧ぐれば、左の如し。

	男	女	合計
官公立小學校を卒業せる者	二三、八四九	二二、三八三	四六、二三二
代用小學校を卒業せる者	三、八九六	三、七二六	七、六二二
私立又は家庭教育を終し者	五、六三九	五、一九八	一〇、八三七

又右の尋常小學校卒業兒童を初め、就學兒童に就て見るときは、百人の就學兒童中、全く義務教育を終りたるものは、七十八人一分に當る割定にて、割合に成蹟好き方なるも、更に全體の學齡兒童數より見るときは、東京市には現今尚ほ百人の兒童の中より、其三十二三人宛は、殆んど自己の姓名をも記する能はざる人間を生じつゝあるなり

◎日本女學校の紀念式　西澤之助氏の設立に係る、本鄉の日本女學校は去る十八日午前九時より、第六回開校紀念式を擧げたるが、生徒八百餘名の「君ケ代」の唱歌ありて、勅語を棒讀し、土方伯、井上文學博士外數氏の教育講話ありて、幼稚園生生徒總代、專攻科生徒總代、卒業生總代の賀辭に次ぎ、紀念式の歌を合唱して式を終れり、別室には生徒の成績品たる繪畫、習字、裁縫品等の陣列ありしが、本科四年生の製作品は大に其手腕を現はし、其他專門家を凌ぐ佳品少からざりし、

詞藻



貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

時雨

天

椎の實の落つる音さへ降ませて
柴の戸すぐる小夜しくれかな
東京 森田幸子

地

水鳥の鳴く聲さへも身にしみて
川邊さびしき夕しぐれかな
近江 川上時子

人

大そらの星をかそへて行みちに
ふりいでにけるむらしぐれかな
東京 高野元子

選外秀逸

○○ 東京 吉岡龜子

きつねなくかれのゝすゝき打なびき
ひと村しくれ降そゝぐなり

○○ 岐阜 豊田冬子

さひしくもたてるかゝしのやれ笠に
しくれふるなり小山田の里

、、、○ 秋田 細矢はる子

松風とおもふはかりの音たてゝ
このはまじりにふるしぐれかな

、、、○ 東京 牛山桼子

をり〳〵は木の葉交りて軒端うつ
あらしや夜半の時雨なるらん

、、、○ 東京 松本まつ子

落はしてうもれし山のいほりまで
うきよの中とふるしくれかな

、、、 群馬 吉田露子

冬のたつあはれをつけてなくかりのこゑの末より時雨しにけり

、、、 羽後 佐藤かつ子

かさもちし友はおくれてひと足のしくれに袖をぬらしけるかな

、、、 東京 碓井のぶ子

まどろめば伏屋の雨戸はら〳〵とうたゝ時雨におどろきにけり

、、、 天津 富成梓子

大原のさとのあさけのむらしくれしつか眞菜のつゆにしらるヽ
ヽヽ　東京　山口孚子

山のはに入ひのかけはさしなから軒はぬらすむらしくれかな
○　佐賀　尾方綾子

きヽなれし落葉に高く音そへてやまさとくらくしくれふるなり
ヽヽヽ　秋田　古瀬りく子

わたしはに舟まちをれは川口にあはたヽしくもしくれふるなり
ヽヽヽ　埼玉　横田やな子

聞なれしきぬたはいつか音絶えて夜さむの里にしくれふるなり
ヽ○　埼玉　横田秋子

ちりつもる落葉せかるヽゆふ川に時雨をのせてくたすふなびと
○　群馬　石井寛子

此あさけ冬來てけりなはた寒く身にしむものはしぐれなりけり
○　群馬　石井とく子

木からしの吹初めしより冬來ぬと知られてさむく時雨ふるなり
ヽヽヽ　群馬　天田あさ音子

見はたせは峯の紅葉のちらぬまに夜半の時雨にふゆは來てけり
ヽヽヽ　東京　高橋珍子

夜もすから比良のねおろし吹しきて時雨ましりにましら鳴なり
○　常陸　岡田萬子

ましら啼く聲もしめりてやまざとの軒端さびしく時雨降るなり
ヽヽヽ　東京　赤城あや子

神無月訪ふ人もなきわかやとにあはれいくたひしくれおとつる
ヽヽヽ　東京　小林芳子

さらてしもきのふの秋のさひしさにまた袖ぬらす初しくれかな
ヽヽヽ　奈良　栗山高子

さなかけしときあらひきぬいく度かしくれの雨にぬらしつる哉
○　大和　栗山俊子

月かけのくもりてさひしかせの森まつにしくるヽ音はかりして
ヽヽヽ　岩代　菅野和巾

洪水になかれつくせしうまや路をからすもなかす時雨するなり
ヽヽヽ　福井　岩橋花子

寢さめをは思ひわひてや小夜時雨音しつかにも降りそヽくかな
○　神戸　足立ゑい子

立よりし大木のかけもたのまれす千枝のしつくの猶しくれけり
○　神戸　足立あさ子

闇なから晴たるそらにむらしくれ星の降るかとうたかはれけり
○　下野　井上倫子

初しくれくさばにそよく音きけはふゆをつけます神のこゑする
○　大阪　木村春江子

こからしのおとたえ〲しさよ中に落葉をたヽくむら時雨かな
ヽ○　小樽　牧淑子

しくれする狩野か原をわけ行けはころも手さむし秋のゆふくれ
○　肥後　友永常子

木からしや吹たちぬらしさしのほる朝日よこきり時雨ふるなり
ヽヽ○　肥後　友永章千

むらしくれまたそヽくなり山かけに栗ひろふ子の袖もぬれなむ
ヽ○　秋田　長田せつ子

山寺のいりあひつくるかねよりもさひしさまさる夕しくれかな
ヽヽヽ　播磨　横田春枝子

香たきてぬかつくゑりに風さむくおくつきところ時雨にくれぬ
ヽ○　東京　神田けい子

訪ふ人もなきしはの戸の板ひさしいたくもたヽく村しくれかな
ヽ○　岐阜　山田ふさ子

くる人もなくてさひしき山里のかきねすきゆくむらしくれかな
ヽヽヽ　長野　關谷巳子

柩送る秋のゆふべのあれ野はらしくれ降り來てひとみなぬれぬ
ヽヽヽ　津市　神田みよし子

はれきにと母のたまひしころもてをぬらすゝをしき村しくれ哉
○　静岡　石原房子

幸なきをかこつ此の身のゆふくれにまたも時雨の袖ぬらしつゝ
○　岡山　小山松枝子

かさもたでぬれやしぬらん村時雨いまし晴間と出てゆきし子ら
○　東京　古谷化子

露霜の下そめうすきもみち葉にうれしくそゝくはつしくれかな
ヽヽヽ　相模　大谷津みれ子

はき桔梗みたるゝ野邊の夕くれにふるやしくれの音そさびしき
ヽ○　佐賀　尾方やゑ子

さよふけてさびしさまさる閨の月をたゝきて過るむら時雨かな
○　東京　青木たま子

けふも又まなくしくれてふかみとりときはの山も色やかはらむ
○　陸前　前田河千郁子

我せこのかへりいかにと待侘ふる夜半の時雨そわびしかりけり
ヽヽヽ　陸前　前田河みさを子

たゞ一人身のゆくすゑをおもふ夜に音もかなしく時雨ふるなり
ヽヽヽ　陸前　前田河きみ子

夕まくれ庭の落葉をさそひつゝふるしくれこそかなしかりけり
○　松山　上原のぶ子

さためなきものとは誰かおもひけむ冬されはまつふれる時雨を
○　松山　田村多豆子

とき衣をけふなあらひそひかし山しくれとならむ雲そかゝれる
ヽヽヽ　山口　村上操子

むらしくれ庭の木の葉のちる頃をなほふる時とさためたりけむ
○　東京　土田八重子

下そめの薄きこすゑにひとしきりそゝく時雨はうれしかりけり
○　東京　宮澤むめ子

ものおもふたびぢにまよふ草枕ころものそてにしくれふるとは
○　薩摩　松原岑子

旅ひとのころもの袖を吹くかせも寒けに見えてしくれ降るなり
ヽヽヽ　東京　林環子

ちりしける庭の木の葉にいや高く音をたてゝもふるしくれかな
○　東京　林艶子

冬木立たかくかゝれるとりの巣をおとろかしてもふる時雨かな
○　東京　敷島うた子

眞帆かた帆見えかくれして磯崎のあらゝ松はらしくれ來にけり
○　陸前　末永喜惠子

ちきりおく友を待夜のまとの戸をたゝくしくれの音もなつかし
ヽヽ　宮城　大槻慶子

よこしまのこゝろあられど誘はれて風のすかたにふる時雨かな
○　陸前　大槻初音子

夕日さす石山てらにしくるらんうきくもわたるせたのなかはし
○　愛知　永井さい子

ゆきかひの人めまれなる三山路にたひ〳〵あふは時雨なりけり
○　愛媛　樋口季子

をやみなき時雨の音にいとゝなほわびしさまさる夕なりけり
ヽ○　東京　小島榮子

つくはねにしくれ降見ゆけさははやれごしの風に冬やさぬらむ
ヽ○　東京　河合粂子

夕月のもりし板やのあれまよりあかつきさむくふるしくれかな
ヽ○　埼玉　小川政子

このはのみ敷し板やにおとかへてあかつきさむく降しくれかな
ヽヽ　山梨　標武子

秋のよのなかきをかこつねやの月を思ひみたれてうつしくれ哉
○　大阪　木村蝶子

月かげはみそらに淡くさしながら荻のかれ葉にふるしくれかな
ヽ○　和歌山　植木梅子

をち方は時雨やすらんたゝならぬくもたちまよふ冬のゆふそら

○ 大阪 佐々木あさ子

もみち散る山路を急ぐ法の師のそでをぬらしてふるしくれかな

山家菊

天

家づとに山路の菊を折りつれば
千代經てかへる心地こそすれ

愛媛 新井佳子

地

世の塵をよそに見捨てゝ住む人と
おなじ心にさけるきくかな

千葉 齋藤幾野子

人

八千草におくれてひとり山里の
うきよのほかに匂ふしらぎく

陸前 大槻初音子

○○ 埼玉 小川政子

やまさとの菊のしつくやそゝぐらむ
むすべはかをる谷川のみつ

丶丶○ 肥後 友永常子

山の井のあさきに似ぬはかほりにて
菊こそ清くさきうつりけれ

丶丶丶 薩摩 松原挙子

わびゝとの秋の友とやうゑにけむかたやまかげのいほのしら菊

丶丶○ 東京 林琪子

すむ人のこゝろも見えて山さとのふせ屋のかきににほふ菊かな

○ 東京 林艷子

うなゐさへ折りとらぬまで山里のかきほにさける黄菊しらきく

丶丶丶 東京 數島うた子

秋はぎの中にまじりてさきにけりかた山さとのしらきくのはな

○ 陸前 末永喜惠子

山里は木々のこずゑのもみぢしていろうつりよくみゆるしら菊

丶○ 宮城 大槻慶子

山里によのうきこともしらきくのはなこそ千代の香に匂ふらめ

丶丶丶 宮城 豊原つろ子

さびしくも山田もる子のうゑおきし菊をみにこぬ人はあらしな

丶○ 大坂 佐々木あさ子

十年ぶり乳母が家訪へば翁老いてかけひのあたり菊のはなさく

丶丶丶 札幌 齋藤いし子

つくろはぬやま里ちかき賤が家にかなりもたかくさけるしら菊

丶○ 愛知 永井さい子

世の中のうきをはよそにしら菊のあるしゆかしきたにのした庵

丶○ 東京 牛山楽子

垣ゆひてよをへたてたる山家にもゆかしき菊のにほひこそすれ

○ 播磨 横田春子

うつし世をしのぶのやどにわびすまぬ霜に匂へる菊をみるかな

丶○ 東京 神田けい子

つま木こる賤ならで見む人もなしおとろにましる垣のしらきく

丶○ 岐阜 豊田ふゆ子

やまさとの竹のあみ戸のうちそとにへたてぬいろの白菊のはな
、、、　岐阜　山田ふさ子

山さとのこしは垣ねになかつきのながきさかりの菊はさきけり
、、、　長野　関谷己子

賤が屋のすゝきにまじるしらぎくの中に苔むすいしぶみの立つ
、、　秋田　斎藤たけよ子

山姫のおりしにしきにまさりしはにほひそふかきしら菊のはな
、、、　津　神田みよし子

世をよそになしてくらせる山人もなほやめつらんしらきくの花
、、、　静岡　石原絹子

見るめなき奥山さとのませがきに色なつかしくしらぎくの笑む
、、、　静岡　石原房子

やまざとにつくろふ人もなき庭に色もゆかしきしらぎくのはな
、、、　東京　古谷花子

床しくも世にかくれ家の竹垣に千代をちぎりてにほふきくかな
、、、　岡山　小山松枝子

白きくの色香もきよくにほへどもみる人もなし山かげのいほ
、、、　相模　大谷津峯子

あたら世のよしなき人にふれじとや山邊の庵に咲けるしらきく
○　佐賀　尾方綾子

よのちりをへたてゝすめる山里にさくもきよけきしらきくの花
、、、　佐賀　尾方やゑ子

山の井のきよきこころにさそはれてけたかくさける庭の白きく
、○　東京　青木たま子

めつらしき色にあられとやまざとの垣根ににほふ菊そゆかしき
、、、　陸前　前田河千年子

かくれ家の柴のしら菊咲にけりたれかとはなんうつろはぬまに
、、、　陸前　前田河みさを子

山かげの柴のいほりも秋きぬとたにのしらきくさきそめにける
○　東京　土田八重子

つくろはぬ花にそ千代の色見せてふせ屋の垣ににほふしらぎく
、、、　東京　宮津むめ子

みやこ人きても見よかししつかやの山のしら菊いまさかりなり
、、、　松山　上原のふ子

しら菊の花もてかこふ山の庵はこゝろある人のすめるなるらん
、、、　松山　田村多豆子

山さとの庭のしらきくたま〳〵にとふ人にしも手折られにけり
○　山口　村上操子

見るひとのまれなる山のいほりにも菊はみやこに咲まさりけり
○　東京　小林芳子

とふ人もなき柴の戸につくろはてこゝろのまゝににほふ菊かな
、、、　大和　栗山高子

山人は老てふこともしらきくをかきねにうゑてよはひくらふる
、、、　大和　栗山俊子

山かつのいはら垣ねにさくきくもみさをたゝしくみえにける哉
○　岩代　菅野和子

山かつのみ代をいはひて日のみ旗たてし垣根はきくのまさかり
○　福井　岩橋花子

落葉つむかた山さとのまかきにも秋しらきくのはなさかりなり
○　神戸　足立ゑい子

露霜は八重に置けどもうつろはぬやま家の菊ぞさかりひさしき
、、、　神戸　足立あさ子

うつろはんことこそうけれ山里のまがきにさきし菊のさかりは
、、、　下野　井上絢子

くさがきに匂ふしらきくやれ戸より賤がゆめにも香は通ふらん
、、、　大坂　木村春江子

仙人のすみかなるらん菊のはな千代のいろ香に露もおきけり
○　小樽　牧淑子

数ならぬかたやまざとも秋は來てまがきににほふしら菊のはな
○　肥後　友永常子

やま柿のうろゝかき根にさきにけりうき世の秋もしら菊のはな
、、、　秋田　細矢はる子

山里もわかきもみぢのにしきよりいとめてらるゝのきのしら菊
、、、　秋田　畠田せつ子

やまかつがさとにもらひし菊の苗こゝろつくしの色にさきけり
○　秋田　古瀬惟子

よをすてし我み〻なしのやまさとに何きく花のさきかほるらん
、、、　秋田　古瀬りく子

杣がやもほと近からしゆくみちにいつこともなく菊のかそする
、、、　埼玉　横田政子

菊咲けは花よく〳〵とやまさとに千世をもとめぬひとなかりけり
、、　埼玉　横田やな子

きくのはな霜をかされてやまさとの垣根のつきはみる人もなし
、、、　埼玉　横田秋子

霜はるゝまがきの山の菊みれはぬれてしをれて香にほふなり
、、、　群馬　吉田露子

秋風におれたる賤がいほりにもにほへるきくのみさをうれしも
、○　羽後　佐藤かつ子

世のちりにそまぬやまかの菊のはなこゝろ高くもにほひぬる哉
○　東京　碓井のぶ子

われひとりまがきにさけるしら菊をながめてくらす山里のいほ
○　清國　富成梓子

山さとのかけひのもとに咲く菊の千代のしつくを汲む人やたれ
、○　東京　高野元子

山里ゝ菊のさかりのにきはひによをへたてたるやとともなし
、○　東京　河合象子

山里の軒はのきくのさかりにてたにのながれもちよのかそする
○　東京　吉岡總子

つくろはぬ垣ねなれとも菊の花さきてにぎはふあきのやまさと
○　東京　山口琴子

山ふかみ人もとひこぬすみかにもちよまつ菊のはなそさきける
○　東京　松本まつ子

大そらのほしかと見れは山里のまかきにきくのさかりなりけり
○　群馬　石井寛子

菊の花咲き初めしより山ざとのいぶせきやどもひとぞ訪ひくる
、、、　群馬　石井とく子

のぼり行く山また山のふせやにもいとゝけたかきしら菊のはな
○　東京　高橋珍子

なか〳〵に千代の香そする山里のつくらぬ庭にさくきくのはな
○　常陸　岡田萬子

とり〳〵にあはれもふかしやまざとの賤が伏家の黄さくしら菊
、、、　東京　赤城あや子

人目さへかれゆくふゆの山が家に千代のかざしの菊にほひけり
○　愛媛　樋口孝子

世のちりをのがれて清きしら菊のはなとゆかしき山かげのいほ
○　東京　田中千賀子

やれはてし垣根も秋はよそほひぬかたやまさとのしらぎくの花
、、、　東京　田中睦子

秋のみはしらぎくあまた咲出でゝ賤がふせ屋もにぎはひにけり
、、、　和歌山　植木撫子

やまざとは誰かとふへき白菊のつゆのたましくはなしさかすは
、、、　山梨　標武子

世をのがれ身をおくやまのしつかきに匂ふもゆかし千代の白菊

短文

地賞

夜の湖　　　　　東京　外山よし子

古たる岩の隙間より、涌來る水の音すごく、青やぎの糸をみだして、池の水面にうつらふ毎に、細波かすかによせて、水皆紋を成せり、遙かに吹來る風は山寺の鐘をつたへ、白雲西に馳せて星影物さびし

人賞

○秋の朝　　　　　相模　柚木とよ子

秋近くなりて病は癒へぬ、父に伴はれて函嶺を出づれば、鈴の音先づ聞えて、馬二つ顯れぬ老いしは眠り、若きは聲はり揚げて謠う、餘韻長く海を渡りて、白帆微かに動く、秋の朝も又面白き哉

○田家秋　　　　　群馬　吉田露子

唐辛子の紅一しほ濃く、茄子の紫は色褪せ、瓜の蔓は枯れて、つちかいせし竹に蜘蛛が網をかけた、

それが夕日に輝やいて美しいのに迷ふたか。今宵の宿にもと。薄命の蝶が來てとまつた、あはれ玉座と思ひしは己をねらふ敵の住家とは、

○喧嘩口論　　　　　岩代　菅野和子

世に、喧嘩口論程つまらぬものはあらじ、これ、一人の前にかち、一人の前に意見を徹さんとするより起る、愚の骨頂といふべし、妾は、常に弟子に教へて曰く、石地藏の前に力みて思ひ、如何に罵りても、鐵拳ふりかざすとも、彫まれし時の笑顔なり」と。

○霞浦の秋　　　　　常陸　岡田萬子

幾瀨の蘆花皆穗に出て、秋風に靡き、汀に立てる葭屋の軒を廻りて、一群の家鴨が鳴て居る、碧瑠璃の如き湖水には、紫の筑波山が眞倒さまに影を浸し、眞帆片帆點々と其上を縫うて行く、實に好畫題、繪葉書にして、都の友に贈りたい、

評　記者も配分の一人に預りたい、

○親ごゝろ　　　　　東京　高橋雪子

月夜日比谷公園を散歩しけるに、うら若き父母にいだかれし男子の、しきりに日の方に手を出して、

取らんとするを、母君には小聲にて「久方の月の桂もをるはかり」てふ歌を吟つゝ、夫にむかひ、此兒はきつと雲井まで名を上るでせう、

○暮雲　肥後　友永常子

雲なき空は綠にして太洋の如く。雲は千化萬體にして夕陽を受たるは紅。受ざるは白又は灰。是一幅の世界地圖に似たりとせず哉。さても月の御船は何所暮雲の湊より出でむとするか。

○お孃樣　播磨　横田春枝子

文明のお孃樣は、廂髮に洋式袴、靴ばきのおみ足は、歩行がお上手で、國語よりも外國語が御堪能なれど、開化とかの風も吹かぬ山里では、今も猶、髮を島田髷にあげて、お袖は長く、裁縫が御得意で、三つ指の禮儀優しきが、お孃樣。

○暮秋　東京　土田八重子

おくて田も早刈られ取り殘されし案山子の笠に時雨して、野邊の草も蟲の音も枯れ〳〵に、塵の身の夢さませとや、響く入相の鐘、せめては此音に行く秋をとゞめておかんすべもがな、嵐の紅葉霜の菊いづれも別れの惜しまるゝに

○秋祭　松山　田村多豆子

ちやうさやとよび、もてこよと、大聲にのゝしりあひて、神輿とみこしとをつき合せ、勝まけを爭へるさまの、をゝしく勇ましさ、おのづから尙武と言る旨にも叶ひたれど、見なれぬ人は、神を敬ふうへには如何あらむと、眉をひそむるもあるめり、されど、これも此里のふるきならはしなれば、老も若きも、心うきたちて打騒ぐさま、神もなか〳〵にうれしとや、きこしめすらむかし、

○今朝の庭　和歌山　植木撫子

山姫の心づくせしもみぢばも、一葉、二葉、散りそめしと、惜みしは、昨日の心地するを、今朝しも、庭に出づるに、錦のしけるに、おどろかれて、箒とるべくもあらず、ながめ居たりしに、ふと、妹の、お早うの聲に心づき、あゝ、秋もいづくに行くにか。

○吟行　京都　むらさき

颯々たる一陣の金風に落つる梧桐一葉。嗚呼夏は逝きぬ。日は暮れなんとしていづこの山寺の鐘聲ぞ。

さやけき月は美しく葉末の露を照して出でぬ。夜の世界を我もの顔にすだく松虫、すゞ虫、其中を吟行す、二人のかげ。

桔梗をおくるとて　越後　しげ子

両方の畑が余程ふくれたでせう、……おほ片タくぼほんとに見たいね……此度は髪を能く結んで居るれ、婦人の亂れ髪は見苦しいれ、昨日竹の町山へ參つて得たこの桔梗花二つ、さしあげます、しなれたとて捨てさせ給ふな、

○秋夕　東京　碓井のぶ子

秋の夕べほどさびしきはなし、空のけしきはいふも更なり、妻こふ鹿の聲、そよふくかせの萩の葉の音するしぐれの雨に、あまどうたるゝたえ〳〵に、きぬたの音のきこゆる、虫の音のよわりゆく、何れしも、

○十六夜　福井　岩橋花子

來て見給へかし月出でぬと、幼子の叫びけるに、妾忽ちに十六夜の今宵思ひ浮べぬ、あなやとて二階に行く、實にや圓かなる月は、今ぞ山の端を出でしなりけり、さやけき影にあたりの風情いふばかりなし、昨夜の恨、今家空と共に晴れぬ。

○悲しき笑み　下野　井上尙子

妹なき身に慰籍を與へし小女の雙親に、小女及び實父母の悲慘なる境遇をきゝてより、無心にもせよ、彼の笑みは悲しき笑みなり、事情を知りし我は、彼によりて慰籍さるゝ事あたはずなりぬ、否與へられても受くるに忍びぬなり。

○秋の夜　東京　神田けい子

例の宵など續く程に、秋の長夜もいといたく更けぬ、窓の桐の葉に散る音に心つけば、月や雲間を出でにけむ、軒の村竹の影それや深く誘ひ入れて、えも云はれぬ夜の眺めなり。かゝるをしと思ふ夜を徒に寢て明すらむ人そ疎ましき。同じ心に見む人もかな。

、、、留守の間　名古屋　小山かく子

二晩明けて戻つたら、机の上は丸で埃だらけ、床の間なぱ見慣れぬ移住民が占領して、手ン手にお城を築いて主人公氣取り、外廓の鐵條網には糠の樣な卒兵が算を亂して立往生、愚しやれた眞似をする子……』と一掃き拂へば、十一個の金城湯池は左乍ら木葉微塵！……。

、、、白萩　大阪　佐々木朝子

月清さ夕なりき。筧の傍の白萩、いと美しく咲き初たるに、悲調に弦める虫の音に、惱したためらひしが、心なきわざとは思へど靜かに萩に近よりぬ。露に結びたる花は重く垂れたり嗚呼、、、、月は愁れつ。

、、、秀ちやん　京都　足利八重子

秀ちやんは今年五つで。堪らぬ程愛らしい子なんだ。一輪の秋月。黃金色に緣とつた黑雲を破つて。今しも其半面を現はしたる。阿彌陀峯の頂をふり仰いだ秀ちやんい。姉さん待や。今煙の中からのん〳〵さんが出るエ。と絶叫した。

新體詩

地賞

樂しき樂園　靜岡　青柳幸子

さむきみ空に星消えゆきて

東のそらに雲たなひけば
　里の遠近にはとり鳴きぬ
　　裏の畑にかほりも高く
黄ぎくしら菊咲きみてり
柿はみのりて落つべくなりぬ
軒のかづらは紅葉して
破れし窓邊をかざるに似たり
　浮世はなれしこの里に
　　いかに自然の風淸き
　　　不義の名譽は何かせん

○

野田の案山子に秋更ゆきて
　頃の山茶花さかりは過ぎぬ
　　夕餉の煙に日は傾けり
　　　隣の翁枯柴脊負ひ
なれし小路を我家へいそぎ
鎭守の森に鐘なりそめて
くれなゐ深き窓掛もれて
冴ゆる美音の曲ならねども
　牛追ふ童のひな歌に
絶えぬ希望の響あり
　不義の名譽は何かせん

人賞

落葉

東京　井上石子

錦の山の山傳ひ、古き梭に佇めば。
狂鳥幽かに寂を啼き、冷たき風は頰を吹きぬ。
世に容られぬ我なれば、何とはなしに胸せまり。
落葉の葉摺れ譜を併せ、心にもなき高うたひ。
謡の高きは地に韻き、又一しきりはら〳〵と、
落葉彩なす目のあたり、心も銷くる思ひかな。

秋山家

常陸　岡田萬子

軒端の山に猿啼きて、風にこぼるゝゑみ栗や
赤う熟せる脊戸の柿、小雀の群も渡るなり
昨宵の雨の今朝晴れて、初茸萌ゆる小松原
籠手にせる少女等の、秋の日影を惜むらん
散りし紅葉を掻き集め、酒溫めし風流を
知らぬ與作が畑自慢、爐にてくべたる芋の味

平和の村に睦ましく　浮世隔てし樂しみは
都の人はよも知らじ

、〇毒ある矢もて　越路　松永しげ子

緑したゝる松原の
響おかしき調べある
木かげにあまの家あまた
君住む里はこゝぞかし
濱に生れし君なれば
やさしうかくもおひ立ちて
結ぶ髮のけ亂るれど
澄みたるひとみ美しや
神も心を添えまして
永くけがれにけがさじと
塵の世へだつこの磯に
あでなる君を下します
蜩の音高き松の根に
敝たる蓆わらなれど
君とたわれの遊びには
けらくはつきずおほきなか
あした青波に身を洗ひ
夕べ涼しき風すひて
しほやく煙立ちのぼる
浦べは心安きかな
君は一人子父もなく
母もなき人波になく
千鳥ばかりはあはれよと
淋しき夜にとひくとか
波にくだくる月かげの
薄き光をなほはぢて
いたきて泣きぬかげ二つ
心こゝろとかこひつゝ
ちぎり深きをまゝ母が
仲をたゝむのたばかりも
神は知りえていましめと
毒ある矢もてやかで射ぬ

〇曉千鳥　大和　栗山俊子

須磨の上野の鐘の聲　なみに消えにし曉に
何をわびつゝむら千鳥　浦づたひする聲あはれ

、〇古雛　東京　井上石子

いぢけ咲きたる朝顔の　小庭に委えし日和とて

秋なほ暑さ思ひかな
弟とのもだしに小机の　ほとりに潜む古詩書
日に洒さんと手さぐれば
小闇き壁の片隅に　怪しきもの丶觸れにたり
是れぞ一つの古雛
あ丶悲しびの世の運命　金殿玉樓永久に
榮えしみ夢は今如何に

丶○きり/\す　京都　中江かす子

秋の月、ひるよりわかくてらしやるを、そしらぬ顔に窓さして、ふせるでねえと太郎作が、小萩こぼる丶門の邊に、手織のむしろうちのべて、鄙歌きよく細なへば、おぬし一人に精出させ、わしがすむかとき色の、たすきり丶しくわやとりつ、妻のおよしが冬ころも、まきかへしつ丶うつおとの、たえま/\に聲さえて、つ丶れさせてふきり/\すなく

丶○秋の田園　名古屋　小山かく子

海原と見たる　千頃の田の面、
夕陽の映えに　黄金の波紋を畫きぬ
美果を連ねし　味瓜の蔓は
荒れし菜園に　白骨となりて殘りぬ。
黄金の色には　媚びて多きも
義人の骨をば　永久に訪ふ人もなし

丶○古戰場　肥後　友水常子

矢さけびの音今もなほ　松にのこりてひえ鳥の
こゑ吹おろす山風に　須磨の浦波立さわく

丶○怪異曲　播磨　横田春枝子

よしある君の御住居　廣き殿居の庭のうち
雲に入るなる杉のへに　梟なくよの淋しさよ
今は昔の月のよひ　七高石の主のひめが
はて給ひしと聞からに　見るもいとはし池のおも
こよひは月の影もなく　こほろぎ鳴て夜は更けぬ
をりしももる丶琴の音　さゆる手凄き那須野曲
きくは我身とわきの虫　清涼殿のそのむかし
思ひ及びて氣もうつ丶　心も夢にかよふとき

木枯の風さとふきて　灯火消えし高殿に
琴の音やみて聲もなく　空には星の影とびて
熱き氣みつる夜や三更　魔の嘲りの物すごさ

○秋の思ひ　小樽　牧　淑子

秋の上風身にしみて　ふりみふらずみ定めなき
時雨に秋の色まして　苿萱にすだく虫の音も
哀にいや増す夕ぐれに　露重げなる白萩の
立てる姿の優しさは　例へば宮の奥ふかう
まゆまだ若き姫君が　憂ひにしづむ姿の如
風に亂るゝ呉竹の　折ふしゝげき此夜頃
桐の一葉の訪れて　空とぶ雁の聲さへも
故郷の山に歸るぞと　思へばいとゞなつかしき
月かげ清う風さむみ　いづこの里かためにに
きぬたうつらんあはれさよ

、、、晩秋の譜　長野　關谷巳子

たとへば春の夢のごと　野分一陣吹きそめて
萩姫の舞はかのうて　くれ逝く秋はたそがれぬ
冬の列神が御怒のひびき　かくて來つべき世の運命
さらばひ衣の秋姫か　冷たき榮華の物語

、、、折りにふれて　静岡　石原絹子

秋きぬと目にはさやかに　見えねども風の音にぞ
驚きてゆらぐすゝきに　まれがるゝ東の空を
見渡せば月は松にと　遊かゝり小暗くなりて
眼さへ目には泪の　村時雨君に別れて
歸りつる雁のたよりも　いつしかにあはれに遠く

なりにけり心は千々に　早れども松吹く風に
さまたがれ悶えくて　今拉に袖をかへして
とゞまれる一葉の卅の　行末ぞいとゞあはれを
添へにけるいとゞあはれを添へにけり

、、、古壺　下野　井上侚子

小窓なれる香煙の　みたれて上る秋の夕
銀絲擬りほり上げし　御像に向ひほゝ笑みの
瞳ながれて古壺に
千代の盃とりかはし　友に志良賀と契てし
しろした今に傳ふなる　愛は溢れし亡き娶と
わが名刻みし古壺に
世のちりさけて山住の　身も長き代の徒然に
賤の小田巻くり返し　己が歴史よむ胸の中
笑みも涙も古壺に
破れし小袮に身を据へて　み空の月に思ひなば
奏づる尺八清き音に　みたれ小萩の露もちる
笛口しめす水は古壺に

、、、父まつ少女　大阪　木村春江子

ふけては更に月かけの　あはれさまさる暮の秋
今宵も父をまちわびて　少女たゞずむ柳かげ
風そよくと吹き出でゝ　空に一聲雁過ぎぬ
父やいかにとながむれば　月さす方にかげもなく
かなたの町の内ならむ　よなきうどんの聲細し

○常陸大洗

子の日の原を越え行けば　松疎らなる磯前や
寄せて砕くる狂瀾の　岩に咲き散る浪の花
しふきに濡れて少女等が　たじろぐ様も面白や

月の出汐の金波様　棹歌聞ゆる魚來庵
名さへ涼しき旅の宿　颶風渡る丘の邊に
千木高知りし御社は　大巳尊の御神と
少彦名の御神を　齋きまつれる大洗社
國稚かりし其時に　力戮せて二柱
天下を經營賜ふ時　こゝに降臨ませしとや
實に東海の守護神と　仰ぐ神代も忍ばるゝ哉

短歌

天賞

旅中時雨　東京　小川せつ子

さして行く里は夕日に見えながら
　しぐれにくるゝ松のした道

地賞

月下の虫　長崎　遠藤露子

月かげの光いたらぬした葉まで
　むしの音すめる野邊の萩はら

人賞

紅葉映水　群馬　吉田露子

たつた姫にしきの糸をくりかけて
　なみのあや織る秋のかはつら

○紅葉　東京　碓井のふ子
おしなへて山てふ山は紅葉して見る目はれゆくあきのながめよ

ゝゝ同　宮城　大槻慶子
さく花の春にもれたるうらみをは木々のにしきの色にあらそふ

○同　熊本　日高かす子
少女子のきぬにかうまし立田ひめおりなしにけん山のもみち葉

ゝゝ同　東京　赤城あや子
秋ふかく明りにけらしなきて見れは山てふやまは紅葉しにけり

ゝ同　備後　串畑たれ子
たひ人か紅葉のにしき見んとてか立田のかはにきはひにけり

ゝゝ同　備後　四松女史子
バイオリン音きよくしておはしまに錦もみちうつる朝紅色かな

○同　伊勢　吉田仲子
見あくれは紺青のそらくもゆれて燃ゆるはかりのもみち葉の森

○深谷紅葉　埼玉　横田秋子
山ふかきたに間かくれのはしのみち色そめわたし秋くれんとは

○菊　東京　敷島うた子
幾とせかつちがへなれし翁ぞとよはひとはましらきくのはな

○野菊　大阪　木村春江子
行く秋の形見なるらむきくのはなはななき野邊にひとり匂へる

ゝゝゝ籬殘菊　陸前　前田河千年子
やれかきをたよりて咲ける菊の花なごりなしげに香を殘しける

○秋月　越路　松永しげ子
すゝむしのこゑふり立つるあし原の穗波にうかぶ月のさやけさ

ゝゝゝ同　宮城　大槻慶子
都ひといさとひきませちりだにもくもらぬ月のかけさのやけさ

ゝゝゝ田家月　陸前　大槻初音子
わせおくてみのりし丸き月かけにしつか手わさの唄もゆたけき

○杣月　肥後　友永常子

くれぬとてまきの杣人たかねよりくたれはのほるあきの夜の月

○月前の述懐　小樽　牧　淑子

ちゝきみのみてにすかりし閨見れはむかし戀しき秋の夜のつき

ゝゝゝ月夜訪友　秋田　齋藤たけよ子

すみわたる月にこゝろもうかれつゝ友かいほりを訪ひてける哉

ゝ○浦秋夕　常陸　岡田嶌子

あしい穂にかりか音近く聞ゆなりかすみの浦のあきのゆふくれ

ゝゝゝ秋田　群馬　石井寛子

見渡せは遠の門田のもに秋見えて穂なみよせくるゆふまくれかな

ゝゝゝ田上雁　津　神田みよし子

かりのこす山田を渡るかりかれのけふのさむさに數まさりつゝ

○砧　東京　神田けい子

おしなへて夜寒になりぬしつの女かいそくきぬたの音そ聞ゆる

○くつわ虫　神戸　足立ゑい子

むさし鐙ふみたかへしと引しめて行く〳〵も聞くくつわ虫か那

○尾花　和歌山　植木撫子

人目なきこの山かけのはたすゝきたれをまねくか秋のゆふかせ

ゝゝゝ冬初風　大和　栗山高子

はら〳〵と梢のもみち散りくなりあらしの風やさわきそめけん

ゝゝゝ初冬川　埼玉　横田やな子

きりいたす筏もまれになりにけり木曽のやまかは冬や來ぬけん

○古郷冬月　埼玉　横田すま子

ふくろふの聲もきこえて冬の夜の月さえわたる三輪のふるさと

ゝ○山里冬　下野　井上尙子

枯たてるこすえに高き月ふけてしものよさむをましらなくなり

ゝゝゝ木枯　播磨　横田春枝子

淋しさやひとりるすゐの物思ひましらなくよをこからしのふく

ゝゝゝ社頭霜　大和　栗山高子

おたき山けさおく霜のふかけれは雪とみまかふかみのひろまへ

○千鳥　福井　岩橋花子

冬の夜のさゆる波路はさすかにも浦こゑかれて千どり啼くらし

ゝゝ寒夜　宮城　大槻慶子

厚ふすまかされても猶寒き夜はまづしのはるゝたらちねの身を

ゝゝゝ時雨盟　陸前　前田河千年子

大そらにたなびく雲は見つるまに時雨となりてふりにけるかな

ゝゝゝ浦殘暑　宮城　大槻慶子

萩の葉はふきかはれども薄ころもあつさは夏のまゝのうらかせ

ゝゝゝ秋月　三重　鈴木たみ子

ふく風にくまなす雲の拂らはれてひとりすみたるあきの夜の月

ゝゝゝ秋月　廣島　石田松子

秋たかく月澄むよいはことさらに松むしなくよさらしなのさと

ゝゝゝ秋月　京都　足利八重子

山もりも里にかへりてあきの夜の月のみひとりすみのこりつゝ

○秋の月　丹後　旭のり子

ころもうつ音もとたへて一つ家にいよゝさやけき秋の夜のつき

ゝゝゝ暮秋　新潟　牧しけ子

さひしくも門邊にたちてたゝひとり暮れ行く秋のそらを見る哉

○秋の夜　千葉　鵜澤淺子

さらぬたにさひしきものを秋の夜の今宵も虫のなきあかすらん

○秋の野に遊ひて　薩摩　松原岑子

世の秋のうさも忘れてあそひけりわかはらからと千草さく野に

○山里秋　京都　甲斐みつ子

里遠き小田の鳴子はあしひきのみやまおろしにうちまかせつゝ

○秋更けて　千葉　鵜澤嫩子

そよとふく風も木の葉に音のしてたそかれやみに鵆のなくなり

○東　髮　東京　土田八重子

をみな子か競ひて結ぶつかれかみしなよく見るも人にこそよれ

○折につれて　名古屋　小山かく子

思ふてはくるひつ泣きつ世を去りし人にも似たるこほろぎの聲

○折にふれて　神戸　足立あさ子

たち出し今朝にたがひて歸るさは夕日さびしきわきのみやまべ

ゝゝゝ亡き父の三年祭にはべりて　愛媛　樋口孝子

夢のことはかなく逝きし亡き人のをもいておほき昨日けふかな

○母の墓にて　相模　柚木とよ子

とむらへと又とむらへとことばなしみ墓の花のいろもしほれて

ゝゝゝ古里の友の許に　札幌　齋藤いし子

戀しさに君ます空をあふぎみてなみたにむせぶ夜半もありけり

○友をしのびて　相模　大谷津峯子

わびしさはいかばかりぞと思ふにもなみたくまるゝ秋の夕か那

○遠山鹿　松山　田村多豆子

かの山にすむ人いかに鹿のこゑよそにきくだにかなしきものを

○詠史　陸前　大槻初音子

山吹のみのなきはなをいかにしてちゝの言葉のたねとなすけん

○饅頭　岐阜　豊田冬子

いつのよにたがなつけけむ春ならでつてに朧のつきといふらむ

俳句

天賞

すゝき　東京　岸田倭文子

穂すゝきや月の雲掃く玉はゞき

地賞

虫の音　信濃　喜多川園子

人は寢て虫の夜にしつ西の京

人賞

柳　神戸　足立ゑい子

一本の柳久しう散りにけり

○　常陸　岡田萬子

、○五畝の宅皆白菊を植にけり

、○師の僧の硯を洗ふ小春哉

○朝寒の膝に這よる小猫哉

○御手洗の底にも沈む木の葉哉

○二三本小松の上の芒哉

、○時雨けり三十六の京の山

、蘆の花靡きて淋し浦の秋

○　松山　首藤さと子

、○歌よみの女宿るや菊の花

、、菊酒にほろ酔覺す欄間かな

、、、菊合せ妹は姉に勝ちにけり

、、、菊見客唐紙に賛を求めけり

○　神戸　足立ゑい子

、、、君か代や垂穂の稲の畦枕

○言の葉に申すまでなり初月夜
、、寄り付に立つ新米の相場かな
○散る日から盛りになるや萩の花
○月の下ばかり波立つ今宵かな
○出て見ればならぬ音する花火かな
、、、茸狩や山を下りて腹の減る
、、○雨の日は錦織りけり龍田姫
○流よりも上に道ある紅葉かな
○秋風や水のうへだけ白う吹く
○月かげに家は見えねど小夜砧
○露の音物慕はしき夜成けり

○　肥後　友永常子

○麻の音を今宵きゝたし秋の月
○立鴫の羽たゝきさびし秋のくれ
、、、つな引の人こゑたえて更る月
、、、更るまに霜をかさねて打きぬた
○はせを葉もやふれて寒し秋の雨

○　相摸　柚木とよ子

、○茶の花や藥屋に飯の煮ゆる音
、、高欄や洛中の灯のほのゆらぎ

○夕顔や風呂に月浮く十三夜
○さゝがにの糸の亂れや枯尾花
○大佛や夕日斜に紅葉散る
○秋闌けてオレンヂ色の清水哉

○　東京　木内鴎子

○秋の日や桶つくろへる犬聖
、○禪僧の昔がたりや秋の月
○禪寺や迷入るべき萩のみち
○雪隠の窓にさわぐや桐の影
○草刈の女笑ふやわきのかせ
、○上人の説法もよしひがん餅
○培ひしカンナの花や秋の風
○日車や月にかたりしその昔
○廻廊に才女出ますや燥の月

○　新潟　牧しげ子

、○秋立や風そよ〳〵と額髮
○苫はねて舟子の覗く今日の月
○歌學ぶ窓近うきく〳〵す
、、、朝寒むや浦の苫屋の細烟り
、、、秋立や風そよ〳〵と草の上

ヽヽヽゆくりなく鹿矢見付けし芒かな
東京　勝屋圓子
ヽヽヽ入行けばしなだれかゝる芒かな
ヽヽヽ刈り終へて十馬に余る芒かな
ヽヽヽ大原女の脚絆ぬれけり草の露
東京　谷口貞子
ヽヽヽ奥嵯峨や文使ぬれし夜の露
ヽヽ草原の露にぬるゝや石佛
〇さすらへの日記ひもとく夜長哉
東京　堀田たけ子
ヽヽヽ雁鳴くや或はひくし沼の水
〇秋晴れて馬子唄高し峠道
ヽヽうたゝねの夢おとろかす鹿の聲
群馬　あさ音
ヽヽヽ山里の子供よろこぶ木の實哉
ヽヽヽわさ寒やふとんの中の子守唄
群馬　大澤あつ子
ヽヽヽさを鹿のひれふる聲や秋の雨
ヽヽヽ香も色もいとゝけたかき菊の花
ヽヽヽ菊活けて金婚式を祝ひけり
松山　岩崎きよ子
ヽヽヽ窶れ近く疲れし足や菊の花
ヽヽヽ妹子が垣根に作る菊の花
ヽヽヽ折り添へて菊の祝句を送りけり
〇逃したる菊盗人や晩の月
ヽ〇ふくろふのなくや野中の無縁塚
大阪　木村春江子
ヽヽヽ君逝きて秋風寒むき歸省哉
京都　高丘治子
ヽヽヽはか守りと秋のものうを語りけり
ヽヽヽ白露や天之河原の磯の音
相模　柚木とよ子
〇川や秋蝶のむくろを流しけり
〇訪れも優しき蝶の羽音かな
ヽヽヽ磯や秋開けし噂の玉手箱
ヽ〇月すむや折から渡る雁のむれ
相模　大谷津みれ子
〇萩咲くやかすかに走る秋の水
ヽヽ千代ときく名のみもうれし菊の花
松山　上原のぶ子

〇酔人のかほよりあかきもみぢかな
〇ふときより先とりほころきのこ狩
〇張り替し障子の目立つ夜寒かな
東京　土岐ゆき子
〇菊抱いて急く花屋の娘哉
〇昨夜焼けし長者が庭や秋の風
ヽヽヽ白菊を活けて翁の笑まひ哉
ヽヽヽ蛤の匂ふ桑名の時雨哉
横濱　高橋つれ子
ヽヽヽ皆低くなりし思ひや冬の山
〇冬されや松葉かき居る海士が妻
〇月はかり静かに更ける師走哉
〇肌寒や酒屋の門のつなき馬
〇椎の實を拾ふて重き袂かな
ヽヽヽ道傍に落ちたる柿の歯形哉
大阪　佐々木朝子
ヽヽヽ柿一つ庇に落ちて夜更哉
ヽヽヽ小萩原わけ出て見れ古石碑
伯耆　長田ふみ子
ヽヽヽとりあへず道のしるべや見こし松
〇あはれなる小はぎが袖にざるゝ犬
〇窓近くほろりと落ちぬ桐一葉
高山愛子
〇白百合やをばしま遠く溪の中
〇虫はまだ殘りをなきぬ午の刻
ヽヽヽ我が母の針目あやふき夜寒かな
ヽヽヽ天然のめぐみに咲し野菊かな
北海道　池田よし子
〇病む母の枕に散るやけしの花
東京　本橋つや子
〇車推す女美くし小松原
〇白鳩の神苑淋びし落葉か那
〇椎一つ落つや野寺の晩鐘に
〇富士高く柿もぐ竿の音高し
ヽヽヽ青苔の古碑を覆ひて蔦紅葉
ヽヽヽ初霜に萬兩の實のこぼれけり

女鑑投稿懸賞規定

本誌第十七年第一號より、詞藻欄を、別項記載の如く、誌友諸君の領分とし、

從來の和歌兼題二、兼題外和歌、新體詩、短文、俳句の外、小説、隨筆、日記、及家事に關する事何にても投稿を歡迎す、

賞金は天賞一圓、地賞五十錢、人賞は三十錢とし特に秀逸なる作品に對しては、それ以上五圓以下の賞金を呈す、また入選の作にて特に佳作と認むるものには、繪畫を挿入し、錦上更に花を點すべし、

明治四十年和歌兼題

一月（岩水　雪中梅）　二月（鶯　月前柳）　三月（春風　春雨）

四月（山花　落花）　五月（更衣　小野小町）　六月（梅雨　螢）

七月（池蓮　納涼）　八月（初秋露　常盤御前）　九月（秋夕　行路薄）

十月（海上雁　たゞ詞書）　十一月（水鳥　寄鶴祝）　十二月（落葉　歳暮）

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊	前金五拾七錢
六冊	前金壹圓拾錢
拾貳冊	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六十四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十九年十月廿八日印刷
明治三十九年十一月三日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　株式會社國光社
東京市京橋區築地二丁目二十番地
右代表者　橋本忠次郎
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋八八八番）

女學及家庭書類

著者	書名	冊數	定價	郵稅
島田佳矣・野口駿尾 共著	女子技藝 編物模樣圖案	全五冊	松ノ卷四十錢 櫻ノ卷五十錢 藤ノ卷五十錢 菊ノ卷五十五錢 梅ノ卷五十五錢	各二錢
棚橋絢子著	女道叢話	全	金三十錢	金四錢
三輪田眞佐子著	女子之本分	全	金二十五錢	金四錢
三輪田眞佐子著	女子處世論	全	金二十錢	金四錢
磯部武者五郎著	家計簿記法	全	金十五錢	金二錢
藤野天城著	女子小觀	全	金二十錢	金四錢
堀內新泉著	女樂師	全	金卅五錢	金六錢
松川霓州著	結婚と家庭	全	金十五錢	金四錢
堀內新泉著	家庭の鑑	全	金十八錢	金四錢
女鑑編輯局編	女鑑叢書 ひめかゝみ	全	金二十五錢	金四錢

女鑑

明治三十九年十一月三日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾六年第十二號　第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷